

佐々木信細
印東昌細合著

美文
韻文
磯
馴
松

東京博文館藏版

わが弟さいつ年病を得、そをいやすべく、松骨く波白き鏡が浦に移り住みて既に六年。都に出るは、春毎の竹柏會のまごぬの折のみ。あるは鷹の島沖の島を舟こぎめぐり、あるは白濱根本の濱邊にあさり、あるは清澄山鋸山の頂にのぼり、あるは醫師のもとに薬まつあした、流笛の音波に響く夕べ、あるは雨寒き秋くれ方、一人ある旅居の窓の寂しさにえ堪へずして筆とりし文。あるはいさげなき村の子の中にまじりて、土筆草など摘みつゝ、ふと胸に浮びいでし歌。その折々、紙のはしにかいつけ置しが、積りくゝて數十篇にいたりぬ。近き頃吾もそこに書を寄せて曰く、もごより汐風にみなれそなれし磯馴松の、都の文の林にはえを競ひ色を争そはむの心にはあられど、年経て住み馴れし安房の浦の紀念として、いかで世に出さまほしう、ごいひおこせぬ。鏡の浦は我も二たび三たび遊びてゆかり深き地、さば吾歌文をも取り添へてご、ごに我兄弟の歌文集磯馴松の稿は成りぬ。もごより大方に示すべき程のものなられど、幸にこりみむ人もあらばごて。

竹柏生識

景色よき鏡が浦の御旅住居、其折々の御歌拜見仕候。六七年前
 まだ東京に居給ひし頃のと、今日此頃のとを見くらべ候に、題
 目と云ひ、着想といひ、やゝ變り候やう覺え候。そは君が境遇
 の變化より起れる自然の結果にて、近年の御歌の中に、旅館、
 舟、玉章など様のもの多く見受けられ候も、道理と存上候。

『書さそへて又書さそへて玉章のあまり長くもなりにけるかな』
 此御歌は、寂しき旅の窓の下にて、なつかしき都の友の事など
 思ひいでて、俄に机にむかひ、書さそへく、書けども盡さぬ
 玉章の、あまりに長うなりゆく實境その儘を、三十一文字に寫
 し出され候ものよと推量仕候。文字にまばゆき飾もなく、すら
 くとして趣なき歌の様なれど、これには輕妙の妙こもり居候。
 總じて輕妙は君の得意と存上候。全智全能の神のごとき天才は



ともあれ、我々どもの、おのが得意をすて、おのらぬ方面にむかひ候は、不得策かと存候へどいかゞ。あなかしこ。

小花清泉 えるす

* * * * *
そなれ松、名をきくだになつかし。そなれ松、見る楽しさを何にかたとへむ。こゝ、わたの南の果安房の國、さ緑にすめる鏡が浦、よぞれたる身洗ふべく、けがれたる心清むべく、いたづき爲にいえ、災爲にきゆ。

天つ神、八百萬の神と神はかりにはかりて、この靈地をつくりとことはのいでまし所にあてしか。抑また、天の下青人艸の爲にとてつくらせ給ひしにか。風もけがす事を得ず、雨も濁す事を得ぬ鏡が浦、神ながらならじやは。

此浦をして如此く靈地ならしめしものは何ぞ。此浦の眼は何處ぞ。此浦の魂はた何處にか宿れる。問ふ事なかれ。いはずもかな。こゝを靈地とならしめたる事、唯二つの島これのみ。曰く鷹の島、曰く沖の島。これなむ二つの眼。これなむ荒魂和魂。此二つの島をして靈ならしめしは如何。そなれ松これのみ。大きな岩の上に、荒き波の上に、あるは龍の蟠るが如く、あるは虎の嘯くが如し。天つ少女は、朝宵ごとにこゝに小琴をかけ置きて、絶えずかきならすらむ。國つ少女は、晝夜ごとにこゝに小笛をそなへ置きて、絶えず吹きならすらむ。其聲常にさやかなり。

鷹の島、沖の島、二つの島より松を取去らしめよ。残るもの、禿げたる山一つのみ。鏡の浦より島を取り去らしめよ。残るも

の、趣なき池一つのみ。

ある夏、師の君に伴はれて、北條にもものしつる事ありき。そは此鏡の浦邊に、病を養へる昌綱の君がりとはんとてなりけり。共にく相率ゐて島にのぼり、松蔭にゐて歌がたりしつゝ、あたるの景色に酔ひて、日一日遊びくらしぬ。そを思ひ出る毎に未だかつて、昌綱の君を思ひ出ざる事なし。思ふこと二つあり。二つとは如何に。一つは君がこの神の境にありて、歌にうたひ文にあやなす事、一つは君が病を忘れて、いつも筆とることを怠らざる事、是なり。

今や、この二つのもの積りて一つの集となり、連なる枝の緑をさへ折そへ、名づけてそなれ松と云ふ。そなれ松、名を聞くだになつかし。そなれ松、見る楽しさを何にかたとへむ。

鏡の浦の靈は、此集によりて、人にも傳はり、世にも傳はらむ。この集よ。この集をのみし心よ。鏡が浦を靈地にせまく掟て給ひし天つ神も、いかに嬉しと思しめさむ。其嬉しとおぼす御心は、君がいたづきをいえしめて、ますくこの靈地をわらはすべくつとめしめむ。

病ありてだに怠らぬ君の、病いえてつとめむにいかにかに。積りくゝて、そなれ松の續篇後篇と、いやますくにあつめなして、造化の神秘、のこらす其集の中にあつまらむ。己れは其一日も速かならむ事を祈る。

あはれそなれ松、名を聞くだになつかし。あはれそなれ松、見る楽しさを何にかたとへむ。あはれそなれ松、つぎ見る楽しさましていかならむ。

千歳の松、御濠の上に木だれたるさまを、直に見渡す富士
見街の客舎、松葉館の樓上に於いて、石樽千亦ゑるす。

珠の如くわきいでて、響ある水の、麗しき珠の間に流れなば、
其響は更に美なるべし。

珠の如き詩思を抱きて、美の神のさゝやきに聞きやすき病の春
秋を送り、まかも自然の美に朝夕を慰むるは君ならずや。

房總の濱、海をへだて、富嶽の美と對し、朝暉、晚暝、松風と
浪聲と、清き地、爽なる地。

此自然の、病を養ふ君をして 歌はしめたるもの、此集の美や
それいかなるものならむ。

長 紅 雪

わたつみのひびきをかへす磯馴松

自然かみのたなれの緒琴なるらむ

川 田 順

君病みてすでに幾とせ。

長き病いまだいえなく、

たゞひとり旅寐の空に、

あした夕べ聞馴れにけむ、

松の風荒浪の音。

悲しとも君は聞きけむ。

さびしとも君は聞きけむ。

然らのあれど限かえられぬ

天地の神のみこゝろ、

病なく物おもひなき

諸人の知りえぬ極み、

やめる身の君がこゝろに、

けがれなく映りたりけむ。静かなる自然のすがた。

さまざまの人の世の様。

人まれぬ響にのあれど、

岩が根の眞清水なして、

麗しく清き其うた。

世に遠きみ山のおくの

君が胸の底ゆわきいでし

末遠きゆくての道に、

苦しくも飢てかわきて、

迷ひゆかむ幾その人が

たへ難くなやめる胸に、

響くらむ其水のおとか。

たれか人、こゝろある人、人の世になやみなくてあらむ。

君をしてとはにやましめよ。君をしてとはに歌はしめよ。

うるはしき清き其うた。

村岡典嗣

折ふしとうで出でける思ひ出草。父母君のみ膝の前に眞向きに

なりて小さき袴の折目をたゞし、襷ふくらかに手を置きて、動きてのならじとのやうにおとなびて口を結びかしてまりぬ給へる、こは十とせ餘りの昔、榎園にて師の君と共に人々の寫しつる寫眞の中の昌綱ぎみなり。十ばかりにてや在しけむ。其頃は愛らしき足取りにて仕舞をまひ給ひ、幼なき筆つきにて、さはれ巧みに畫をも物し給ひつるよ。父母君にこそ果敢なうも疾く別れ給ひつれ、いやましに枝葉榮えまげる榎園に、みいつくしみ深き兄君のみ袖の蔭に生ひ立ち給ひて、いつしかもけなげなる詩人になり出給ひけるよ。こゝに妙じき名を與へてこたび君の出し給へる一卷の書。あけくれの浪の聲に自然の音調をまねび、時に叶へる雨風に、枝ぶりおもしろう姿かいつくろへる磯馴松の、しかにめづましくも興ある調を世に奏でいづべきか。おはれ

父母君いましてそをき、給はゞと、思ふは、只其口惜しさにて。

大塚楠緒子

昔、山靜かに水清き湖のほとりに生れいでしうた人ありけり。
 こと業まげき世中には立ちまじはらずして、長き一生を唯うた
 思ひつゝ、ぞ其湖のほとりにすぐしける。さればよみいでしうた
 おのづから其あたりの景色にかよひて、清く氣高くおだやかな
 る心にみちたりけり。湖邊の詩人とぞ世に傳へられたる。それは
 異國の事なるべし。さるためしをまねび給ふとにはあらねど、
 わが昌綱の君、賑はしき都をいでて、風おだやかに波あたゝか
 き鏡が浦のほとりにうた思ひつゝ、八とせの月日をすぐし給へ
 り。されば御暇多き朝な夕な、見はるかし給ふおほ海の浪の、

荒きまらべの中にかすかにやさしき響あるをも聞きのがし給は
 ず、磯べの松に夕べの風のさゝやく聲をもさゝとり給ひ、又あ
 る時は、寂しき野ぢの艸がくれ、只一つさける花の、聲なく匂な
 くて、ありとも知られずまぼみはつる恨をも思ひやりたまふ。
 かくてよみいで給へる歌、數おほく積りぬれば、こたび一まさ
 となして、友とかすまへ給ふ我等にわかち給はらむとす。嬉し
 きたまものなるかな。打よむまゝに、新しき海の風は、都の塵
 に息あへぐ我等の胸を吹き清めむとす。嬉しく珍らしきたまも
 のなるかな。まかへあれど、人によるこびと望とをあたへ給ふ
 君のしも、御身いと弱うして、かりそめの風をも厭ひたまふ。
 ますらをの御心の内、人にこそは語り給はね、物いはぬ御空の
 星に夜なく語り給ふ御恨のかすゝいかに多からむ。いかで

かしこに送り給ふ一とせ毎に、御身漸く強うなりて、やがては
 高き山の雪をも分け、廣き野の風にも思の儘に吹かれ給はむ日
 の、一日も早く來れかしとぞ望まるゝ。君が友とし給ふかの磯
 のそなれ松、こよひ濱風いかに寂しく寒く吹くらむと、遠く遙
 に思ひやりつゝ、御行末を神にぞ祈る。遠くはるかに。

片山廣子

* * * * *

久しう御たよりも承はらず候を、いかにかすごさせ給ふ。動か
 ぬ舟にきゝ給ひしよるひるとなき波の音も、今は全く冬のゑら
 べとやなり候ひけむ。さても夏さり秋もすぎて、寂しうのみな
 りまさるらむ旅宿の御つれづれには、何をかせさせ給ふ。こゝ
 には、ゑぐるゝ夜など、すびつのもと戀しう、なすこともなく

只管其もとにのみ寄りぬ候。さて過古の夢をのみ繰返しぬ候。近
 き過古のつらき思ひ出は、あまりに苦しう候ほどに、遠きゝ
 過古の罪なき紀念をのみ繰返し候て、今宵もそれにふけ申し候。
 猶覚えてやむ給ふ。都にのぼりまして程なき頃、始めてよみ給
 ひし『駿河臺のぼりて見れば小川町雪まつ白にふりにける哉』と
 の御歌、今夜も其雪にやならむ。いと寒けく候。風一わたり軒端
 をめぐりて、近わたりの木立をすぎゆくと思ふかなたに、犬の
 聲いたし候。犬の聲。犬の聲。かく申すとも早忘れやし給ひけ
 む。そのかみ共に物へゆきし歸さ、駿河臺の片ほとりをすぎし
 事候ひき。つゝ袖に袴短かう着給ひて、少し先だちてゆき給ひ
 しが、かたへの細き路にそと隠れ給ひつ。こゝわがそこに行き
 つきし時、つといでて驚かさむの御心なるべし、と思ひつゝゆ

き候ひし程、思ひかけずけた、ましう叫びて走りいで給ひき。
 人を驚かさむとし給ひしに、こは又何に驚かされ給ひけむと見
 るに、彼の垣の内より小さき犬嬉しげにまつはり出たるなり。
 あまりの御驚きといそぎ犬を追ひやりつ。それより御家までの
 道を、わが袂まかとりてはなし給はざりし事、猶俤に見え候
 を、そこには村長の門もる犬の御おと慕ふとも、今にげいで
 もま給ふまじと、ひとりほゝゑまれ申し候。かゝる事思ひつゝ
 け候折ばかりぞ、まばし現在の苦しびをはなれ候。あまりのは
 かなし言と笑はせ給ふな。はや夜もふけ渡り候ひけむ。又一し
 きり遙にはゆる彼の聲きこえて、やがて静まり候。風もねぶり
 につき候ひけむ。いでや此筆もいねさせ候はむ。かしこ。

橘 糸 重 子

磯 馴 松 目 次

歌反古(短歌).....	昌綱.....	一
わたし舟(新体詩).....	信綱.....	二二
思ひあまりて(同).....		二三
わかれ(同).....		二四
歌屑(短歌).....	昌綱.....	二五
はなれ小島(新体詩).....	信綱.....	四八
夕べ憂に(同).....		四九
池(同).....		五〇
名もなき小川(同).....		五一
その折々(短歌).....	昌綱.....	五三

寒さちまた(新体詩)……………信綱……………七一
 幸なき花(美文)……………昌綱……………七七
 雪の日(同)……………八一
 縁日(同)……………八六
 房總漫吟(短歌)……………信綱……………九二
 臥龍松(美文)……………昌綱……………九五
 さびしき夕べ(同)……………一〇二
 逍遙(同)……………一一一
 秋のみちのく(短歌)……………信綱……………一一六
 大つごもり(美文)……………昌綱……………一二三
 ふな着き(同)……………一三二
 春のみちのく(短歌)……………信綱……………一三九

乗合馬車(美文)……………昌綱……………一五〇
 根本の夕べ(同)……………一五九
 信越遊草(短歌)……………信綱……………一六二
 少女ごころ(美文)……………昌綱……………一六七
 かへり道(同)……………一七六
 暖簾口(同)……………一八二
 虎十首(短歌)……………信綱……………一八五
 明日のわかれ(美文)……………昌綱……………一八七
 交通遮断(同)……………一九七
 老車夫(同)……………二〇一
 刀根川ぞひ(短歌)……………信綱……………二〇八
 冬の夜(美文)……………昌綱……………二一二

菱花亭(美文)……………二二三
 月なき空(同)……………二三二
 磯の藻屑(短歌)……………信綱……………二三六
 雨夜のすさび(美文)……………昌綱……………二三九
 まさご路(短歌)……………信綱……………二四七
 濱邊の朝(美文)……………昌綱……………二五一
 磯めぐり(同)……………二五七
 鹿野山の一(同)……………二六八
 硯の物語(同)……………二七五
 元旦(同)……………二八〇
 病院の一時間(同)……………二九一
 潮止橋(同)……………二九九

船のうち(同)……………三〇三
 清澄山上の朝(同)……………三一〇
 おぼろ夜(同)……………三一二
 花どめ衣(同)……………信綱……………三一七
 妹へのふみ(同)……………昌綱……………三三二
 喫烟室(同)……………三三七
 友への書(同)……………三四一
 折々草(同)……………三四七
 日曜の朝(同)……………三六六
 秋の雨夜(同)……………三七一
 我世の友(短歌)……………三七四
 文反古(美文)……………三八二

かつぐさ

花さきそめし

なでしこの花

ちよほよの

みたまの前に

まづさよげばや



磯 馴 松

歌 反 古

昌 綱

繪具皿とりちらしたる窓の内に

あるじのあらず鶯の鳴く

二すぢの野川の水はいであひぬ

ねぶの花さく下陰にして

折あしく風さわがしき夕べ哉

又もや君は來まさざるらむ

みやしろの軒端は朽ちて髪きりし

女の繪馬のあたらしきかな

花かげにすぎこし夢やかたらはむ

二人のはかいたゞ蝴蝶のみ

風にちり雨にうたれて柿の花

實となるべきは少なかりけり

一くだりいかで消したる跡ならむ

おもしろからぬ君が玉章

何事もまだとゝのはぬ借家の

みなみの窓に梅の花さく

月ふけし並木はづれの居酒屋に

居残りて飲むふたりづれ哉

わが病すこし癒えたり春風の

麥はた菜畑ゆるく吹くころ

いつの頃歸りますぞと問ひたりし

その夜に似たる雨の音かな

此あたり橋あらばとも思ふかな

柳一里の川そひのみち

母君をみとりせし夜の夢さめて

曉さびしさみだれのおと

見るまゝに心もとほくながれけり

一筋しろきさと川のみづ

柴栗は母君ことにめでたまふ

これもいさゝか家づとにせむ

書き添へて又かきそへて玉章の

あまりながくも成にける哉

此世にて又のあふ瀬はいかゝあらむ

後の世あらばその國にして

岩の上は君とわれとになりけり

さらば語らんこしかたの夢

いもうとの病はいえずひな祭

さびしき窓に桃の花さく

ますらをの胸の底ひにをさめおかむ

君いふなかれ我も亦いはじ

花嫁の車つゞきてゆくあとに

まばしとよめく村境かな

乳母が里に此一年をあづけられて

かなしき文は箱にみちにけり

かなたより来るは彼の人この道の

ほかに道なし来るは彼の人

笛のねは門にとだえてほとくと

たたく手ひくし朧夜のつき

せめてもの其音づれも絶えにけり

何をわが世の慰めにせん

貸船は皆いでゆきて川そひの

ふな宿さびし庭鳥のこゑ

子守さり館屋かへりて観音の

御堂まづかに春の雨ふる

三年やどりし若き畫工歸るあさを

たそや霧のうちに村長の園

雨くらしき旅居の窓をおしあけて

傘のゆくへを一人見るかな

水うちし木の下かげの夕月夜

なるや隣の小つゞみのおと

夏草のまげみと共に刈られゆく

土筆のはてのあはれなる哉

門邊まで見送りきての言の葉よ

我世のかぎり一人泣けとや

わが心などかく弱きかの折に

など定かにいらいらへざりけむ

なき跡を思ひつゞけて一日一日

はかなくたもつわが命かな

畫師は去り子らは歸りて中川の

渡し場さむく秋の日くれぬ

よそながら唯よそながら君を思ふ

思ひは罪にあらじとぞ思ふ

かくまでに苦しめられて捨られて

猶いつまでかいき残るらむ

あるを願ひあらぬを願ふはて〜

われにもわかぬわが命かな

虫干の書のなかより見いでけり

さがしもとめし友の玉づさ

すこやかになりし我子を伴なひて

くすしがりゆく春のあした哉

それとなくさとしましつる伯父君の

み言葉いかでもどきたりけむ

かきをへて十歩あゆみし砂の上

かへり見すれば我歌のなき

夜芝居の木の音ちかく聞ゆなり

蚊帳かやつるまどの片われの月

つくぐと思へば悲しわが墓に

詣でん人よいくたりかあらむ

聞かさんか聞すまじきかほゝ笑て

迎ふる妻を見ればかなしも

つらかりし昔の人にいで逢ひぬ

いで湯の宿のさみだれの頃

乞はれていいなみかねつゝ菊の枝

残りすくなく成にけるかな

獨ゐのたびゐの窓のさびしさも

忘れてぞかく君におくる文

我病いえてはたらく身とならば

君がなさけにまづ報いばや

十日たち二十日と立ちていつよりか

遂にたよりのなくなりけり

僧一人のせて船子のわたすかな

水上くらき雪のゆふべを

氷屋の小旗すゞしき柳かげ

馬もいこひぬ人も休ひぬ

われ知らず流るゝ百合をすくひあげぬ

この川上よ戀人の村

泣きし子のねぶりにつきて梅雨の

晴間しづけき窓のうちかな

夢にみし樂しき園の花のかげ

いつの世君とそこに語るべき

糸もひかん鍬もとるべし今日よりは

君と二人の世にはあらずや

母の背に空をあふぎ見る幼子が

目によく似たる星の影かな

朝戸出の春雨をがさ宿の名を

ふとくゑるしゝ春雨を傘

神います花の園生にかたらひし

人うつくしく花うつくしき

旅の宿のねざめ身にしむ朝床に

思ふ事多し人の上わが上

川そひに人まつ秋の夕月夜

來ると來る人皆あらぬ人

菜の花の花のなかより蝶一つ

まよひいでたる春の夕暮

をやみなき雨の夕窓あけて見れば

黄なるうばらも又散りにけり

定め得ぬ胸をさだむと人しれず

ひきし御圍は二十三の凶

暮れぬ間となど歸るさを急ぎけむ

まつ人もなき旅の宿りに

半より書かずなりにし去年の日記

とりいでて又思ひいづる哉

乳くばる村の少女が結綿ゆひわたに

ひと花さし、野路の白菊

おこたらぬ朝なくの濱ありき

十年の病いつかいはべき

籠こに入れて船につみ入る、庭鳥の

明日の命をあはれとぞ思ふ

はのくらしき杉の下道ゆきゆけば

水海しろく鴨のこゑする

手傳ひのその人数に頼まれて

君が門田のさなへをぞとる

夕づく日波の上遠くかたぶきて

船と船とのとはざかりゆく

竹藪の中の小ながれ小流の

右にひだりに山吹のはな

辻うらの賣聲とはく雨にきえて

旅ゐの窓の夜半の寒けさ

鶯の餌をとりかへて床の間の

花さしかへて友を待つ哉

秋風の身にしむまゝに海そひの

廣き旅やかた我のみにして

君と見し川添みちの若やなぎ

老にけらしなわが老しごと

朝霧のふかき松原さむからむ

この衣きませ袖せばくとも

送葬はふりいま終へてさびしき古寺の

門のいてふにもず鳴さしきる

やみませる母の御心なぐさむと

置きならべたる朝顔の鉢

桐の花ちりくる門の立ち話

糸屋の妻の髪うつくしき

とあらむかかゝらむかとの疑ひも

逢へばきえゆく胸のうち哉

唯ひとつうり残したる竹の子を

になひて老翁おぢの唄うたひ行く

あらざりき送らん人はあらざりき

唯いたづらに貝を拾ひぬ

近道をわざとはづして夏の夜の

月にゆくく君と語らふ

草の花まさぐりながらいつ迄も

唯一言のいらへだになき

古びたる文庫の中に見いでけり

君が昔のなさけある文

病いえて都にかへる日はいつぞ

鏡にうつるおもわ寂しき

しめくと秋雨そと窓のもとに

はなれて遠き人をしぞ思ふ

かへり路に人のいひたる一言の

などかく胸を離れざるらむ

かひもなき事な思ひそ飲めや君

をがめの酒はいまだ残れり

海にいづる一筋道をゆき歸り

ゆきかへるまに月は登りぬ

炭がまの烟ひとすぢ雲に入りて

雨に暮れゆく夕ぐれの山

大方はいづこかけて籠の内に

入れんと思ふ貝のすくなき

心中しんぢうのうはさ高かりし川のはとり

薄ほにいでて秋の風ふく

何やらむ白き花さける家の門

女ものを問ふ春の夕ぐれ

名も知らぬ碑いしづみのもとに咲にけり

椿の花の白さとあかきと

雲雀よりほかには聞かぬ春の野に

猶いひよどむわが思かな

何事か一人ごちゆく澤の市が

やれし頭巾に秋の風吹く

よる波に驚ろかされて幾度か

所かへたる岩のうへかな

すげなくもいひて歸し、妹が影

まだ菜の花のあたり也けり

あれ迄に契りし人のいかなれば

知らぬ顔して桑を摘むらむ

三人ゆく少女が中のその一人

つれなかりつる人かあらぬか

たえまなく念佛ねがひとなふる老人の

乗り合せたる船のうち哉

ちひさなる草履の跡の残りけり

あかつき寒き橋の上の霜

み空ゆくかりがね寒しこの夕べ

君思ひいづやわが思ふごと

幾たびもとまると見せて姫百合の

花のまはりを遊ぶ蝶かな

何事かの、しりあへるわたし場の

柳にかゝるゆふ月のかげ

今宵はと心ばかりのまうけさへ

あだにふりぬる秋の雨哉

町はづれ月朧なる畑みちを

芝居がへりの人語りゆく

かへり行く友よびとめて咲そめし

黄菊ひともと折てやるかな

うつし世に二度語る春はあらじ

花の下陰夜はふけぬとも

寂しさを誰と語らんかゝる時

わが思ふ人の音づれもがな

黄金いろの蝴蝶となりて此あした

春の女神の野邊におりたゝす

待つ人のこずとのたより今つきて

落葉をたゝくよるの雨かな

人の世のつらさ忘れて炭焼の

老翁をぢがいほりに今日も語らふ

唯二人をぶねに乗りて嶋のあたり

めぐると見ればさむる夢哉

此夕べあまりに物の悲しくて

又も訪ひきぬ君のおくつき

思ひかへし思ひかへせど又更に

我身の上のなげかるゝかな

人ゆきつ人生れきつかくて世の

はてよいかにならむとすらむ



わたし舟

みづの流へまづかなり
さをさす翁こゝろなし
岸のむら蘆うきふしの
繁きへだてに別れつる
二人の人はゆくりなく
一つ小舟に乗りあひぬ
心はもとのこゝろにて
思ひへもとの思ひにて

信

綱



思ひあまりて

おもひあまりて山に入り
こひしき人の名を呼べば
たゞ山びこぞこたへける
思ひあまりて名を呼べば
やまびこのみぞ答へける



わかれ

舟のうごきいでぬ

今日たち別れ又いつかあはむ
いま一たびとうち見かへれば
夕日波にしづみて磯山くらし
さらばよ古さと
さらばよ彼の人



歌屑

昌

綱

汐風に吹きしをらるゝ磯馴松

それにも似たる我身なりけり

雨そゝぐ戸田の渡しの柳かけ

川せみ鳴きて人影もなし

春風はやまひの床を音づれて

やゝ心地よき昨日今日かな

はゞからむ人なき海の船の内に

などわが思うちいでがたき

竹村のかげゆく道のをぐらきに

夜露こぼれてこほろぎの鳴く

夕顔の花さく門にひとまれず

人まちをれば月は出にけり

戀塚の名のみうもれぬ野司の

草のしげみに女郎花さく

渡しもるをぢが藁屋は面しろし

裏の窓さき小舟ゆきかふ

やゝまばし話とだえて窓の内の

影おぼるなり春の夜の月

五もとの庭の紅葉を一葉づつ

入れておこせしいもうとの文

垣ゆひて札たてゝあり村長が

いへのたからの紅梅のはな

静かなる春の色かなおくつきの

こけのみどりに桃の花ちる

とゞきたる文を袂にそと入れて

南はしむのうぐひすのもと

別れてはいつあはむとも覺ほえず

神よ守らせゆくへくを

今一つ窓をつくりて春風を

入れまくほしき此借家かりやかな

築山をめぐりてゆく水に

ちりうかびたる山吹の花

花束にたばねてみしが旅の宿に

まつ人のあらず秋草の花

わたし場にさしかゝりたる嫁入の

ともし火わかき水の上かな

こたびいと心さだめし其夜より

人しれず裂く箱の文がら

何げなく明け放ちたる窓の内を

花と共に入る蝴蝶かな

板橋の小川のはとりごぎ敷きて

いもうとの髪を姉の子のゆふ

智慧の輪によそ心なきいもうとを

おどろかしたる鶯のこゑ

あらむ程のもてなし申せ田舎より

伯母君ましぬ雛まつりとして

何事もつゝまぬ人のいつとなく

よそくしくもなりにける哉

うぶすなの椎の木かげの夕月夜

まち待たれたる夜半も有しを

ふたゝびはいはじ歎かじ胸のうちに

葬むりはてし思ひならずや

世にあらば又逢ふ春もありなまし

いたはるべきは命なりけり

はかなさを泣きて別れし夕暮の

空によく似し空のいろ哉

身一つに秋のあつまる心地して

今日の別れのやらむ方なき

霞しくかなたの岸のむぎばたけ

何といなしに船をやる哉

畑中の一もとすも、ちりしきて

ちりしく花に蝶みだれ飛ぶ

とこしへに泣かん宿世よ常しへに

泣くべき戀よ離れくゝて

世を泣いて鐘つきふりし七年を

女の春は猶おとろへず

ふと覺めてはかなくなきたどる夢のあと

まこと此夢まさしかりせば

いつとなくかはりし人の心かと

みればみらるゝ昨日けふ哉

思ひいづや思ひいでずや二人して

月にあゆみし磯のまつ原

なつかしき君が昔の文はあれど

君が情のいまは世になき

ゆく船を遠くながめて砂の上に

歌思ひをれば鷗ひくゝ飛ぶ

人ひとり逢はで過ぎきぬ秋の野の

すゝきなでしこ花多き道

まかられて又筆とりし手習の

昔こひしき村のまなびや

紅梅の花咲く窓をまれにあけて

女文をかく春のゆふぐれ

やりし文の返りおそきを思ふにも

うたがはれゆく人の上かな

人しげき別れの門べ胸のうち

涙をひめて相わかれつる

君と見しその夜の月夜けふの月夜

思ひくらべて一人泣く哉

うらくと霞む春野のいづこ迄

あくがれぬべき心なるらむ

大水のひきてほとなき川添の

家るさびしき秋のくれ方

橋くれて麥畑暮れて里にいづる

杉原くれて此日くれにけり

やみませる母をみとりの夜なくくに

きかせまるらする更科日記

時にあはで村にかへりこし伯父君の

軒端まづけき鶯のこゑ

野芝居の太鼓の音は絶えはて

菜の花ばたけ月になりゆく

いとどしく苦しくもあるか然りとて

人にいふべき思ひならねば

ゆきかへり又ゆきかへり橋の上を

さまよふ程に月かたぶきぬ

川添のやなぎのものと夕すゞみ

知らぬ人とも語りあふかな

いとけなき子らを残して父はうせぬ

さなへなかばの梅雨のころ

まさしくも君と語りし夢を見つ

ゑるしておかむ今日の日記に

幼なげもいつしか失せて大方は

憎まれがちの七歳八歳かな

つゝがなく此世にあらば此世にて

又逢はん日のいかでなからむ

雨さむき入江の夜となり船

笛の音の誰そわが胸いたさ

忘れえぬ松の下庵門のかはり

ぬしもかはりぬ我老にけり

けふの此いひ出る迄に幾そたび

幾そたび我はまどひし物を

あとになりさきになりつゝ兄弟の

駒のりまはす春の野邊かな

村人が熊ものがたり夜いふけて

板戸をたゝく雪おろしの風

里の子にをしへられつる春草の

その名ゆかしみ書に挟みおく

垣こえてちりゆく花をおふ蝶の

やがて見えすも成にける哉

濱までは伴なひたりしいもうとの

海にゝ入らず貝ひろひをり

秋の窓えめやかにふる夕雨の

夕べの思あはれいかにせむ

かやり火のもえたつ毎に見ゆる哉

柴折りそへてかたる二人の

竹村に夕日まづみて秋さむき

川そひづつみ行く人もなし

幼子は晝のつかれにとくいねて

わが背待つ間の秋の夜長さ

いかばかり弱き心ぞ堪へかねて

又とりいだす人の玉づさ

後の世に再び君とうまれあひて

結びえぬ世の夢やむすばむ

新らしく橋をかけたる二村の

境の小川すゝむ人の多き

あつかりしひとへ心のこひ衣

いつより寒き風たちけむ

餘念なく千代紙きりて遊ぶ子の

片へに匂ふ花うばらかな

かの人に似たりと人のいふ儘に

其人見たくなりける哉

灰色の雲くづれて和田の原

夕べの波に船ひとつ歸る

おとうとに羽子板かして伯母君が

つとの手毬をつく少女哉

いつか又共に見るべきこの嶋の

此松かげの夕づきのかげ

さびしさに友をこそまて友は又

われをやまたん秋の夕暮

雨かすむをちの菜畑からかさの

かさなりあひて行く夕べ哉

つみためて一つにもたる花束を

三つにわけつゝ春の野歸る

賣られゆく籠のこがらを見送りて

老し鸚鵡のもののおもひ顔

麥まきて畑みちかへる我影を

ながくうつせる夕づく日哉

鶯の聲よりあけてうぐひすの

聲に暮れゆく山かげの庵

一人とひ二人とひ來て月の夜の

圓居まどかも今ぞ最中なりける

荒波は寄せかへれどもわたつみの

千尋の底やまづけかるらむ

夜ふけぬ家には妻の待ちわびむ

下谷の俣芝にむかへる

嫁ぐべき姉の小袖を手に取りて

いもうとの子のながめ入たる

子ら二人父といでて行く蟹の家に

其母病むか床のうへにあり

はしゐして春の海みる若き人

やまひあるらし面わ瘦せたり

うち霞む川添みちのやなぎ陰

何にかあるらむ人数多ゆく

をとめ子がさす深張の傘の上に

落ちてふたゝび散る櫻かな

天の川とわたる雁の聲ぬれて

そゞろに寒き秋の雨かな

年毎に音づれくればいつとなく

わが故郷の心地こそすれ

ちる花は又こん春も匂ふらむ

君がすがたをいつか見るべき

野をいでて市に賣らるゝ秋の蟲

かゝれとてしも鳴かずやありけむ

うけつぎし三反の田を耕やして

むしろ安けく我世送らむ

ゆく蝶のゆく所まで行きてみむ

野末はるかに霞こめたり

わらじ賣る並木の陰の一つ茶屋

人のゆきゝも霜がれにけり

二むれに分れし子らがいさかひの

中をへだつる里川のみづ

かの折に思ひ絶えなばかくばかり

つらく悲しき別れせましや

夕風の詞たくみにさそふらむ

あとよりあたと散る椿哉

吹きたえし風のゆくへをみ送りて

われ一人たつ岡でえの道

文机のありしまゝなる床のべに

書よみまさん吾背いまさぬ

海士の子が遊びすてたる磯ばたの

小舟のうへに螢とびかふ

よそ人の手に若もやのまどひより

かき盡し得ぬ文をいかにせむ

宵々にさし入る月をふたりして

ながめむ秋のありやあらず

えめやかに語りし夜半は夢にして

今のかなしき雨のおとかな

繭買の商人ひとり今朝たちて

また雨になるはたごやの窓

新しく造りかへたる學びやの

壁ましろなり朧夜のつき

月あかき鎮守の森のうら手みち

夜宮まるりの人ついきゆく

あまりにも來ます遅しと出て見れば

のきばの榎あめに暮れゆく

此岡よ此小流よ花すみれ

摘み争ひて君の泣きし

村の花のお町おきみが夕すゞみ

若衆が唄のふしおもしろき

まのびねに我をよびます心地して

立去りかぬる母のおくつき

やつれたる少女の俣宿につきぬ

濱邊の秋をものおもふ夕べ

あぶなしと取りし袂の蔦ぢらし

螢は遠くみづのあなたに

心おかず縫ひてもらひし綻びの

綻ぶみれば君しきのばゆ

堀端に今宵もいでしうらなひの

燈火ほそし冬の夜のつき

星さむき有明の庭にさきにけり

遅くまきたる朝がほの花

天に通ふ一葉小舟に棹さして

君がまに〜ゆかんとぞ思ふ

岩がくれ見えすなりゆく君が船

やすらにまもれわたつみの神

夏ごとに逢ふ人なれど此夏も

言葉かはさでまた別れけり

君が門のおくてのをしね刈りをへて

わが歸るとは君は知らじな

玉はこの道ゆきぶりに影を見て

横にをれたる人のつれなさ

霜こほるあしたのせとの塵塚と

知るや知らずや水仙のはな

村長の門のしら壁をらぐと

夜はわけそめて庭鳥のなく

なまめきし女住居の門椿

車とまりぬおぼる夜にして

なつかしき家を離れて旅やかた

とし忘れ酒一人汲むかな

何一つまうけもなさで旅の宿に

其身そのまゝ年を迎へぬ

新玉の年は立てどもたびやかた

まつべき人もなき我身哉

人よりもか弱き我身かくて遂に

たふれやはてむ志成らで



はなれ小島

はなれ小島に家もがな
 おもふ吾妹わきもとたゞ二人
 共にすまむと願ひし
 あはれ昔のゆめなりき

はなれ小島に家もがな
 心のかぎりあさゆふを
 ひとり泣つゝ暮さんと
 願ふも今のゆめなれや

信

綱

夕べ憂に

ゆふべ憂に堪へかねて
 一人さまよふ磯づたひ
 わきかへり又わきかへり
 千々にさわだつ胸の浪
 よせかへり又よせかへる
 千畝ちうねの浪に似たるかな

ゆふべ思に堪へかねて
 一人たゞすむまさご道
 夕日のにほひ消うせて

やみに沈める海のおも
望のひかり消えはてし
わが宿世すくせにも似たる哉

池

えげき菱づる花さきて
實になりて又枯にけり
泳およぎさわぎし里の子は
家のあるじと成にけり
いつも釣りせし老人は
墓のあるじと成にけり

みどりにすめる池水は
昔ながらのみどりにて

名もなき小川

ひろき空をもうかべつゝ
遊ぶ子らをもうつしつゝ
さびしき村のかたすみを
名もなき小川ながれゆく

ながれいとも細けれど
道のまに／＼さからはず

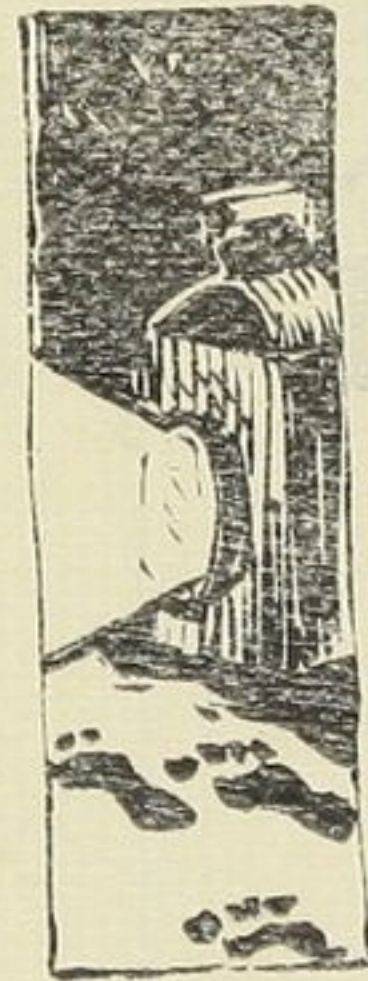
またしき波のうちつれて
さゝやきながら歩みゆく

すみれ花さく春ごとに

蛙つまよふ秋ごとに

影見る子らのかはれども

かはらぬながれ静かなり



そ
の
折
々

昌

綱

北條なる旅宿に住み初めし頃

よめる歌の中に

ひくかりし旅の宿りの借づくゑ

つかひなれたり日數へぬれば

都べの人もやわると浦ちかく

船つくごとくにゆきて見る哉

船はてし汽笛ふえの音寒くきこゆなり

一人ものおもふ旅の夕べに

都思ふ夜半のまくらの寂しきに

いよゝ吹きそふ風の音かな

村をさの門もる犬もこのころは

あと慕ふまで住み馴にけり

名も知らぬひと夜泊りの人なれど

都ときけばなつかしき哉

宿にまつ人いなければ手折ゆきて

寂しき窓のながめといせむ

枕べのちさき行燈かげふけて

ちっみにみえくる壁の色かな

清澄山に登りて

奥山の杉のむらだち露おちて

名も知らぬ鳥の聲を聞ゆる

小港に物しける歸るさ

磯山の松の村立見えそめて

あかつき寒き星の影かな

こぎ出づる綱引の船の聲の内に

明けわたりゆく前原の里

根本養壽館に宿りて

此宿はうごかぬ船の心地して

夜ひるとなき波の音かな

白濱にて

夕づく日波間にきえて白濱の

千岩五百岩波たちさわぐ

打ちよする波白濱の百千岩

ひとつくくに面しろき哉

鋸山に登りける時

くしき岩こしき岩の岩床に

五百いほつ御佛たち並びます

石山の石切りおろし切りおろし

かくて世をへむ其子其孫

富山にのぼりて

そのかみの筆のすさびをなつかしみ

山路踏みこえ登りこしはや

千倉の温泉に宿りて

湯の宿の池のはちすの白き赤き

花あきらけき月の夜半かな

大貫村小松寺に物しける時

古寺のせとのふる畑耕やして

こゝに年へし寺男あはれ

館山の濱邊にて

山は暮れぬ二つ小嶋をじまも又くれぬ

いさり火の影沖なかにして

東久世伯の鏡が浦に渡り給ひし折

共に那古に物して

わたつみも今日のまれ人迎ふらし

かゝみの浦わ塵だにもなき

萬里小路伯の許に七夕會に物して

天の原見つゝしをれば白妙の

たもとなびかし秋の風ふく

角田佳一ぬしの新築の賀に

石ずゑの動きなきごといへをさと家長の

君がみ齡ときはなるべし

兄君石樽ぬしの安房に物せられ

けるに鷹の嶋に嶋遊びして

はなれぬし友とはらからと三人して

一つ小舟に嶋めぐりする

山本なる小原ぬしに宿りて

かし鳥の聲にねざめて垣内かきつた田の

稻葉の露をみるあした哉

小幡ぬしと共に田代の池に物して

有明の月かげ清しはちす葉の

花の香きよし清きあしたや

人々相はかりて鏡浦會を起しける時

かゞみの浦海原きよく山清し

清きわが歌いざやうたはむ

吉田信子ぬしの家に人々つとひて

月影のさやけき夜なりつとふ人

道の友なり何をか思はむ

鈴木荷郷ぬしの蓮池を見て

はちす葉の露の白玉まら玉の

中に宿らすちさき御佛みほとけ

箱根に有ける頃

なく蟬の聲のまぐれに夢さめて・

衣手さむしそこくらの里

瀧つ瀬をすこし離れて咲にけり

岩間に根ざす山百合の花

古しへの關のあたりに一夜ねて

知らぬ昔を夢にみしかな

たれ折てつれなく捨てし早川の

岸を流るゝ姫百合のはな

信濃紀行の中に

旅衣うすひのみ阪秋ふかみ

錦の中をわけのぼり行く

浅間山麓のち原枯生原

秋の日寒くほじろ聲する

火の山のもえたつ中に身を投げて

何も残さで此世去らばや

吾世むしろ山にやをへむ酒つくり

菊の花つくる村長のいへ

秩父紀行の中に

雨かすむ武藏野の原をゆきくゝて

ちゝぶの嶺の雪を見る哉

旅にあそぶ我身はづかし秩父織る

越生の里はをさの音まげき

日光にありける頃

天の原ふみとゞろかしなる神の

音おもほゆる瀧の音かな

雲をつく千もと老杉おい杉の

奥に眠れるすぐれ人の君

銚子に物しける時

雨はれし利根の大川川口の

白帆風にうごき船とく走る

三河日記の中に

橋の上に眠れる童今あらず

水の音さびし矢はぎ川の水

天の下やすく治めしますらをが

うぶ湯の井戸に秋の風ふく

原田嘉朝君の大磯にいませる許に

浪白き磯の松ばら朝にけに

立ちならしまさむ磯の松原

難波なる蘆田ぬしのもとに

難波風月に吹くらむ川淀を

小舟こぎいでて遊ぶらむ君

母君の善光寺詣し給ひける頃

秋風よ荒くな吹きそ母君の

うすひの嶺を越えまさむほど

益子秀と大磯にありける頃

都なる母君のつとにもていなむ

此海そひの月と波と風と

西ぬしの別墅にて

相摸の海庭の池のごと見ゆる哉

君が園生のゆほびかにして

静浦にて

静浦のうらの松原おもしろし

老いての後の住家ともがな

江の浦の浦わこぎいでて紫の

夕べの空の富士の高嶺みる

旅より歸るとて

うみ山の清き境をわかれきて

都のちりに又や入るべき

竹柏園野遊會に杉田に物して

みやびをの笛の音すみて古寺の

杉生がくれの梅の花ちる

また野遊會に玉川に遊びて

いつになき筏の上の人ごゑと

流るゝ水の思ひてやゆく

摘むまでは多しと見てし花莖

さて我手にいたまらざりけり

又同じ會を國府臺に催しける時

手古奈の宮にて

かれを思ひこれを思ひて身一つを

なき身となしゝ心悲しも

歸さ中山に詣でて

六十二なにかしの母とまゐりしたる

白き切髪その母あはれ

三浦博士の渡歐送別會を中川のは

とりに催しける時

君をおくる中川堤雨のうちに

雲雀うたへり中川づつみ

利根川會の同人と利根川に遊びて

水の上をわが家にして川船に

妻も住みけり子らも住みけり

渡し場の老翁をぢがうら窓椿ちり

山吹さけりをぢがうら窓

一月七日久良岐ぬしの七日會に

え物せでよみて送れる

うちはやし七草なづな謠ふらむ

君が姿のめに見ゆるかな

清水寅治ぬしの松嶋にてつみし草花

などおこせし返りごとに

常このむ詩集の中にはさみおかむ

この草の花いろはあすとも

北海道なる山田清定君の許に

朝な夕な机ならべしわが友よ

いかなる窓に一人あるらむ

小花清泉君の新築成りける時

人の世を遠く見さけて岡の上の

新室にむろのうちに書よます君
 音樂會のうはさを新聞によみて
 いとへ子の君の許に

寄る浪の音のみ聞きてうるはしき

樂がくの音ねさかず老いん我身か

兄君の富士登山せられし頃

雲の上にむすびましけむ夜半の夢

ゆめにいかなる神か天降あもりし

大磯なる姉君幼き甥姪を思ひやりて

今もかも海渡りゆきてをさな子の

遊ぶらむ中にあそびてしかな

松寺久雄君の遊子漫吟を讀みて

京にいでて十年じふねんの苦學君なわびそ

病みて濱べに老いん我われもあり

年久しく都にありし奥村ぬしの紀州

に歸らるゝに

はゝゑみて迎ふる山にはた川に

おもひ多からむ故里の道

百花園にて

四つの時花はたえねど秋萩の

さかりや園の盛なるらむ

友の病を赤十字社病院に訪ける時

歸りこむことはいかゞと故郷を

泣きて出こし人もあるらむ

吉田謹爾ぬしの妻君を悼みて

けしきよき此浦をおきて情ある

せの君をおきていづちゆきまし

嶋田愛子の遺稿のおくに

春がすみ野をも山をもつゝみけり

いづこに君があとを尋ねむ

父母の君の靈祭しける日

夏の夜の月の照らせど共に見む

父もいまさず母もいまさず

父君の十年のみ祭しける日

久方の天つみ空のいづこにか

今日の此日を見そなはすらむ

信

綱

寒 き ち ま た

髪は亂れてきぬやれて

姿さびしき少女子は

ひねもす家にいそしみて

彩色いろえたる畫の數々を

わづかの代しろと取かへて

寒きちまたに立いでぬ

つかれはてたる面おもわにも

いさゝか笑えみを浮べつゝ

川に添ひたる高殿に

糸竹の聲ひしくなり

橋のたもとのさむしろに

泣く兒いたはる乞食かたああり

木がらしの風荒らゝかに

夕べの雲を吹きしをり

星かけ寒き岸づたひ

氷れる道をたどりゆく

こゝも都の内かそも

軒端かたぶき戸は朽ちて

こぼれくづれし荒壁を

夜風いで入る片すみに

我子の歸さ待ちわびて

めしひの母は打ふせり

繪具の皿のかさねられ

やれし疊をいろどれり

* * * * *

富める者のみ幸ありて

貧しき者の幸なきに

みづからなせるあやまちか

神よりうけしまがつみか

富みたる子らのやぶる畫の

涙の手もていろどられ
富みたる人の着る衣は

涙の手もて縫はるなり

千尋の底に海士人が

あさりて得つる白玉は

其一つだに身にそはで

富人の手に光るなり

機おりくらす賤の女が

心づくしのあや衣は

一日も家にとまらで

とみ人の身をかざるなり

米のあたひのたかくして

労力のあたひなどやすき

遊惰の富人尊とくて

労働の民など卑き

かの貧民の汗と血は

富豪の身をぞうるほせる

貧しき人の勤しむは

とみたる人の爲なるか

* * * * *

星影さむき岸づたひ

氷れる道をたどりつゝ

いそぎ歸りし家のうち

燈火の影きえどくに

炭櫃すびつは冷えて灰白く

母の咳嗽しはせきちからなし

水を渡りてひびきくる

宴會うたげのさわぎ幽かにて



幸なき花

昌

綱

旅居の窓にむかひなれたる文机のもとも、いつになう物うければ、一人宿を立ちいづ。例の牛の聲きこゆる藁葺の家を左に折れ、鈴菜麥生の畑道づたひにたどり行きて、いつか湊川のはとりに出ぬ。川をへだて、畑をへだて、森をへだてたる延命寺の山は、霞の衣薄うまとひて、湊橋の上を行きかふ人影絶々に、むかひの松原には、籠せおひたる女の、頬かぶりしたるが語らひつゝ過ぎ行く。その松原の左のかたに、那古観音の杉山見ゆ。折しも橋の上を車四五臺、八幡の方へと渡り來にけり。あゝ今日は遂に樂しからぬ日なるか。思へば十年あまりの昔、我父母

君の、幼なき已れをともしなひて、此國に來給ひし時、山本の里なる、そのの君の案内にて、かの延命寺にまうで、かの那古寺にいたり、車をならべてこゝなる橋の上を過ぎ、その夜を北條の木村屋に宿りたりき。其をり旅宿の主人がもとめによりて、父君も母君も、又已れも歌を書きたりき。父君のは今忘れたり。母君のは、命あらば又も見てえがといへるなりき。思ひきや父母の君が揃ひましたの旅、しかも我み供せし其夏の樂しかりつる旅路は、やがてつひの旅路にならむとは。父君は其又の年の夏、母君も程なく此世をさり給ひぬ。あはれ此川のはとりに一人立ちさまよふ身よ。うつすも寂しき我姿、うつるもわびしきおのが心よ。み空遙けくいませる父母君の御靈は、今も絶す我身の上を思ひわび給ふらむ。かくて我は、いつの春にか亡き靈

を安めまつりえむか。ふと見やれば、堤の春草緑なよゝかに、堇の花そこゝに咲き亂れたり。待つべき人もあらぬ身は、徒らにコツブの中に萎れはてゝ、心なきはしための手に捨てられむか。それぞかゝる花の、大方が受け得たる運命なるべくや。あらず、幸あると幸なきとは、是らの境に迄も、亦及べるなるべし。さちなき人の目に見いだされ、幸なき人の手に摘まれ幸なき人の唇に觸れむ時よ。汝が神よりうけし自然の美、自然の香は、瞬間に消え失せて、世にもはかなきむくると化し終らむか。さてはいよゝゝ頼み少なきこの花の上なりな。よしその然ありなむとも、今日ひと日わが爲に、樂しき花、幸多き花と摘まれてよと、寂しうも思ひおこす折から、黄なる蝴蝶二つ、いづこよりか影をあらはしきて、今しも摘まむとする花の上を、

かばふが如く飛びかひたり。



雪の日

旅宿の若き主人いふ。おのれ物どころおぼえてより、今日の如き大雪をみずと。主人は既に三十をこえたり。げに然らむ。安房の國は都にくらべて、十度じふどあまりも暖かければ、もとより此處にして、雪見なぞいふ事、なしあたふべくもおぼえざりしに、今日曉方の西の風またく静まりて、朝げをへし家の子の松葉かきたつる頃より、雪の國のみ使とみにたちて、美しくしきもの、みにくき物さまざまのわかちを、一つ色にふり隠すべく、仰言くだし給へり。かくて此雪晝すぎる頃には、神のみ心にも叶ひたらんまで、ことごとくにけはひしをへつ。旅の窓も今日は客人いと少なくて、一しは物しづか也。我は一人南の窓にいでて、

此稀なる景色を、只管打見やるのみ。物賣る人の鈴の音は、藁ぶきの家のあなたに消えて、門近うむれたる幼子の、雪よくの聲の、田舎なまりをかしう、手拭を二人してもち、其上に積らせんとするあり。帽子の中にうけんとするもあり。とりぐに小さな胸を騒がせつ。かなたの畑に、同じ程に咲き並びたる鈴菜の花は、已がじし如何に寒さを訴ふらむ。緑若き麥生も、思はぬ神のみ使を、いかにわびしと請つらむか。此年頃こゝに住みなれて、見なれたる山、見なれたる海、見なれたる鎮守の森も姿をかへ、竹村ごしに見ゆる汐入川の板橋、松原の上にかゝれる鷹の嶋沖の嶋のま白なるも、皆わが爲の新らしき景色なりと眺むる程、旅宿の門を左に、館山町へつゞける一筋の道を、今しも行く郵便脚夫あり。今朝いだしたる都への文の、あるは

彼男の手に集められ、かの男の鞆の中に入れられつゝ、此雪中をしもゆくにはあらずやと、ふと思ひ浮べつ。やうく近づきくる人力車の、綱引となりぬるが、それさへむかひ風の、たやすくは進みかねたる、いかなる人の、いかなる事のいできて、かゝる中を急ぎゆくにかと思ふ折しも、此處に來かゝりしは、例の太き洋袴をはき、例の破れたる襦袢の上に、今日は裕らしきものはおりて、巻烟草を口になしたる狂人なりけり。彼は此あたりを朝夕さまよひつゝ、彼が最も好める巻烟草の飲みあまし、食物の残りなどを貰ひ得て、其日を送れるなりき。年はさのみならねど、延びたる髪、延びたる髯の、やゝ白きをまじへたるが、黒き面わに赫やける鋭どき眼、散りくる雪に照りそひたり。彼が家はもと、此里にて評判よかりし鋸鍛冶屋ときゝ

ぬるを、いかなる憂、いかなる思のもととなりて、かゝる身となりつゝさまよふらむ。今は家もなく、親もなく、兄弟もなく、妻子とてなき身の、狂ひに狂ひをどりにをどりて、此世をすぎんとするにか。あはれいかなる事よりか彼の心の狂ひをめし。救ふに道のあらざりしか。はた救ふに彼のたゞざりしにかなど思ひやるを、何事もえ知らぬげなる彼は、いつか口にせし烟は絶えて、片へに降りつめる雪の一かたまりを手にとりつゝ、おどましき笑を洩らすと共にたうべはじめぬ。治助さん寒いね、と使に出でゆく女中の、ふりかへりざま聲かくるに、又もあやしきゑみをもたらして、一人何事をかいつゝ走りゆきぬ。怪しきゑみよ。此世のいかばかり楽しくてゑみつゝかあるらむ。はた今日の珍らしき雪の、いかばかり面白くてゑみつゝかある

らむ。あはれいづこにか行くらむ。はたいづこにか宿るらむ。猶ふりやまぬ此雪の中を。



縁 日

常はもの寂しき金比羅神社の境内も、舊曆三月十五日の祭日とて、待ち構へし商人等の、立て並べたる店々、賣聲の田舎訛りも、今日は一際耳立ちたり。

鳥井近き葉櫻のもとに、天竺木綿の日よけを張りて、數多の箱を並べたるは、種賣の翁。水瓜の種の赤黒き、茄子苗の紫がかりたる、黄瓜瓢箪の白さを前側として、夏大根、牛蒡、麻、フランス菜、細根、朝顔の様々を、あやしげなる平假名にて、一つ／＼附木に書いつけたる、年寄の客は絶えず此店にと屈まりぬ。

幼子にて持切たるは、其隣なる館屋の店。穴明きし錢いくつか

と、塵多き杉箸の先に、五重六重巻きつけたるとを取替ふるなりき。店の前には、はや役すみし箸數多捨てられて、人足ひとあしにかゝれり。とく賣られゆく者の運善きにや、賣り残されて、今宵は此館屋が家に持ち歸らるゝ者の運悪きにや。名にのみ走る今の世の人の、やゝもすればこの箸のやうになりゆくべくぞおぼゆる。

玩具屋の前は殊に賑はひつ。こはれやすく作れる鎗刀の類も、愛に満ちたる親の心には、あるが上にも猶買ひゆくべく、一筋引き渡し、紐に、あまた結びさげられたる天鷲絨の銅貨入は、誰が手にか持てゆかるらむ。赤と紫との風船玉は、風にひるがへれり。衣着たる人形、衣着ざる人形、机、文庫、針箱、さてはまゝごとの膳、椀、眞魚まな板手桶の勝手道具など數しらす。

八分は講談物なる本屋。如雨露の水の絶間なき酸醬屋^{ほ、づき}。五色の色どり美しくしき小粒の金米糖。猶つゞきてはパン屋、水菓子屋など、いづこも買ふ人見る人賑はし。さゝやかなる御堂のうちには、髯白き神主の烏帽子装束して、いかめしうひかへぬるも尊とげなり。御鏡の前は、くさぐさの供物もて飾られたるに、蠟燭の光隈なく照り渡れり。社前を左に少しおるれば、改良劍舞といふがあり。それを見んとて押しあふ人の中には、信玄袋さげし此わたりの合嬢らしきもありき。

早取寫眞の店二つ三つ並べり。看版の多くは、都なる寫眞師の手になりつるを、臺紙のみ變へて我物顔に飾れるとか。いかなる人の寫して、いかさまにか寫るらむ。

氷屋の寒げなる隣には、熱き油の中に、海老、烏賊などの煮らるゝもをかしく、そこなる筵の上には、飯櫃さへ供へられて、年若き女たちの茶碗もてるが、暖簾どしに見ゆ。

やゝ行きてあて物の店あり。厚き紙の上に赤きインキもて丸をひき、それを東西南北とやうに、幾つかの線を渡し、其間毎に白砂糖にて製りたる大黒天、鯛、鯉、苟などの、いつのとも知られぬを置き、紙の中央には、尺ばかりの棒のさきに、針の結びさげしを据ゑたり。赤き手拭にて頬かぶりしたる二十歳前後の男、まばしためらひてありしが、遂に太黒き指もて、かの棒を廻したりき。こは一まはしがいくらといふなり。はじめは何もあたらずりき。二度目は廻されつ。あたれり。小さけれどもかの鯉の前に針のとまれり。頬かぶりのやゝ意を得たるものゝ如し。

こたびこそ鯛の大きなるをと、更に三度目をまはしぬ。あたらず。四度五度遂に再び何をも得ず。唯徒らにその懐を輕うせしのみ。かの大黒天の神もし心あらんには、人間のすなる愚さを、いかに笑ひ給ふらむ。

今日の祭に飾るべく、こゝかしこよりつどへし馬は、かなたの芝生に乗りまはされつ。そを見る人そこにも集へり。

農具賣れる店の前より折れて、海にむかひたる某が碑文のもとにいでぬ。よばゞ答へん鷹の鳴、渚美しくしき八幡の松原など、近く遠く見渡されたる、いつ來てもよきは此館山公園なり。躑躅咲ける石のもとに腰かくる人、東屋のうちに笑ひたはぶる人、春の長閑さは今や其極に達しつゝあり。

茶煮る家に暫しいこひて、濱邊にとおりゆけば、波うち寄する

岩の上に、幼子の釣するも愛らし。

かの嶋へと漕ぎ行く小舟は、今日のよき日を、かしこの松陰に遊ばんとするなるべし。乗れる人の中には、はや麥藁帽子見ゆ。我も語るべき友のあらんには、遊ぶべき友のありなむには、忘れえぬかの嶋山の、かの松陰に舟のこぎゆくべきを、友はあらず。心あふ友はあらず。我は一人この廣き浦と語るなりき。波清き此鏡の浦と語るなりき。これや朝夕の友、これや美しくしきわが心の友にはあるなりけり。



房 總 漫 吟

信

綱

北 條

なつかしき松原みえてなつかしき

まま山みえてわが舟はてぬ

鷹の島沖の島

神の代に神のはらからこゝに住むと

つくりにつけらし兄弟のまま

島あそび昔に似たる今日の舟に

むかしならぬ君と共に乗る哉

小さな望をすてゝむしろわれ

この島守にならむとぞ思ふ

角田ぬしの催はされける歌

會に車を

世の中のせんすべをなみ新づまの

うつくし妻に荷車おさす

清澄山

たゝなはる青垣山のおく山に

みほとけいます清すみの山

世の中の聲はきこえず山風の

身にまみぐとまみとほる哉

山たかきみ寺のうちにあるほどは

われもまばしの佛なりけり

小湊より勝浦に物すとて

法の師に法の道さゝ馬追に

馬の事さく今日の旅かな

大原にいたる途上

郡の長をさえらずやあるらむ道をあしむ

人ゆきなやみ馬ゆきつかる

こゝかしこにて

遊びてもあらるゝ老の身なれども

孫をいとしみなは機を織る

打けぶり軒端もみえぬかやり火の

中にこもれる笑ひ聲かな

(明治三十三年の夏石橋氏と共に遊びし折)

臥 龍 松

昌

綱

塵多き床几の上も、そをとやせんの猶豫はあらで、歩みつかれし我等は、杖と共にぞ倒れよりぬる。

今日は晝かく友の都より來しを案内して、此汐見の臥龍松に來つるなり。

堂守の翁は二人をみるや、薄暗き障子の陰より、色さめたる赤毛氈を出してそこに敷き渡し、煙草盆とりそへ、さて湯をたぎらすべく、ゐろりの前に向ひぬ。

吟詠集と筆太に記せる半紙の一とぢは、人々の手習草紙にや用ひらるべく、其片へに置かれし箱の中の寫眞は、こゝの松を始

め、安房の名勝を寫し、にて、これや翁が晩酌の助けとして、とひくる人々に買はれゆくべし。

正面の御輿のごとき形せる煤けたる屋形には、緋金巾の幕たれゐて、内にまつれる觀世音菩薩の御姿は、其幕をもれてよく拜まるゝなり。かのいらかを高くし、金銀のあらゆる寶を集めて、つくり飾られしそれと思ひくらふれば、同じ御佛、同じ御影におはしながら、かゝる境にいつかれ給ふみ佛こそあはれなれ。幸あると幸なきとい、たゞに人間の上のみにあらずりけり。さはれ又思ふ。形ち尊とげに、心きたなき法の師、おもてやさしげに、腹の内くるき老女などにいつかれまさむよりも、このみにくき家、中々に御心や安かりなむ。いかゞあらむ。

盆燈籠の古びたるが今も釣られし下には、鉢卷の色さへわかず

すゝけたる麥藁帽子みゆ。これや此松を見にこし都人の、いつの夏か置忘れたりしが、さながらさすらふるにかとあはれなり。

麥酒の空瓶の、塵にまみれて三つ四つ並べる棚の右には、翁が用ふべき夜着の、二枚折の破屏風よりなかば見えつ。さては十年前よりの柱曆もて張られし壁も。

折柄男女五六人入り來りぬ。此一むれは昨日我友の來りし時、漁船を共にせるなりとぞ。こは北條の松原に別莊もてる某なりき。四十近き肥え太りたる主人のあとより、其妻の櫛卷にしたるが、紋織の洋傘をもち、洋服着たる八つばかりの男の子と、外に女二人となり。主人のまづかの集を手にとり、妻なるは信玄袋より博多織の烟草入とり出すに、子は早その内なる何をか

せめぬつ。

唐崎の松、高砂の松、それらの如、其名高からぬど、わが鏡の浦にこし人の必とふは此松、必驚くは此松、げに其名の臥龍、一度千歳の夢さめたらむには、雲をも起しつべく、はた雨をもふらしつべし。唯此松かげに来る毎、數十間にわたれる老松に目驚くと共に、心をいたましむるは、木蔭に並びたつ村人の奥つきなり。

幾百年をへて緑いよく濃き下かげに、短かくはかなき憂世の道を踏み來て、こゝに静けき永久の眠につける村人よ。汝らが多くの一生は、此松の靜かに臥せるが如、いと單純に、平和にはた質朴に、五十年の生活を送りけむ。されど日蓮の生れし國、師宣の出し國。政治に宗教に、はた文學に技藝に、各高き望深

き思を起しながら、田園に老朽ち、こゝの土となりし人もありけむ。

又思ふ。此松の齡久しき、此古く尊とき松が根を、とこしへの枕と契りそめけむ石碑の遠つ祖は、いづくいかなる人なりし。慈母にさきだちたる子か。百世を契りし夫を残して、寂しき國にいたりし妻か。あるは遠き港をいでたる船の、時ならぬ嵐に楫は折れに折れ、船底にくづれにくづれ、果は此濱に、なきがらの流れつきしを、村人らのあはれびて、ゑるしばかりの石たて小松うゑたる、さる類ひや始めにはあらぬか。さらずば又村長の娘などが、はかなき戀にまどひ入りしも、頗なる親心の宥すべくもあらぬを、迷ひいよく深くなりゆきて、果は世をくやみ身をはかなみつゝ、見も知らぬ後の世を頼みにて、互ひに

かたく契りかはし、相共に此木陰に消えうせたるを、さすがに親のえ堪へず歎き崩はれて、せめては千世もおひたゝん此松のもとに、諸共に眠れかすと葬むりたりし、それや基となりて、十年廿年と世移り時かはるまゝに、そのかみの若松老松となり、木陰の墓數やうゝそひゆき、はては今日のごとき共同墓地となりしにはあらぬかなど、様々の思わが胸に浮びいでぬ。わが空想にふけりゐるほど、友は一人松陰にたゞすみて、畫筆走らせをり。かの幼子は唱歌うたひつゝ、そこらをありく。畑を越えてかなたの道には、馬くるまたえすゆきかひ、程遠からぬ濱邊より、ま近くきこゆる綱引の聲は、やうゝせまりくるやうなり。さらばそを見つゝ、濱邊づたひをゆかんとたちあがりぬ。

井のもとの木蓮二ひら三ひらこぼれちりて、春更けがたの雲雀の聲は、いづこともなく我等を送りがほなり。



さびしき夕べ

昌

綱

待ちわぶる都のたよりは、今日も遂にあらず。あまりに寂しき夕べなるを、旅宿の窓のもと、語らはん友もなきに、文庫あけてふと目とまりたるは、人々の寫眞。常にめなれたるさへ、心とまりてあはれなる心地す。

大磯に暑さ避けまし、兄君の許より、送り給へるあり。姉君幼なき人たちを始め、共に給へる新體詩の君、かしこになりどころもたる某刀自の君、さては都より物せし學生の君など、これかれ十餘人の圓居の寫しいだされたる、永き月日を、さる樂しき境に立まじらざる身には、ゆかしさも一しほにて。

これも大磯にて寫しませる、わが恩人の寫眞あり。あらし憂世の風、はげしき憂世の波に戦ひましつゝ、こよろぎの五十ちをも過ぎ給ひて、猶若き人も及ばざるはげしき力もて、戦をつゞける給へり。中頃聊かつゝがありて、まばし土筆が岡に病をつゞくろひましき。いかで御身健やかにいまさむ事をこそ。ピアノに秀れたる君の、薔薇の花を手にしてたち給へるあり。君の家とは、我父母故郷にいまし、頃より親しき中らひなりき。去年の夏、わが父の十年祭をせし時、教へ受し人たちの家にあなる父の遺墨を展覽したりき。其折、君の家より父の書牘あまたを出されし中に、わが兄の生れまし、又のあした、そをいひやり給へるがありき。さる中らひなれば、己れも幼なき時より知れり。何町の角にて、犬に追はれ泣き給ひしをなど、昔話

の出でては、よく笑はるゝ事もあり。音樂會演奏會の評などを新聞にて見るごとに、君が妙なる調を聞かで、松風波の響のみきゝつゝ、海そひに老いはてん身のいとゞ口をしうて。

麻布の母君のキャビネあり。我かよわきを、たえず心づかひし給へる慈愛の御おもわ、遠く離れゐても、われを守り給へる心地す。病がちにて、此いくとせを都にわらず、常に御心なやましまつるこそ心苦しけれ。

今は北海道にあなる友の、三とせ前の秋、暫し兄君の家におりけるが、折しも九月十三夜の月なり。同じ窓に机並べし我と、從弟の某と三人、玄鹿館にて寫したるあり。かつて兄君の詠み給ひし、雪深き北の海邊に一卷のバイブルもちてゆきし人はもとは此友の上なり。降りにふりしく雪の中を、君のしも、道の爲

教の爲に、いや進みに進みゆくらむか。

黒絹は丸に三つ引の五つ紋、兄君と二人寫れるあり。こは大學に教鞭をとりぬませる醫學博士の君なり。かつては、世の事を知らず顔にて駒込の竹の林に住む博士あり、と歌ひいで給ひしよ。行餘のわざとて、つみます言の葉の花、日にく新らしき匂をそへ給はんと。

姉君の幼なき時、里昂にて寫し給へるあり。裙短かなる服を着け、椅子に寄りかゝりたる様、幼き甥たちの、洋服きし今の姿に似かよひたるもをかしくて。

甥たち二人の寫眞を見る時は、いつも我昔を思ひおこしつ。かの鐵道馬車のいでき始めに、小川町なる我家より、泣きわめく六つ七つばかりの己れを、兄君の負ひましては、萬世橋のもと

に行き、喇叭の音をきかせなどして、慰めくれ給ひぬとか。こはわがいさゝか理屈めかしき事を云ふ毎に、必ず持ち出さるゝ一つ話なり。やがては此二人も、幼稚園に入るべくなりぬるを、いかですこやかに生ひたち、かたみにたよりたよられてよと、我身のか弱きにつけても、常に祈らるゝなりけり。

垣根あり飛石あり、木立繁き庭に、今年廿歳の姉なる人を頭らに四人の妹の並びたる、こはこの北條なる病院長の愛子まなこたちなり。院長は、わが兄が歌の道の教子の一人とて、我鏡の浦に、病つくるはひと思ひ定めしも、一つは此君のいませばなり。常に薬を乞ひにゆくごとに、ねもごろなる情忘れがたし。我始めて此處にこし時は、姉妹の君も未だ幼なかりしを、あはれ此海ひそに病を養ひて、學ぶべきあまたの年を、あだにのみすぐし、

事、せん方なくわびしく堪へがたしや。

白の組襟に同じ二枚下着、上には黒をかさねたる手札形の半身、こは都に名高き齒科醫なにがしの夫人なり。交際上手にて、二人の愛子をさへ持ち給へり。されど歌文の上には、あはれなるふしもまじりて、此程の文に、さいつ日より又例の頭重うて、樂しき思は更にいでこず。浮世の芝居に、はほとゝあきは侍るを海山の境こそなつかしけれ、などありき。猶例のさまゝ考へる給ふにや。夏はとく、姉弟の子たち共に渡らせ給へや。去年のごと涼しき樓上に、物語承らまほし。

六年前の正月に、兄君と二人、江木にて寫したるがあり。兄君のかけぬ給ふ近眼鏡よ。今も絶えず、或は棚の上に、或は本箱の中に見失ひて、探し求むと騒ぎますなるべし。さては例の鼻

の中程に掛け、指もて上に押しやり給ふ癖も、止みまさずやなど思ひいづるに、獨ゑみせらる。

海軍大尉の服つけたるは、高雄艦に職を奉じつゝある友人のなり。此友と相知りたるは、友が肋膜の病にかゝりて、此處に轉地せし時よりなり。かの快活なる軍事談は、今も思ひ浮ばれて。

埼玉なる親しき友と、二人寫したるあり。此友は、今年三つになりし女子あり。そが寫眞を、必ず我方に送りくべく契りあるに、今に其儘なり。かつ、折々出す文の返しだにもなし。筆とるに物うきさがとゞ知る物から、我旅窓のつれづれなるに、さりとして、葉書の一ひら、などさへかたかるべきや。

石目の臺紙に張られし八つ切形、こは都なる親しき人の、此里

にもたる別荘のなり。刀自の君は幼子をいだき、其片へには七つになりし愛娘と、うからなる某たてり。此人々は、去年の春より、此なりどころに移り住みぬければ、朝夕に訪ひつ訪はれつして、そゝるありきなど、いつもうちつれだちぬれば、幼き人のいたくもなづみつゝ、わが妹の如く、弟の如く覚えて、萬に心強かりしを、去年は此處にすぐし、花の便を、今年はとの迎へふりはへ來りしかば、家こぞりて都に歸られぬ。なつかしき此窓の内よ。夏までは又、相語る事のかたからんか。

悲しきは愛子の君よ。君逝きて既に六とせになりぬ。君が里近き玉川の流に船を浮べて、桃の盛みはやしゝあしたもありき。小向井の梅の蔭に、薫れる雪をふみて、歌がたりせし夕べもありき。あはれそは皆かへらぬ夢。此寫眞よ、君が遺稿忘れ草の

卷首に掲げしもの。とはに、忘れがたき形見となりぬ。
 一つ／＼見もてゆく寫しゑの、一つ／＼われになつかしく、
 忘れがたき歴史をもたりて、あるは獨打はゝゑまれ、あるは
 獨打ひそまれなどしつゝ、ひとりゐの夕べの窓の寂しさ、やゝ
 うすらぎゆくに、例のはしたなきはしための笑ひ聲、下なる座
 敷にきこゆ。



道 遙

夕べゆくりなく門を立ちいでぬ。見る／＼くだちゆく秋の日影
 は、あらゆる天地の紅の色をあつめたらんがごと、赫奕と海の
 面を照らしつ。

道に花あり、水引野菊男郎花。地に聲あり、こほろぎ馬追蟲。
 畑には白く咲きつゝきたるそば麥、代赭色したる藜、半かり殘
 されたる粟、いづれも今宵の露まちげなり。日は全く沈みぬ。
 名殘の光も消えぬ。かへりみれば遠村の烟横さまに擴がりて、
 仰げば清し長月十日あまりの月、咫をおきて長庚の神澄み渡れ
 り。

馬ひきつゝ歸る人のうしろに、つゞくともなくつゞき來て、來

かゝりし石の小橋。むかひの杉陰なる舟つくる小屋に、木ぎれ拾ひをる丸顔の娘、道具あつめをる兄らしきと何をか語りあへり。

石橋と斜めに今一つ細き板橋あり。渡り口に杙を立て、馬車わたるべからずとゑるしある、こは對岸なる藥湯にゆくべき橋。今しも其橋を渡りくる六十餘の翁、さらでだに黒光りせる顔の、湯あがりに赤みを帯びて、いよく奇に照りかゞやける、その形その容、こゝに畫師あらんには、やがてスケッチ帖のうちにをさめ入れ、いかなる景致のもとに、輕妙の筆をか走らすらむ。

肩におへる風呂敷包みの外に、身にいあやしき履歷をになへど、世を浮草の事もなげにうかれありく法界屋の男女、夕げしたゝ

めて、更に夜のかせぎに廻るなるべし。男は編笠ま深に口髯をたくはへ、女は色眼鏡におもてをかへて、白きもの厚くほどこせり。男の巾廣き兵兒帶と、同じく巻きつけたる女の藤色のと相並びゆく。

川茂かはもとある半被に、角袖の外套を着し靴ばきの南へゆくあとに、夕乳くばりをへし若者の、箱車引きゆく。それと摺れちがひにこなたへ疊屋ふたり、五間ほどおくれて筒袖羽おりし若き結び髪、足には二石にこくのはでなるをひつかけつ。これ過ぎてゑばし影なし。

我は隈なき月をあふぎみて、橋と橋とのせばき道をゆきかへりつゝあるほど、藥湯より打つゞきていでこし男女七八人、右に石橋を渡るあり。ますぐに田圃を横切るあり。さては左に一人

ゆく人のあるに、ふと見やれば我旅宿の樓に、すでに燈火の影
きらめきそめたり。

朝風に夕風に、波よりし稻田おしなべて黄ばみ渡り、かしら重
げにうなだれたり。松並木のうち鴟の聲つめたう聞ゆ。豊かな
る秋よ。あゝ何らの清き境ぞ。さはれ我は此清き境を友として、
いつの年までこの野に歩みをはこばすにか。此海邊に年を送る
べきにか。あはれなつかしき都よ。そこに人あり、そこに思あ
り。さるを我は永遠かゝる寂莫の野亭に客となりて、遂に朽ち
はてん身か。徒らに朝を迎へ、徒らに夕べを送り、暮れゆく秋
のひやゝかなる雲に雨に、はた風に露に親しみをかさねて、一
歳又一歳、指を折ればこゝに六とせ。あゝかくて此處の土と化
し終らんか。わが宿世あまりにはかなからずや。

月も星もいよゝ澄み渡れり。わが踏む地いつか暗し。空に通ふ
黄昏の鐘、袖にふれくる風のさゝやき、あゝ已^やみなむ哉人の世
の吐息。



秋のみちのく

信

綱

中村にて汽車をおりぬかねてこゝに來て待ちむかへられ
し飯淵清水二氏と共に原釜なる東洋館にやどる此夜月さ
やかなり

磐城の海おきつゑほかせ吹きたちて

五百重の浪に月ぞたゞよふ

月にふむ磯山かげのひとつ松

枯れてたてるもおもしろき哉

あまが屋のいね静りてまさご路の

ふけたる月に人影もなし

松川浦のけしき見むとてゆく水莖山にて

荒らき海まづけき入江右に見つ

ひだりに見つゝゆく山路かな

實方朝臣の奥つき

わはれなり萩にすゝきに埋もれて

朝夕つゆのおくつきどころ

白玉をみがさし殿も朽つる時あらむ

安かるべしやくさむらの墓

不忘山

わすれずの山の名かけて誓へ君

今日の夕べをいかでわすれむ

松島に遊ぶ

まつまの千島も、島こぎめぐり

君とすむべき島やもとめむ

馬放島にのぼりて

もろともにすまむとしいは、人目なき

この島かげに世をつくしてむ

松島ホテルにつきて夕つ方より更に船をうかべこ、かし

こ漕ぎめぐる

月くらく浪も音せぬうなばらに

ねぶるがごとき島の色かな

平泉にいたり毛越寺の跡をとふ

大門だいもんのいしずる苔にうづもれて

七堂伽藍た、秋のかせ

ところ／＼にて

たびやかた燈火くらく酒ひえて

ひとむら時雨窓の戸をうつ

みちのくの野こえ山こえ今日ぞ知る

あきのあはれは薄なりけり

家におくる書かきはて、旅やかた

雨をながむる夕まぐれかな

さらでしも旅の心のかなしきを

秋は夕ぐれみちのくのはて

みちのくの廣野の原の秋かせに

すゝきなびきて黒駒あそぶ

仙台なる小倉氏が爲に歌會を神宮教會に催はされぬ

兼題秋風を

秋風にふきおくられてあけ方の

並木のかげを我ひとりゆく

夕やみのくらさまぎれにたち別れ

野道すぎゆけば秋風ぞ吹く

舟岡なる飯淵ぬしの林檎畑にて林檎を

くれなるのにはへる面わ白たへの

清きまごころなつかしの君

清水ぬしを訪ふ

風にゆらぐのうせんかづらゆらくくと

花ちる門に庭鳥あそぶ

松壽庵にて秋夕を

雲見れば雲の色かなし水見れば

水の色かなし秋のゆふぐれ

奈須野

ちがやまじり眞萩花さく奈須の野を

馬のり並べなすの湯にゆく

おほぞらにもゆる火の山あふぎ見て

千ぐさの中を行く野道かな

奈須温泉

湯の宿のひるまさびしきつれぐに

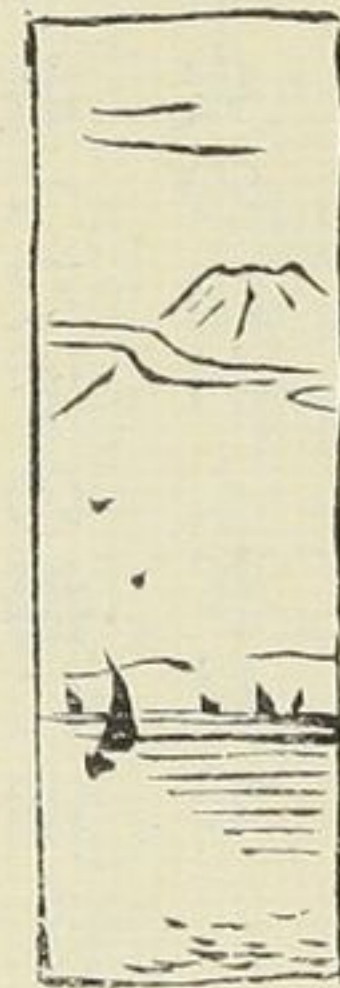
忘れし日記をかきつくる哉

茶臼嶽

山荒れに木だち枯れにし奈須山の

かれ木の林あきのかせ吹く

(明治三十二年)



大つごもり

昌

綱

田舎のいづこまで静かなるにか。今日は大つごもりにはあらずや。されどさして往來の繁きをおぼえず。人足の今日をはたとあわたしげにも見えず。車の歩み遅きは、猶昨日の遅きにひとし。げにも都にありては、いくばくの黄金積みたらむとも、人の力もてあがなひがたき静けさなりや。

煤掃は昨日しもなしをへぬ。煤掃といふもことごとくしや。旅居の窓の十にも足らぬ疊の上に、一人起きふす我身なるを。されど猶ふすまはづし、押入の内なる柳行李本箱を始め、くさくさの手道具ども取出して、一つく整理し、天井の塵を拂ひ、鴨

居までもぬぐひ、さてのち我身を清めをはり、心地よきおのが部屋に入りきて、取かへし床の花瓶打見やりつゝ、靜かに思ひやれば、此一とせの塵といふ塵、けがれといふけがれも、ことごとく洗ひ流し、やうにて、胸のうちとみにすがくしうぞおぼえたりし。

旅宿の勝手は、さすがに朝よりとよめきゐつ。明けなば新たまりての膳の上に、よそひ飾るなる、取合せの青き羊羹つくるべく、今しも箱の内に流しゐるは、宿の老し主人なり。刺身の赤きならでいたうべざりし昔こそ、我もかゝる物に箸つくるを待ちわびしか。御節おせちの料なる牛蒡蓮根芋にんじんなど、主人の妻娘をはじめ、はした女二人三人とりまきて、互かたみに庖丁の手いそがしげなり。

片への室を見るに、こゝには多くの女たちの、もちひ切りながら、我は十よ、いな十五よなど笑ひさゝめける、夢の中に年を送り、夢の中に年を迎ふる若きどちの、現にも苦は知らぬ年頃なりや。

我も家にありし頃は、さすがに春の設けにも心は動きたりし。羽織の紐、帽子のはいのせばき廣き、色をえらび形ちをもとめつ。さて今日と押しつまりし此夕べには、うから打集ひて、まづ今年も事なくてと、ことほぎ言ひかはし、祝つぎひ酒の一杯に、軒端の梅はまだかと、庭下駄はきて下におりたてば、さと吹きくる寒き風に、薄赤き面てさまされて、あわたしう我書齋に入り、知人録ひきいでて、廻禮の順路さては葉書出すべき所々どもかきをへ、猶も外に手おちひなさか、座敷の方へいかに、

掛物の取かへたり、國旗のいかになど、さゝやかなる事にも心用ひたりしを、今や旅宿の一客、又さるわづらひのあらざるや嬉しき、ありうるや樂しき。

忘れもやらぬは、五年前の此夕べなりき。兄君姉君我と三人、夕げものすとてある家にいたれりしに、ボーイのいつになく驚き迎へ、夕げにやと問ひぬ。驚き迎へしもことわりにて、げにさる夕べなど、誰かは家こぞりてかゝる所に行く人のあるべき。我等は浮世の外なりと、見知れる顔の互ひに笑ひつゝ、二階に登り行きしに、あなうたて、あらゆる椅子は片隅に積みあげられ、ストーブのもと螢火の影だになき、誠に浮世の外なりし。さて辛うじて席へとゝのひつ。ともにく語りあひつゝ、其年の安かりしを祝ひ納め、來ん年の幸あらんを祈りたりし。

其次の年の大つごもりにや、はた前の年にや忘れにたり。兄君の家の筋むかひに住みませる老儒なにかしの君、晝過ぐる頃より訪ひ來ましゝが、はしなくも兄君との間に、古代の歴史につきてのある論は起りたり。さて論らひ給ふ室のこなたに、姉君のゐましつ。何くれのまうけに暇もなく、又勝手には女たちの、重詰ちゆうづめの献立、煮物かけし釜の下などに目も廻らんばかりなる。已れゝこなたの室にて、兄君のかはりに出ゆくべき用事とゝのへむつ。かくてかの論は夜に入ても果しなく、遂に來ん年迄の預かりとはなりたりき。誠にことやうなる大つごもりなりし。

旅宿の庭におり立てば、そこいつの間にか掃き清められつ。盛すぎし山茶花の、いさぎよくの散りえずして、一つ二つ地に

おちたる、見るからまづあはれなり。垣のこなたの老梅のもとに、旅宿の幼子の三人つとひゐて、追羽根に餘念もなし。あけなば共につかんといふに、今よ今よ今つきてよと、羽根打すて、我につきまよふ、いとらうたし。

西南にむかへるはなれ座敷には、此程より一老僧の、轉地療養の爲來りぬつ。附添ひをる若き僧の、うやくしく湯呑さゝぐるさま、今の世の法師のやうにもあらず尊とげなり。

表二階の一番に、四日前より來れる三人づれあり。祖母らしきと孫二人となり。九つになる男の子の、秋の末よりいたづきて病院にありしが、退院せしやがて轉地せるなりとぞ。今一人は其子の姉にて十七八にもや。此表紙畫と同じ雑誌を二三冊、外にも書物數多もてき給ひて、御隠居もお嬢様も、絶すそれらを

よみぬませりとはしためのいひし、其雜誌といふは心の花なりき。いかなる人ならむとゆかしき心地す。

さなり其一番の室に、去年の今日は某工學士のありたりき。今年の今日いづこいかなる境にかあるらむ。建築の工事に懸りゐて、都を遠く離れをるにか、はた又替れる海邊に年を迎ふるにかなと思ひおこしつ。去年は此友も我も習慣とて、年越の蕎麥たうべに町なる一小庵にゆきたりし。待つひまの徒然に、友が建築場にて常に指揮する職人の話いできつ。さてそれよりそれとうつりゆきて、彼らが社會にては、此蕎麥をたうぶる事を、繩をたぐるといふなりと、たぐりつゝぞ物語れる。三十日蕎麥といいつの頃よりの習はしにか。此處の里にも何庵といへるいと多かり。かの馬くるまのゆきかひ繁き都大路を、五重

塔のやうに高くつみあげて、あやふげもなく急がしげにゆくらむ男の、今や行くらむなど、あやしき面影さへぞうかぶ。わが部屋に入れば、よみさしの歌集の上に、姉君よりの文届さゝるつ。恙がなく年を送り、つゝがなくよき年を迎へられよ。いひおこせられし幼なき三人の寫眞は、明けなば必ず寫して參らせん。文綱はお正月をたくさんして、とく父君のやうに大きうなり、父君のやうに眼鏡をかけ、父君のやうに髯をはやすべく、牛乳を飲むも何をするも、たゞく早く大きくなりたき爲の由、幼なき者のいふ事は、よろづに罪もなう、いつもくはゝゑまられてなど、なつかしき事どもゑるして、今年の筆とゞめ給へり。

机の上とりかたづけ、あすより書きつくべき新らしき日記ひら

き見つゝ、かゝる日記の何冊めや、吾終の日記なるべきなど、思ひつゝ、耳をかへせば、一間へだてて彼方の室に、碁の音はやまず。我のささなる歌集を再び手にとりあげぬ。



ふ な 着 き

一番船を迎ふるはしけこぎ出づる頃、陸には數多の車夫、番閹を引き始めたり。今日も濱近き友のもとを訪ひて、時をうつしつ。此宿の主人は汽船會社にいでて、晝のほどは五つになる娘と、若き妻とあるのみ。二階のすべてへ、夏毎にわが友の借るべく、定まれるなり。

今日は鯛のかゝりしやうなりと、友は双眼鏡を手にして、後ろの窓に立ち、沖の方を見やりぬ。玩弄の帆前船を、赤き絹糸もてつゝりぬたる、八犬傳を手にしたる姉弟も、一つ窓によれり。この姉弟は友の愛子、また吾ための幼き友なり。

お嬢様と可愛ゆき聲して、下よりあがりこしは、彼の五歳の子

なり。見せてやらんとて、共に窓によれば、和田通ひの馬車の、喇叭をたゝかに吹きならし、茶屋々々の腰掛には、煙草盆とりかへなぞす。

廣からぬ窓に集まりたる顔には、一つの双眼鏡、此方彼方とめぐれり。外の方よりこゝを見ん人の、何とか思ふらむ。われ等もし外にありて見られん位置にたゞば、快きものにはあらぬをといへば、友は笑ひつゝ猶見る。

解船やう／＼こなたに近づくまゝに、渚につどふ編笠、麥藁帽子など打かさなりつ。

待ちわびし人の影を見つけて、打笑むもあるべく、迎へたる友の、美しく化粧したるに妬ましく、とく黒くさせてむと、心ひそかにはかれる少女もあるべし。三々五々、迎ふる人、迎へ

らるゝ人、數もえらす。この濱邊も十年前までは、藁葺の茶屋二三と、切符賣る家とのみなりしを、今は一つの海岸町となりて、年と共に北條浦の名世に知られゆきぬ。

襦衣一枚の赤黒き男、例の紐つきたる竹を砂にたてめぐらし、はしけ賃をと呼ぶめり。

鞆片手に財布とり出す五十あまりの紺総、つゞいて在方者一人、富士詣らしき十二三人、千倉あたりのあやしき茶屋に行くやうなる女二人、その葛籠を肩にせる男、思ふにかの社會の口入なるべし。羽織きたる人、着ざる人、濃き一重、はでなるゆかた、第一のはしけの、辛うじて數多の人々を、やけたる砂路にうつしぬ。

第二のはしけの着く頃、表通りの窓下とみに騒がしう、車引

くどちが、熊、吉のよび聲たえまなし。我等も彼の双眼鏡を裏窓におきて、更に視線をこなたの窓にうつしぬ。

ヘルメットに色どりよき背廣の紳士は、左手に花形の小鞆、右手に何かの瓶二本さげつ。打つれし十歳ばかりの子に、果物入れたる籠と、杖とを持たせたり。

幼なき兄妹をさきに、品よき夫人の、従へし女も一人ならず、付き添ふ書生のもてる鞆と、つゝみとを請取て、頻りにぬかづきををるは、某旅館の半被きたる男なり。

氣のきゝたる商人躰の四人づれ、身のまはりも金目ものらしく、船にてかたむけしゑるしの猶醒めやらず、威勢よく車つらねゆ、さしづめ今宵は、御神燈への使たちぬべし。

都にては、海老茶袴はくべき同じ年頃の少女二人、目にたゝぬ

つくり奥ゆかしう、四十あまりの柔和なる伯母らしきと、茶店にいてひるたるが、合札の荷物持てこし車夫の、そを積む間に、塵多き一杯づつの茶は、銀貨とかへられたるべく、車をあとに従へて、睦ましげにありきゆく。

とりつきの茶屋に憩ひ居し、年若き洋服扮装の二人づれ、携へし寫真器を、互の車に乗せわけつゝ、訛り多き歎辞せじに送られてぞ出ゆくめる。

いつの間にか來けむ、向ひの茶屋より、後れ毛かきあげつゝ、車に乗らんとする女、中肉の色すきとはるほど白う、二十はたちの聲三つとひいでじ。銀鼠のあかしに、御納戸に紹の打合せ、長襦袢の墨畫は、ひつつめの鴨脚樹返いであかへしと、意氣をきはふべく、いづれほうき川竹のあだもの、ゆきくゝて末のはかなきさすらひ

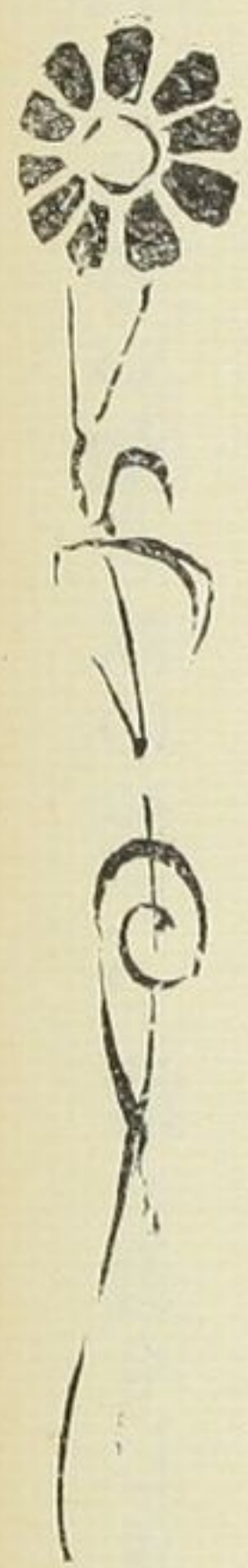
の身、一たびのゑめるが如き水の流に、清く美しくしき姿心をやどし、春もありけむ。浮世の罪か、親の罪か、みづからまうけにしあやまちかなど、思ひ及ぼすもいらぬことにや。さては頼まれぬ世に、猶たのみある、何とかいふ匣の、今日にもあと追ひて漕ぎつくなるべし。梶棒をあげし時、果報者と口たゝけるは、あふれし車夫の一人なりしや。

禮々しく路中に、挨拶のふる女と女、せはしげに駆けぬけゆく中學生、新らしきパナマのあとに、夏外套も車つらぬゆく、其あとより大きな犬も走りゆきぬ。

是來り彼さりて、濱邊もやうく静まりゆけば、身には暑さのはげしうおぼえつ。

罪深き此關所を越えにし幾多の人よ。今はたいづこに何をかな

せる。糊こはき浴衣に、風呂場案内さずるもあべく、とり敢
ず、電報かくるもあべく、風入よき二階にビール飲む人、西
日さす下座敷の暑さにわふる人、ふしあはせなるは宿とりそこ
ねて、日中を車に挽き廻さるゝもあるべし。思へば旅の世の旅
の宿りよ。暑さも寒さも暫しがひまの宿世、うたゝねの一時に
も、安き夢は多からぬをなど、あらぬ方へ思ひのはせゆかんと
するほど、かの帆前船のうるはしうできあがりて、弟の君は裏
の川へと行くに、かんちやんもと幼なき子のいふを、姉なる君
のいざと負ひて梯子おるゝに、我も友もさそはれて、暑き濱邊
にいでぬ。



春のみちのく

信

綱

都の花のちりつくしぬ。松島の千島百島ゆきめぐりて、
くれゆく春の跡を追はむとみちのくに出でたつ。一昨年
の秋たゞにゆきすぎし關本におりて、平潟の海を見、九
面の濱邊にいこふ。櫻石を贖ひては芳宜園翁の長歌を思
ひ、勿來の關の跡にいたりては古の武將を忍ぶ。
木がくれにうぐひすなきて春深き

關のふる道あふひともなし

湯本新瀧櫻にやどる。あると鯨岡氏に案内せられて、三
函山の麓なる磐城炭山にトロに乗りてゆく。

うぶすなの御社あれてくちはてし

鳥居のうへにふぢのはなさく

山路ゆく旅商人のせおひたる

花かんざしよわかき小ざれよ

地の底三千尺の底にありて

片時やめぬつるはしのおと

仙台の吉野君船岡の清水君松壽君岩沼までふりはへ迎へ
られたり。打つれて仙台ホテルに宿りぬ。題を探りて歌

よむ。家を、

終日のくるしきつかれ何かあらむ

妻あり子ありわが歸る家

松壽君と共に躑躅が岡にいたる。惜むべしこゝの花も散

り過ぎたり。政岡の墓にまうづ。

おくつきの石へかけても崩れても

のこるは君のまことなるらむ

向山にのぼりては林の中の都なる仙台を見おろし、瑞鳳
殿ををろがみては圖南の志成らざりしをなげく。

今の世をいかにか見ます老杉の

木かげにやすく眠りませる君

挹翠館の歌會につらなる。こは吉岡吉野君をはじめ新韻
會員十數名の、我爲に臨時會を催されしなり。紀念にと
廣き園の隅なる林子平の碑前にて撮影し、各當座數首を
詠す。詠じ終りし頃雷雨はげし。東北歌壇の眠をいやが
上にさまさむとてならむか。即景及友の二首、

こゝろざしいまだ成らずや七年を

おとづれあらず暹羅にゆきし友

兵士のゆき荷ぐるまゆきてゆく人の

まばしとだえし橋のうへかな

新韻會諸氏更に懇親會を催されぬ。小野田辰野小倉氏な

ど來りつどはる。今日しも 皇孫御降誕の報を聞て人皆

謹しみてほぎ歌數首を詠じぬ。

千萬ののぞみをかけてあれまし、

日つぎの皇子をことほぎまつる

土井君夫妻山家君と同車して鹽竈にいたる。晚翠君等は

扇溪にむかはれ、我等は大高森にむかひぬ。

うら若き望をのせてうら若き

歌人二人はるの海見る

わた中のかゝる島にも人すみて

家もありけり墓もありけり

一昨年は秋の松島を見、今年は春の松島を見る。我喜び

何にかいたとへむ。さはれかゝる境に伴ひまつりて老の

御心慰めまつるべき父母はいまさず。そゝろに悲しさに

堪へずしてうたへる、

父母に見せまつらずてわれ一人

二たび見つる松が浦しま

父母よゆるさせたまへいたづらに

年を重ねてなし、業もあらず

大高森へげにも天下の絶景なり。こゝに屢遊びし晚翠君

に、かしこにゆかむには夕陽の時をもて最もよしとすと
きゝて、山上の蕨を折り、土筆をつみて其時をまちぬ。
げにも天下の絶景なり。

松しまの千島百島百嶋に

光みちたるゆふづく日かな

山の上に立ちてわが見る夕づく日

明日の夕日たれ眺むらむ

天地のかゝるけしきにいだかれて

かくて靜かに眠りてしがな

こゝの案内者八木某は面白きをのこなり。ひとり山上に
わりて長き日をいかにくらしをるぞと問ふに、常には藁
をなひ侍り。此四日五日は畫をかゝむと筆とりる侍りと

いふ。そは珍らし、いかなる畫ぞといふに、出して見す。

反古の裏にこゝの景を覺束なげに寫したるなり。天地の
美、山水の靈に感じて寫しいでし畫よ。いみじき畫、尊
とき畫とい、かゝるをやいふらむ。

朝夕にけしきながめてこはき手に

かきけむ畫こそ尊とかりけれ

山暮れ海くれ四邊全く暗くなりし頃、山を下りて船にの
りぬ。十三夜の月は山を照し海を照しぬ。

白帆さえ船歌きえておぼる夜の

月にたいよふ千しま百島

夜ふけて、舟、松島村に近づきし頃、我らを呼ぶ聲あり。
汽車にてこゝに來りをられし吉岡君清水君等の、五大堂

にありて呼ぶなりけり。

岸によべば舟に答へて舟によべば

岸にこたふるおぼる夜の月

舟岡にいたりて飯淵君らと駄馬に乗りて、湯場松月樓に

ものす。馬上吟、

乗りなれぬあるじと知りて乗る駒の

又たゆたふよわか草のもと

のどかなる雲雀の聲よはる風よ

わが乗る駒の鈴のひびきよ

六部一人まづの男一人馬の上ゆ

見ゆる畔路あぜみちたゞはるのかせ

世の中の富よほまれよそは何ぞ

かすむ野みちの馬の上の我

駒とめて一ふさ乞へば賤の女が

折りてさゝぐる藤なみの花

をちこちの雲雀の聲は暮れはて、

鞍の上さむしはるの夕かせ

汝ながためにまぐさと、のへ我爲に

夕げたきてあらむ急げ我駒

摺上川の川上なる穴原温泉にゆく。瀧川の流は白たへの

さぬをさらすらむやうに、そゝりたつ大岩のこゝかしこ

には、藤山吹咲乱れたり。宿のあるじ歌をと乞ふに、

水の音鳥のさへづりこゝにありて

つたなき調いかでうたはむ

西那須野におりて汐原に向ふ。三里のますくなる原中の道を通ぎ、更に二里の山路を汐原につきぬ。山水の幽観へ彼の大高森の偉観と共に、こたびの旅の双絶とやいはむ。高尾塚にて、

はゝゑみて國傾ふけしたをやめの

おくつき寒しうぐひすのこゑ

汐の湯にやどりぬ。

藤ちりぬ山ぶき散りぬやまふかさ

十戸の村の春のくれかた

湯の中に足さしのべておい人の

やまひもまばし忘れがほなる

水青く岩白き箒川の岸を傳ひ、あるは天狗巖を仰ぎ、あ

るは野立岩にのぼり、所々の瀧をみめぐる。山深くして春遅く、櫻山吹今を盛なり。

たれ住みて憂世の夢かさますらむ

堂さゝやかに木だち老いたり

屋のうへに庭とり鳴きて山かげの

わら屋さびしく藤のはなちる

(明治三十四年)



乗 合 馬 車

昌

綱

山の上なる観音堂にも詣で、山の下なる安房物産展覧會をも見めぐりぬ。館山に歸る乗合馬車は、今しもいでなんとす。よき折とて友と我とは是に乗りぬ。友といふは山本村の人、我とは親しき中らひの、今日しも我旅宿をとひ來て、相共に半日を逍遙しけるなり。

此處は那古町の中央にして、旅人宿、壽司屋、漬物屋、蕎麥屋、猶つゞきては八百屋、呉服屋、紙屋、菓子屋など、賑はしき軒並びたり。御者臺にては、肩なる喇叭を吹きならずと共に、是等の家々より、もし乗る人の出せせずと、頻に見廻すもの、

如く、車掌は車掌にて、後ろになりし人々を、乗り給へ乗り給へと、手招きしながら此町を出でゆく。

我等の外の乗合は三人にて、隣れるは三十近き商人躰、前なるは中學生と、そがつれなる紺緋に兵子帯の男となり。前なる人を見れば、足の下に大きな風呂敷包を置き、絶すそれに手をあて、又其重みを計るなど、いたく氣にするげなるに、そは何にかと問ふに氷なりと答ふ。きけば館山の人にて、主人の妻の丹毒より脳膜炎を引き起し、いよゝゝ打續ける熱に、日々の氷を北條町より買ひぬしかど、八幡の祭禮もすみ、且は昨日今日の涼しさにて、跡仕入をせずとの事、いたく困じたりし折から、那古観音は開帳中とて、こゝにはと聞きしかば、急ぎ來れる歸さと委しく物語る。誠にこの人の氣にせしもことわり、一分は

一分より徒らに消えゆくべき、はかなき運命をもてる氷なればなりき。唯見る三貫目の水包よ。内にこもれる其責又大ならずとせむや。かくも短かき時間、はかなき運命に此世を縛られたる氷は、今や限なき運命を祈るべき、一家の人々にまたるゝなり。かくて其病者の枕べにはこばれ、熱にあつき額に、はた胸にのせられて、宿世のさだめを果すなり。熱に乾ける人の口に葬られて、あゝといふかすかなる息に、此世を立さるなり。永き命を人の上に祈りつゝなど、はかなき想像をたどりめぐらす隙に、いつしか靡きくるは、かの紺緞がふかす烟草なり。まかも成年未滿の中學生にも、その一本を分ちて燐寸をも渡しぬ。されどわが方をみて、何となう氣の咎むるらしく、手まさぐりになしをり。

馬車は那古の町外れなる、藁葺の家の前にとまりぬ。こゝは名物の木の葉煎餅を賣る家にて、七十ち近き翁の丹誠に焼きたるが、こゝらのみならず、都人の口にもよく叶ひて、夏は殊に賑はひつゝ、常に賣切るゝ事多ければ、我は今日の家づとを、行きがけに頼み置しなりき。十五六の娘、窓のもとによりきて、やさしき世辭と共に、袋を我手に渡すさま、野に生ふるさ百合花のそれにも似かよひて、いとまよかなり。我は心に祈りたりき。かくてかの娘の、今日迄も清く美はしき少女にして、今日より後もいよゝ清く生ひたゝむ事を、我は心に祈りたりき。もしも我思のごと、身も心も清くして、今日より後も、更に美しく打つゝきゆかばいかに。さては我思、かなたに通ひて、相共に百年を契るべき夢の世の、もしも有たらむにいか。

さらば我のかの藁葺の家の。若き主人とは呼ばるゝなり。かの翁ぞ我爲の舅なる。その時は翁が書くべき袋の木の葉の畫は、我まづかきてやらまし。面白き歌をも添へてかきてやらまし。又かの翁が餘命を、如何にして慰めむ。はたやさしき人の心を、いかにしてむかへむ。彼は雅びなる道を好めるや。彼が家の垣根には、うばらの花などいなかりしや。もしうばらの咲き乱るゝありて、今受取し紙づつみの、その花にてありしならばいかに。百合の花、堇の花にてもあらむに、いよくをかしかるべきをと。はては空想中の空想に我身のかられゆくを知らず。心づけはがたくと馬車へがたつきゆく。折しも御者臺よりは、まきりに我等にむけて話しかけつ。そは曾て御者が、逗子と葉山との間に、此業をとりぬし頃の事。

日蔭の茶屋近くに、娘は烟草店を出し、律儀なる父は草鞋を製りをる。さゝやかなる家ありき。娘といふは、その翁の一人子。二とせ餘りを、都に屋敷奉公せしほどありて、萬にまどやかなる起居ふるまひなりき。ある夏のあした、長者園より馬車を買切の紳士、その娘をふとながめ入りつゝ、過ぎゆきしが、引續き兩三度も逗子に足を運びつ。ある意味のもとに都につれ行くべく、様々に説きいれしめしかど、かゝる片田舎に、かゝるなりはひこそ營なめ、いまだ娘を黄金にかへむなど、あさはかなる根性は御座らぬと、顔として動かざりし翁が返答は、よそめにも實に氣持よく、彼娘もいたく打腹立ち、それより久しき間、親類の伯母の許にいたりて、人の往來を避けぬたり。今もその娘の、かしこの店にありやなしやなど、ゆかしがりて語る。げ

にも此御者の人摺れたる、語る詞の順序よくと、のひたる、逗子を踏わらしたる以前は、いづこの道をか毀こはしむたりけむ。思ひもよらぬ物語は、かゝる人よりぞめぐりくゞて廣びりゆくめる。

得意なる話に身の入りし御者は、時々思ひ出したるやうに、容赦なく馬を鞭うち、又前よりくる荷車引の小僧に小言を言ひつゝ、おくればせに喇叭を吹きたつるなりき。

御者が服装はいかにと見れば、垢づきし縮の折襟襯衣に、黒き羅紗の洋袴をつけ、白足袋に雪踏ばき、かしらには麥藁帽子の、鉢巻は既に裏がへしの功名をあらはし、やうなるをかぶりつ。車掌もこれと相似たる姿にて、異なる所は古びたれどもこれは正しく靴をはきぬたり。人込の中、道の曲り角にては、絶えず

飛びおりて馬のさきをはらひ、時としては其口をとりゆくなど、世話しき役廻の若からでいつとまりがたきわざなるべし。

湊川もすぎて八幡の社前に至りぬ。こゝにてかの二人連れはおりつ。松陰にわけ入りし二人よ。烟草の火は早二人の間につけられて、かの中學生も口うごめかしつゝ、いと大おほ様に歩みゆくなるべし、そが家の門にかゝる迄は。

馬車の内は三人となりぬ。氷にのみ屈托げなりし人も、御者が物語にまぎれて、暫し忘れたるものゝ如く、されど時々馬車の窓より頸をちいめては、家の内の時計をながめゆきつ。

あるは道ゆく車夫に聲をかけ、あるは立場の女、下宿屋の主人にまでも愛敬をふりまきゆく御者は、今や通りかゝりし下駄屋の店に、鼻緒ゆひつけつゝ、ありし内儀にも、一言を殘しゆきぬ。

ゆきすぎて我にいふやう、かの家は且那もおかみさんも弱くて、東京より養生がてらこゝに來りしなりと、そは説明をうくる迄もなく、かしこは我がまたしき家なるを。さはれ我は思ひぬ、かゝる職業の、かゝる里にありては、いづこ迄も愛敬をこぼし、多くの得意作りおく事に、抜目なく勤めつゝある事を。松原を越え、牛肉屋のまへを過ぐれば、「今日肉あり升」の札はかゝりぬつ。さきのほど那古の山より見渡し、時、軍艦二艘の入りをりしが、扱は早くも例によりて屠りたるかと、思ひつゝ、ゆくほど、四つ角を濱へとおるゝ荷馬車、町へとあがる人力車の、これかれにぎはしき境を横ざりて、そこより半町たらずのわが旅宿の門に着きぬ。

根本の夕べ

岩又岩のこゝしき磯をつたひて、やゝ平らなる砂原に出ぬ。ここかしこにて拾ひたる貝は、いつしか籠にみちぬ。櫻貝、袖貝、子安貝、潮貝、からす貝など、わが知れるのみにても六七種。蟹の子に問へどもわかぬが、猶多かり。げにいつもゝ此根本の濱に來ての楽しみは、幼な心に立かへりつゝ、是等の貝を拾ふ時なりや。

夏猶淺き夕日影は、海をへだてし天城山のあたりにかゝりて、希良の岬へと漕ぎ歸る漁船、やうゝ數そひつゝ、大嶋の島根の烟ほの白う、暮れゆく空にたちのぼりぬ。

老たるも若きも、男にたがはざる装ひにて、海中眼鏡をかけ、

櫛卷の頭をさりりと手拭にて結び、小さき浮樽と、網袋とを腰にゆひつけ、手にはハガシと稱ふる、物差形の細長さ鐵板を持ち、海底深く泳ぎ入りて、多くの鰻とりえし蟹女どもは、今や三々五々、磯歌心地よげに謠ひあひつゝ、其家路にとむかふ。彼等がかつぎゆく籠なる鰻は、そも誰が手より誰が手にとうつし渡されて、浮世のちまたには出ゆくらむ。今日は辛くも、岩のはざまに逃れ入りにしともがらも、明日は再び、彼等が手にいさり出さるゝなるべし。さてもかの蟹少女らは、かくて此濱に妻となり、母とよばれ、姥とうつりゆくそれまでも、かゝる業に身をさゝげて、望も懐かず、榮も思はず、からき此世を事もなげに終りゆく。幸とやいはむ、はた不幸とやいはむ。日は次第に落ちゆきて、遠き松原、近き茅原のたゞすまひも、

物寂しきに、勞れし友の唯一人、旅館の窓に待ちわびてあらむ、明日こそ友をも誘ひ來てと、一步一步ゆるやかに、濱づたひを歸りくるほど、とある大岩のあなたにきこゆるは、人の聲のやうなり。我は何心もなくそこにさしかゝりしに、うら若き男女、愁ありげなるさまにまめやかに語れるなりき。かなたのいたくおのゝきの色をあらはしつゝ、我姿を見守るげなり。我も唯ならず胸さわがれて、彼等を驚ろかし、罪をくゆると共に、湧きいづる想像の念にかられつゝ、旅館の高き石段を登れば、友はそこなる芝の上にたゞすみゐつ。君は濱にて出逢し人あるべし、と指さす方を打見やれば、我等が着きし時は、人もあらざりし室つゝきの欄干に、美しくしき女帯と、ゆかたとぬし待ち顔にぞかけられたる。

信越遊草

信

綱

車中妙義山をみる

久方の天のうきはしわたらすと

おとし、ほこのなれる山かも

軽井澤におりて、青萍博士の別墅を訪ふ。浅間山、樓の
前にそばだてり。

いかばかり底のおもひの深からむ

千歳を経てもたつけぶり哉

御代田

夏さむきあさ間がだけの麓原

雲ひく、おりてとぶ鳥もなし

上田舊城内明倫堂に、金井桃陽翁の壽宴に臨みて、

いのちもて守りし城は人皆の

あそぶ園ともなりにける哉

金井宣章君の案内にて、別所にいたる。道に石橋あり。

往來人車牛馬安全某寄進といへる石標たてり。

いつの世のいかなる人の恵にて

今日この橋を我わたるらむ

姥捨山に物する途上、千曲川を渡る。よしきり頻に鳴く。

葉がくれにたえせず何を歌ふらむ

其こゝろこそ知らまほしけれ

善光寺

老の身の命のうちまゐりたく

ねがひしみ寺みえそめにけり

とくはしる車はあれど山坂を

踏みなづみ來てまうでし御寺

老の身の孫の手からず機おりて

えたるこがねを今日たてまつる

ひれふしていのる老母おんなのいたゝきに

金色こんじきのほとけあらはれたまふ

千とせ經てきえせぬ法のもし火の

光いつまで世をてらすらむ

山岸光亨君に伴はれて、高田の古城に物す。

鎗たて、上下つけてのぼりけむ

大城のうちは麥生となりぬ

雪室にて

雪むろに酒をひやしてむろもりが

むかしの戀をかたる夜半哉

五智の海邊なる客舎にて

波きよき濱べにわかれ君に別れ

ひとりかゆかむ霧ふかき朝を

新潟

さみだれにからかさかりて本町の

朝の市みるたびのうたびと

赤倉温泉

みるがうちにこしの國原さえはて、

軒端にせまる峯のまらくも
碓氷川のはとりにて

年とへば手をひろげても見する哉

うつくしき子よ汝が家はいつこ

(明治三十三年)



少女ごころ

昌

綱

一番船の汽笛は、今日ひと日の別を告げて、今や北條の濱を出
ゆくめり。夏ふた月をいまし、海軍中佐の奥様の、船には猶つ
よからずとか。今日のごと静かなる日にも、やがて枕をすゑて、
横たはりやし給ふらむ。水兵服着せてあげし若様の、乳母と同
じやうに、我になつき給ひしよ。御目もとの愛らしさ。父君に
よくもあれ程似給ひし事か。東京のいづこぞ、よもわれと望み
ての、奉公にゐるまじきを、いかで此處には來りしぞと、人
なき折々の奥様の御尋ねに、始めの内こそ取つくるひても申上
たれ、厚き御心よりのそれと知りては、耻かしき事の數々も、

いつとひなしにきこえあげし。かの君や眞實の涙もたせ給ふ君ならむ。我をいとほしみ給ひしみ詞の、いかでく、假初の情にていはるべき。同じ牛込のうちと知りてよりは、懐かしさも一しほにて、仰せに甘えての母への届け物も、今より思へば厚かましさのあまりなりし。とひいへよべのみ言葉にも、こゝをやめて必ず我方にこよ、悪しうは計らはじとの御心ざし、とにかく母に申送りての上と、其場よりも行きたき心をば、強ひても押へていねたりしそれかあらぬか、心がかりなるは今朝がたの夢見。あゝ母様は何をしてゐ給ふにか。海一つ離れく、今の身の上。弟も折角進みし高等科の、せめて小學校だけは卒へさせたく、足らはぬ中の朝夕にも、筆よ紙よと人並に、取つくるひてひやるものゝ、たまには新らしき袴の一つもはかせたき

を、吹くが嵐の常とひいへど、あすの運もはかり難き我身の、猶今日の運にも捨てられ勝ちなる此姉を、隔たりても姉よと頼むなるべし。所詮は頼まれぬ浮世の、今日もかくて過ぎゆくにかと、今しも學校通ひの鞆を肩に、家主人の子の兄弟、打連れいでゆくを寂しげに見送りつゝ、片頬の乱れ毛かきあぐるは、帳場格子と筋かひなる、薄暗き女中部屋の椽先に座して、五日目交代の洋燈掃除に一人とりかゝりしか弱げなる少女なり。白粉のこぼれたる跡所々に見ゆる部屋の内、よべ着し衣は衣紋竹につるされつ。古びたる葛籠の上には、黒縹子にメリンスの腹合せ、たづな染の帯止、鏡立と手拭とは一つ釘にかゝり、片隅なる針箱のもとには、縫ひかけの襦袢の、存在に投り捨てられたり。

内證のかけ口客のかけ口、さては傍輩どちが互みのかげ口の、いつも絶間なき此部屋の内も、朝げをへて時もたゝねば、女中のすべてのおのがおのが役々にかゝりぬつ。されば涙多き此少女がせばき一天地に、少なからぬ思をはこばするには、今やいとよき折柄とは知られぬ。

少女は置き並べしランプの多くのうち、いくつかのホヤを取はづし、又片への箱より、鉄と油付たるきれとを出し、さてそはなる古新聞紙を小さく切りて、さきのホヤをふき始めぬ。つやゝかなりし髪の汐風にさらされたる、細き手の荒き水にもまれたる、すべてに憐れげなるさまは、誰が目にも映ずるなるべし。

さるにても懐しきは父上、戀しきは姉上、其なつかしく戀しき

御二人の、共に此世にいまさぬとは。あはれいかにしてかゝるはかなき運命の、わが身にめぐりきにけむ。父は武士の片はし、藩主が御國がへの時附きそひて、此里に暫し來給ひしとか。我のもとよりこゝに生れねど、さるゆかりある此わたりに見るかけもなく賤しき女中となりさがりて渡り來んとは。よしや此家の、名にきこゆるがごと、手堅きならはしをふみぬたらむとも、はた我身の萬に心くばりぬたらむとも、世の人へさは思ふまじきを。されどそれもせんしや。昨日なりしか彼親切なる肴賣のおばが、烟草屋の店先に、我を呼びとめての立話にも、亡き父上とは同役なりし某の、今いたくおちぶれて、役場の走りありきとなりをれりとか。逢は、昔を思ひ出の、こも亦涙や多からむ。涙多き其中にも、とりわき忘れ難きは、七年前の

夏なりき。唯一人なる姉様の、縁ありて遞信省技師のもとに嫁
ぎましつ。其新らしき兄上に連れられて、この濱邊にと渡り
來りぬ。その頃は姉上の、春も若木の初櫻とて、麥藁帽子の少
しの紐にも、人といたがへるやう工夫せではやみ給はず。こゝ
につきし又の朝早く、姉様と二人して町の呉服屋に至り、紫と
白のメリンスを買ひとゝのへしよかりしが、歸りには道のわ
からず、梨の籠せおひし人に送られきつ。はては其梨をさへ買
ひたりし事、今に忘れず。僅かの休暇を何の爲に來りしごと、
泳げぬ姉様を無理に兄上のつれゆきて、波を飲ませられしに、
渚に立ちし私の泣き出つる事、そも又今に忘れず。されど其時
の悲しびは、やがて笑ひの種とは成にき。其朝の道のまどひは、
中々に楽しきまどひの道にて、ゆくてには猶限なき光の、我等

を迎へるしなりき。それらの樂しかりし事、嬉しかりし姉上が
家とのゆきかひも夢とすぎ、越えての春の始めつ方、姉上との
永きみ別れを告げたりき。世に頼みあるのはらからとこそきけ。
されどその諺は、我身の上には薄かりき。せめては甥姪の一人
にてもありし後なりせば、父君も御心強かりしなるべく、兄上
とのえにしも絶ゆまじきを、引きつゝきて父上のいたづきに、
入るゝあらず出るは嵩む朝夕の、もとより是とさす資産のある
にあらねば、父上の斃れまし、頃は、既に我家の倒れし後なり
き。

もろきが人の世か、弱きが此世の常か。はかなごと繰り返すに
はあらねど、避暑よ海水浴よと騒きたちし夏といふ命も、亦柳
をうごかす初秋風の、添竹もたぬ庭の七草、いづれは倒るゝが

習ひの浮世なるべく、懐かしかりし都の人の大方は歸り行くに、
 又今より、蔓延はびこるはこゝらの誰やらが、飲めぬを強ふる腕づく
 の麥酒攻めに、膝のまみの絶ゆるまもあるまじ。憚りもなき夜
 ふけの糸の音、旅宿が兼ねる料理茶屋とは、看板の燈火にも知
 らるゝを、えてたがふるは田舎の常、病氣にて逗留の客達にも、
 少しのなり替りても見よかしと、口には言はねど心には絶えず
 物思ふかたくなしき氣質を、今宵も令嬢の物わづらひかと、義
 太夫自慢の彼人が、通がりてのいつもの詞、客とわがめ女中と
 賤しめらるればこそそのうき恥を、夜着の襟に泣き明す夜もやう
 く、近からむよと、思ひは次第にみだれゆく少女心の、はては
 絶望のはかなき行末をやたどるめり。
 折柄こゝを見おろしの表二階の欄干には、ぢみなる紺緹、はで

なる中形など、櫛がけの四人五人あらはれつ。お嬢様お考へご
 ととは、誰よりかいひおろしけむ。さげすむにか、笑ふにか、
 はたなふるにか。いづれは同情なきともがらの、まばしは柱を
 はさみて何事かさゝやき始めぬ。かしら重げに見あぐる少女の
 目には、人まれぬ露の早くも置きて、清めしホヤも、ため息の
 霧にや曇りはてぬべし。



か　へ　り　道

解はしけは渚に着きぬ。船子へとく飛びおりて、砂の上の細長き板を船に渡すに、中なる人は二人三人づつ、刻み足にそを踏みをへて、やうやく陸の人となりつ。

その人々の三々五々相別れ行くうしろ影、寂しげに見やりつゝ、寒き波打際を立去らんとせぬは、銀杏返しの品よき十七八の少女と、十ばかりなる筒袖やはらかき男の子となり。

どうなすつたのかしら。

少女は一人ごちて、暫しうつとりしたりしが、幼子の袖ひくに心づきて、

力さんつまらなかつたわね、明日こそ三度目だからきつと入

らしつてよ、今日は負けたわね。

幼子へさも得意げに、

姉さん昨日もよ、だつて電報が来ないでせう。

彼は心に信ずるものの如く、さのみ氣も落さざれど、姉の心は安からざりき。

でもお手紙が来てゐるのよ。

今は姉よりも中々に力ある弟に、いざと促がされて、二人は家路に歩み出ぬ。

常は五六臺のそれさへ、大方は空しく歸るなる人力車の、年改まりて門松の色うるはしき昨日今日は、さすがに都人の此里にわたり來ぬるもありて、彼等の數もいつよりも多く、又いつよりも元氣づきて見ゆる、ことはぎ酒の名残のみにあらざるべ

し。

右に倉庫、左に旅館、休茶屋、汽船取扱所、いづれもまめかざり輪飾したる。や、ゆけば今日を弾きどめの琴の師が賑はしき門など、急ぎ足に通り返し時、おくれ來かゝりし車の、そをよけんとして二人は立とまりつ。乗れるは焦茶色の帽子に、毛皮の襟つきし外套きたる若者なりき。幼子は思ひ出しやうに、

だが姉さん、お父さんは御用があつても、達也兄さんはなせ先にいらつしやらないでせう。

幼子は姉の答を待ちつ。

そうねい……

愛らしき弟が問の、それによくも答へず、何に觸れけむ、さと赤らめし頬の色のあやし、やさしき胸のいづこにか乱れゆく

らむ。

達也とは誠に此少女が、末の松山波こさじと、父母がゆるしの人なりき。明けなばやがて、父なる人と共に物すべきよし、かねての文にいひおこせられたれば、父君は今日ぞ來まさん、さらばあしたこそはの今日を再び、汽笛のいまだ那古にかゝらぬ程より濱邊におりたちつ、辛うじて迎へつる船のうちにい、なつかしき父も、その人もあらざりき。

見渡しの枯田を越えて、松原のこゝかしこに立並べる家居は、いづれも都人のなりどころにて、連れだちゆくはらからの樂しき窓も、亦そこにぞ立まじれる。

中學校終へんころ迄は、田舎に住まはせんと、かねて重かりしいたづきを、此海そひに來ていやし、父が意見の行なはれて、

すなはち家屋敷あがなひて、母なるの絶すこなたに、姉なるは折々を來りゐつるなりき。

濱通なる四つ角の右の一方は眼科院、残る三方のいづれも立場茶屋の、その軒下には荷車所せき迄置かれて、腰掛のこなたこなたに、今しも晝けの箸とれるの、千倉和田鴨川など、東の浦々より、都に送るべき魚荷のみ載せこし男女なり。

よからぬ酒の、かをり高きそこを左に折れ行けば、こゝ半町がほど店つゞきにて、門毎に羽根つき遊べる娘たちの數も繁く、それらのつくりのいとあやしきに、更にあやしき顔ふりたてゝ、入り乱れつゞき、めきゐるは、こゝらの若衆なめり。

お父さんのお土産は、きつと紙鳶よ。田舎はいゝなわ。電信が少ないから。

不意にいひかけし弟の、罪もなき年頃かな。姉にこやかに打ゑみつゝ、ふと見やるかなたに、家なるはしための迎へゐつ。早咲の梅二三輪はこるべる垣根づたひに、奥深き杉の門を語らひつゝ、ぞ入りゆく。海の音とほくきこえて、庭鳥の聲あたりが高し。



暖 簾 口

やうやく寝かしつけし幼子の、ひと時は針もはこびなむと、たぎる火鉢の湯に水さし入れて、縫かけの衣とり出し、折柄、店の方音なふ聲のするに、屏風のうちそとかへりみつゝ、お都多は立ちて暖簾口、お紋さんかと親しげなり。

お紋とよばれし、此家より南へ一町餘り、新宿は橋屋とて、綿屋渡世の家附女房、年の頃廿三四、色少し黒けれど、眼鼻立みにくからず、そうじてどことなく引きしまりたる面もちの、こゝらにては數へらるゝうちなるべし。

母が注文の雲井の袋に、忠勇とかいふ巻烟草を、小風呂敷に包みしお紋は、其目をやがて奥の方に。源さんは今日も見えぬや

う、例のいまだ直りませぬかと、年には似あはず調子沈めり。こなたの色は動きをめぐつ。やんだと思ひしもほんの一時、こゝ四五日は大かた家を外、店の用さへ構ひつけず、ゆうべ一寸影を見せたぎり、あとさき見ずのいつももうと、末におぼるげに頭もうなだれゆきつ。

お都多は年二つ程の妹、襟足よくとゝのひて、丸髻の手絡若々しく、愛らしき眼のうち、常々たゝふる笑も、胸たゝならぬ昨日今日の、おのづから色にあらはれて、寂しき曇は拂ふによしなし。

又してもお都多さんに心配ばかりねと、慰さめてやるこなたの、同じやうに沈み入りて、我しらす見つむる前掛の、この焼焦はまあいつのやら。小路吹く春の風猶肌へにひやゝかなり。

ほんに源さんの此頃へどうした事か、うすく聞けば相手もわろく、其上遊びの外にあそびもあるとか、今更あらためていふでもあるまいしと、内でもいろく案じてゐますが、其うちに又氣も變りなさらうし、折を見て話もできやう、何のいつ迄つらい事のみつゝかうぞ、心配は誰の上にもはなれぬもの、くよくくとのみ思うてゐず、夜よるなと氣晴しにお出たがよい、學校時分の昔話、まんざらまぎれぬでも有ますまいと、思はず腰を据ゑかけしお紋は、時計の音に心づきて、そんなら今夜はと立いでし門の下水板、送り送らるゝ二人の胸に、深くあたりし影や何者。こゝより斜の濱通を、今しも汽船よりあがり來しとおぼしく、草鞋ばきの查公に守られて、年老し繩附の男一人、北なる警察たむろにやひかれ行くなる。

虎 十 首

信

綱

風つよ勁く草枯れ臥せる麓原

虎の足跡あとあり此處に彼處に

肉しむらの翼うごかし尾を撃ちて

山の大君山川渡る

雪の夜を旗亭きていの酒に酔ひしれて

張三李四の虎物語

虎をだに搏たば搏つべきをのこわれも

今日の今宵の別悲しき

片破月天にかゝりて八峯八谷

震ひ裂くべき虎の一聲

一人がいふ市に虎あり又いはく

市に虎あり恐ろしの世や

霜ぐもり月くもる夜を若き虎の

吾妹わきもにあふと八重山こゆる

虎にあはゝ虎をうつべく銃つとりて

古き城訪ふ象の上の旅

雲を敷きて結ぶだうし道士の峯の廬

虎の兄弟はらからかどまも門衛かどまもりをり

恐ろしみ踏む人もなし村長が

垣根にたわむ虎の尾の花

(明治三十五年)

明日のわかれ

昌

綱

すさまじかりし雲のたゞまひ、打よする波の響やうく静まりゆきて、西の空赤う暮れ残りたるに、引き揚げし漁船六つ七つ、膚寒き夕べの風に吹き曝されつ。遠く聞ゆる金臺寺の晚鐘は、村々にや通ふらむ。遊び居し里の子らも大方散りゆきて、松陰の細道、暫し人の往來もとだえたり。

秋の女神がみ舟なす三日月の薄き光は、いつか中空にすみ渡りつ。打仰ぐ二人が、飽かで別る、悲しびの胸を射通して、宿世はかなき縁しの思を、今更のやうにかき亂しぬ。さらば如何にしても明日は歸りますか。少女いかくいひ出ると

共に、砂山の小松がもとに、力なき歩みを止めつ。
男は心もとなげに、あたり打見やりしが、やをら其處にかゝまりつ。さて低き聲は續けられぬ。

君が語らんとする所は、大方推しはかりぬつ。二人が物がたらんも、早今宵のみとなりぬ。君が文のよしあらずとも、我とても今一度、委しういひ残し置かむとは思ひしよ。世に咲出づる花の、必散るがごと、相逢ふもの相別るゝ、又人の世のさだめなるべく、いづれは悲しき夕べの出こむとは、もとより君も知りし所、唯其覺悟のかくとみにせまりこしは、假初なる我畫筆の、多く助けたる業なりしとは、返すくも悔いて猶足らざる恨なり。世は皆夢の一時に、醒めてはかなき昨日の契を、明日よりは寂しき窓のもとに、落ち散る木の葉數へつゝ、思にぞ

沈むべき。あゝ此世は遂に君と住むべき境あらざるか。祈るは唯君が行末の幸多く、圓まどかなる家庭の母とよばれむ春にこそ。かくいひをへて、太き息もらせる男の、きぬあやの文も既に見えわかず。

少女は早くも袖かみえめつ。假の世の假の宿りといひへ、かく淺からぬ心の程を語りあかしゝも、元よりとこしへに遂げがたき契の、今は斷念の清くはた美しくしきを君に見まゐらせて、君がみ名のいよゝ世に立のぼり、君が行末の幸多く、彼の君と共に、睦まじう榮えまさむ事を祈るべく、改めて此處まで誘ひ申しゝを、思ふ半のそれさへ聞えあぐべき力もなくてと、少女は泣きふしゝが、辛うじて寂しげに男の顔打守りつ。

ふと見かへるかなたの砂山を、歸り遅れたる海士の子の唯一人、

急ぎ足に過ぎ行く後ろ影、薄く立そめし霧の中に、やがて見え
ずなりぬ。松蟲の聲のいづこよりかやさしう聞えて、波の音物
まづかなり。

少女はこゝの濱に近き酒造家の愛娘、都なる女學校を卒へしは、
去年の春なりき。男は美術學校出身の畫師にして、既に都なる
某家のむこがねに立ゐつ。業を卒へなば即ち海外に赴くべく、
其用意とりくくなりしを、俄然病の鬼は、此うら若き畫師をし
て、前途の志を挫かしめつ。まかも其基は、語るべからず、云
ふべからざる痛苦の、内にこもれる故なりき。かくてゐるゆか
りのもとに、此少女が家の離れ屋にと移り住みて、二年あまり
の月日を、一たびも都に出でず、傍ら筆に思をまぎらしつゝ、
身を養ひ居たりき。さるを幸か不幸か、神のしもか弱き畫師が

情の手綱に、更に一つの病を綴ぢしめ給へり。世は皆冷たき石
の許に、いくたの不平をのみつゝ、月日を過し、畫師其人は、
今やまのあたり、世にも暖かくうるはしき眞玉の、露に潤へる
あるを見出したるなり。かくて其やさしき露の光は、熱せし畫
筆のさきに結ばれつゝ、秋思てふ畫題のもとに、美しくしくまた
てられて、都なる秋季展覽會の窓に掲げられぬ。

思ひ餘りて湧き出し詩人が誠の聲には、花に狂ふ小鳥も節を合
すべく、永久とほの情を訴へし畫師みづからが、胸にふれたる誠の
情をもて、深き思の筆よりなりし秋思の一幅よ。其艷麗の外に
溢れつゝ、熱き思の内に満々たる、觀る者をしてあらゆる感歎
の聲に迎へしめつ。かゝる才筆を持ちながら、此二年を空しく
病の爲、田園の生活にゆだねし畫人の、瞬時も早く其身を強う

し、其志を翻へして、再び世にたつの春に相あふべく、世評は極めて喧かりき。さるを是と同時に、計らざりしモデルの物語は、あらぬ意味さへ打そへて、世に傳はりぬ。畫師は益す激しに激しつ。はては已れを忘れて、いかでか歸らむ、此儘に此濱邊に住みはてむと迄いひ出でぬ。少女はかねて畫師が家の事情のもつれたるを知れ、ば、人しれずかついさめ、かつ慰め、且はげまして、いよく此里を立去るべく思ひたしめつ。さてしも二人が上に、今日の此はかなき歎きを繰返さしむべき、秋の夕べは與へられぬ。

少女は道すがら摘みこし小草の花を、大方むしり捨てつ。短き人の一生を、長かれと祈るこそ常なるべけれ。あはれいかなれば、我とちゝめての苦しびに踏み迷ひけむ。都に出し三年が程

よ。春は花のうららかなるもの、秋は月の清らなるものとのみ思ひ居たりし。かく申さば、心淺かりし身よと笑ひ給はむ。誠にあつき涙もつ我身とは、ゆめ知らざりしよ。さるを此一とせが程、内には我をいつくしみ給ふ父母ましつ、外には我を迎ふる故郷の海山あるにもかゝはらで、花は春のはかなき幻、月は秋のあはれなる寫しゑの心地せられて、せばき胸に新たに刻まれし愛の釘のさても鋭く、はては人の情のくるしきをさへ思ひ知り侍りき。かゝる契の末いかばかり、暗き世をか一人たどりゆくといおぼさずや。ゆるされざる思の、かくてとこしへに消ゆる時あらぬ寂しき身、哀れなる世とはおぼさずや。望多き君が上につきまとふはかなき雲の旗手は、遂に靡くべき夕べにもあはで消えゆくなるべし。わが罪の深さ、わが上の恐ろしさ。

とかういさこえわけに語らじと思ふ物から、空に雨あり、人に
 涙あり。降り出ていつすむべくもあらぬ庭たづみの、せめて
 は我心の水に、とこしへ變らじの一言をやどしおき給ひてよ。
 其み言葉や此世かの世、はなれざるわれらがかためにこそ。情
 極まりて、其儘冷たき小草の上に、倒れむとせし少女のつや、
 かなる髪に、暮れゆく風のさと吹きたちて、膝なる花のあたり
 にちり乱れつ。

語りまし、ことは、今更きくきかぬの愚かさ。繰返すべき要も
 あるまじきを、などさは心弱ういはるよ。さてはあすゆく我
 身の心さだめを、又もたがへしめむとにか。否さにはあるまじ
 きをと、くらくなりし海づらを指ざしつ。風ざたりと見ゆる波
 のけしきも、底の心は計り知るべからず。平和は常に妨げの聲

に打追はるゝとか。我とても一度ふみ出でし道の一筋に、誠の
 道、たゞしきあとをしも、踏みゆかむとすれど、よりく君
 にも語りしが如く、人は我身をして、殊更にけはしき道にはこ
 ばしめ、あらぬ苦しびを與ふるもの、やうに覺えつ。こは我ひ
 が心の、まか思はしむるかは知らねど、さる雲霧深き中にしも、
 我と選びてまどひ入にし過去の夢よ。是皆か弱き身、幸うすき
 己れ自らのなすわざながら、其迷ひ其過りは、遂に今日のごと、
 まどひ多き、嫉み多き、寂しき生涯を作りなすべき身となりは
 てつ。それを今打破るべき、打こはすべき力の、我にあらぬには
 あらねど、などか、あらざるにはあらねど。や、激したる聲の、
 猶いひつゝけむとするを、少女は暫しと遮ぎりつ。
 そは前の夜にもくれく諫め申し、なるを、さる寂しき御心を、

假にも重ねて出し給はむには、いよく我罪のほど恐ろしうて、神のみ前にもたやすくはゆきがたからむを、やくなき事いひいでて、又も胸苦しうせさせまつりしかな。君があつきみ心は、今にして胸にしみ通り侍り。た、せ給へよ、いざた、せ給へよ、日は全く暮れはてたるを。

立ならぶ沖の小嶋の上に、夕月や、傾ぶきそめて、柏崎西の濱あたり、燈火の数は見るが中にまさりゆきぬ。相たすけつ、辛うじて歩み出でにし二つの影の、魂たまいづくか、わけゆくやかの松の下道、蟲の聲又ひくし。



交通遮断

学校のゆきがけに見ておいた桃の花、あまりのほしさに断りもせず、小さな枝を折つたのです。つい一言そういへば何でもありませぬのを、黙つて折つて息もつかず、駈足に歸つて來た裏口、ちらと見えたのは洋服にサール、私のはつと驚おこきました。八十やそさんとこのお爺さんが、桃の花一枝位で、そんなに怒おこるやうな人でない。毎日毎日青物を擔になつて、私の家に賣うにくる人ですもの。よしんばこれが大事な花で、おこつてすぐと言いつけたにせよ、何で私よりさきに此處に見えてゐられましょう。是は何か外に用があるからであらう、と立派に思ひは思ひましても、盗んだといふ弱みがありますから、何となく氣がかりで、

いつものやうに威勢よく、家に這入る事ができませんでした。で、ごく静かに、知れないやうに、椽側せんがはからあがりますと、目早く見つけたのは、こんどの試験すぎから學校にあがる、今年七つの妹の浪、待ち兼たやうに飛んできて、私がおいた學校包の上に、それとも知らずどしんと座りました。見れば可愛らしい其目には、唯ならぬといふ色をあらはして。

妹の話では、まだはつきりと聞きとれませんが、とにかくかうです。それは表二階の三番の座敷に、此間からきておいでた東京のお客、そのお客が大變こはい病氣にかゝつて、今日の夕方病院に行くので、サーベルをさした人や何かが、大勢つめてゐるのは其爲である。其上方々の座敷にゐられた、外のお客たちはいふに及ばず、二階下の四疊半にゐて、私に唱歌を教へて下

さつた、あのやさしい書生さん迄が、私が學校に出ていつたあと間もなく、荷物や何かをみんな持つて、車に乗つて大急ぎにわきに引越したとの話なのです。

これを聞いて、桃の花の事はまづ安心しました。がこん度はそのこわいといふ病氣、それは一體何であるか、どうしてあんな人たちが來てゐるのか、更に合點が参りませぬ。どうぞして母様か叔母様になと、お聞き申さうと思ひましても、あちらの方は大變忙がしそうですから、其隙が有ません。女中たちも何だかわいゝと騒ぐ。でもいつものやうに、いやな鼻唄まじりではなく、何となしに重々しそうな様子です。見ればボチまでが事ありげに、あちこちと歩いてゐました。

そうかうするうち日も暮れかゝりまして、病人のお客は釣臺に

のせられて、裏口から病院に送られてゆかれました。私を驚かした人も、其あとからついて。

今迄氣のつかなんだ表門は、ちやんと煮めてあります。石堀には紙で書いた物が張つてあるとの事。

此晩父上は私をよんで、明日から五日の間學校を休むのである。それで試験前ではあるし、毎日本をよくおさらへなさい、又庭の内で遊ぶのよいが、裏からも表からも、外へ出て遊ぶ事はならぬ、友達も呼ぶ事ならぬとお言ひになりました。妹にも同じやうに。

瓶にさした桃の花、それは美しくう咲いてゐますが、此晩ほど寂しい晩は、私が知つてからまあ有ませんでした。

老 車 夫

我旅宿より半町と隔たらぬ道ばたの松陰に、さゝやかなる藁葺あり。こは此あたり不思議の夫婦とて、人の語り草なる銀三の住居。住居といふは名ばかりにて、一年三百有餘日、唯の一夜も此家に宿りし事なく、晝間だにこの敷居うちに足ふみ入るゝを見し事絶えてなかりき。さらば彼はいづこを宿とし、いづこに食をとれるか、即ちわが旅宿にてなりき。銀三はわが旅宿にありて、料理場の洗ひ方にもなり、庭はきにもなり、遠き出前の時、御膳籠になひゆく男にもなりつゝ、一日の半のこれらの仕事にて過しむつ。かくて又その本業たる車夫として、もよりの船着場ふなつちに出るなり。されど彼の齡既に六十の坂をこえ、

殊には年よりも増して元氣うすければ、仲間よりは、老朽車夫として、且は最も氣のきかぬ、働のにぶき、話相手にならぬ男といはれをり。旅宿にても、子供など乗せての急がぬ仕事、時間ありあまれる汽船場への送りなどならでは、足にぶき彼を出す事なし。唯大方の車夫の、家に歸りて後、一杯かたむけし所などへ使のゆきたらんか。折には怠りて出ぬ時など、銀三の上はその仕事の落ちくる事あれど、そはいと稀なりき。かゝる有様なれば、従ひて車も美しくしからず、薄くすりされし赤毛布の、一種異様の色にあせはてつゝ、その見苦しき車をひき、其みにくき毛布を肩より引かけ、洗ひざらしの半被に、つぎ多き股引をうがち、前齒の落ちし口を恐ろしう左に曲げ、禿げし頭を風にふかれつゝ、我家の前を過ぎてとぼくと、旅宿の門に歸り

くるを見し寒き夕べなど、われは限なくさびしき思にうたれたりき。

外にありては、多くの侮りと嘲りともて送り迎へられつゝ、大方は財布も暖かならずして歸り來れる彼は、更に又新たななる敵を旅宿の内にひかへをれるなりき。そは女中の一むれよりなり。帳場の有様、主人の氣風、朋輩どちが氣心をさへ、いまだ知り得ざる新參の水仕女にすら、彼は侮ぞられぬ。まして半年と馴れぬる者、一年と居据りし上^{うは}まはりの女中よりは、甚しき輕しめをうけぬつ。

かくも内外の鋒先鋭どき彼の身には、そを慰めんの人なきか。そを慰めんの家なきか。慰むべき妻はあり。さはれ彼の妻は慰むる妻にあらで、苦しむる妻なり。心をやすむべき家はあり。

さはれ彼の家はいこひの家にあらず、いとゞ苦しむる家なり。家には八釜しき、八つ當り強き、頭をかしに馬鹿よばはりする妻の、恐ろしき眼ににらみつけて、此處にらわが城郭ぞといひげに力りきみかへりつゝ、老いて猶ひるまざる鋭き舌にて、いひまくらるゝに至りては、屠所の羊のおぢくゝと震ひをのゝくのみ。銀三の生れは北條の町つゞきなる長洲賀。妻は北條の生れにして、此二人が夫婦となりたりしは、今より二十年の昔とぞ。銀三はもと造り酒屋の家にありて、藏男を勤めぬしが、其當時も働のにふかりし事は、今日より押し量りみるもたやすきわざなりき。されど正直に勤めあげつる結果は、いさゝかの貯蓄をもなし得たりき。入夫として銀三が妻の家にゆきし時、そこには先夫の子の五歳になれるが養はれるたり。かの貯蓄は其後いか

にかなりけむ、誰も知る者なし。先夫の子は十二三の頃より、都へいだしやりつ。妻は唯一人なるおのが子の、無事に仕わけてとく歸りこん目を、ひたすら楽しみに待ち渡りぬ。これにたがひて夫婦の中らひは、年と共にひやゝかになりゆきぬ。かくて樂しからぬ月日は、射るが如く流れ走りて、子は恙なく洋服の職を身におびて歸り來れり。いく程もなく新たにそが店は町にて開かれたりき。其折の母親が世間への得意はおびたゞしきものにて、其得意の反動は、我夫の上にはげしくふりかゝりきつ。悴の立派になりえしを見るにつけ、役たゝすとのみ口くせのやうなり。間もなく嫁は迎へられたり。親のそれには似ず、夫婦の中らひ極めてうるはしかりき。されどまた母子の仲は、やゝ疎くなりゆきつ。母親が昨日までの自慢の聲は、日一日と

悴夫婦が批難の聲と變りゆきぬ。されどそも亦久しからずして悲しき叫び聲は母の口よりいでぬ。目前の不平をおきて、力と頼みしいとしの我子、唯一人なる我子へ、はげしき病の爲に不歸の客となりぬ。誠や此折の母が歎は、廿三年の愛を、更に繰返さしむるの外はあらざりき。新所帯の苦樂をになひて、いざやこれより睦まじく、世にいでたゝんとせし若夫婦は、一夢のはかなきに過ぎずして、嫁もやがて實家へひきとられたり。洋服の機械臺、仕入れし服地の残り、附屬物裝飾品など、それよりそれと手をかり口をかりつゝ、老母は涙の中に一つ／＼賣りゆくべき仕儀とひなりぬ。かゝる悲境に落ち入りし結果、夫による同情は、冷やかなりし上を更にひや／＼かならしめぬ。銀三はいつよりか我家の入口にも入らで、わが旅宿にのみ起臥すや

うなりぬ。

おはれなる老車夫、車の輪碎く山坂道のそれよりも、猶さかしき人の世めぐりゆくとて、遅き歩みに車上の客より罵られ、族宿の下ばたらきにはしためより嘲けられ、世に唯一人の慰むべき人なる妻よりさいなまれて、さていつまでか長らへをるらじ、残の齡のこり少なく、頼むべき人頼もしからぬ世に。



刀根川ぞひ

信

綱

手賀湖

岸とよむ太鼓つづみの音に鴨狩の

舟こぎさほふ手賀の水うみ

鴨網の鈴の音さこゆ又さこゆ

今宵のえもの籠にみつらし

鴨狩にいにし吾せの歸り道

風寒からむ夜ふけにけり

滑川なる高橋山風同刀畔閣と共に飯岡なる神山魚貫翁
 の家の跡を訪ふ家は皆こぼちたれど遺愛の松猶池の邊

に残れり

總ふさの國はにふ殖生の小田に言の葉のよき種まさし神山をぢの翁

こゝにして歌おもひけむ歌人の

面影うかぶ松の下かげ

同じ翁の奥つきを訪ひて

やすらかに世をすぎし君後の世の

夢もやすけし老松のもと

滑川に樽屋榮藏とて歌好める人あり

春の目を樽うちくらし秋の目を

樽うちつゝも歌おもふ君

とる業に高さ賤しきけちめあらじ

かついそしみてかつ歌ふ君

香 取

經津主ふつぬしの神のみ靈たまやこもるらむ

神風さむし杉の下みち

天そゝる千ひろはこ杉神の代に

神の植けむ千ひろはこ杉

鹿 島

鹿島のや神のみたらし水清し

神代眞清水今もすむらむ

潮來雜詠

いたこ潟十二の橋の夕月夜

水ゆるやかに舟下りゆく

君が爲あむや眞菰のあやむしろ

菘は成りぬ君が來まさぬ

川くまに藻の花匂ふ薄月夜

いたこ少女が糸竹の聲

山風刀畔閣と雨中利根川のほとりに別るとて

雨さむきとねの川水とま舟の

あなたこなたの別悲しき



(明治三十五年)

冬の夜

昌

綱

餌をかへてやりし軒の金絲雀は、けたましましう鳴きいでぬ。内儀は今朝よりの田端屋ゆきに、できぬながらも書げの支度は我の役。茶碗洗ひしは今のさきなるを、時計の針は早くも三時なり。已みの之よそれでは留守を頼む、知れる通りのお店の聳入、歸りは十時を過ぎむ、仕事へとくさり上てよし、御馳走の折づめもて來む程に、ねぶくとも待ちてゐよと、打つゝむ胸の苦しさを知り給はねばせむもなけれど、子供にてもだます如く、いつにも増して親方の上機嫌、いでてゆかる、後ろ影を、見るさへつらき染色匂ふ田の字の半被。あれよ今宵の祝儀の爲、出入ものたちの者達

に分たれしとか。あゝ今宵の祝儀、我は何として此一夜を送らむかと削りぬし杉板たゝきつけん迄、我を忘れて立あがりし已の助は、俄かに店の戸引きたてゝ、僅かを残し、障子ごしに、光弱き冬の日を通はしめつ。木屑鉋屑ちらばれる仕事場の片隅に、力もわらず倒れかゝりぬ。
おとうと弟子の金太は、拗こじらせし風の、よべは熱さへありしかば、今日ひと目を免されて、二階の六疊に臥しぬつ。折々催す咳嗽しほぎの、薄暗き天井より響き聞ゆれど、已之のおのが胸の苦しさに、とひてやらむの氣もつかず。
繰りかへしなば人や笑はん。さればとていかで忘れうべき、幼なかりし其かみの事ども。館山の安達屋といへば、土地はおるか、此國の浦々にもきこえたりし料理茶屋の、父が自から庖丁

とりてのいそしみ、都の人の口にも叶ひて、折柄年と共に盛りになりゆく海水浴の、年と共に我家も榮えゆきしを、ゆくりなくも我兄の、其頃土地に來りぬし^{えり}裕赤き女と、おだなる契結びかはして、家の金持ち出すうち、猶頼みありしも、遂にここより少からぬ金借り集めたりしを懷中^{ふところ}に、家を走りて再び顧みぬ禍の、父の怒大方ならず。さる性^{さが}にていなかりしをと、悔めども過ての詮義いやすに道なく、辛くも凌ぎをつけたりに、傾ぶく運のこれやはしにてありけむ。木枯吹きすさぶ曉の寢耳に、打ならず半鐘の、火元は五軒と隔たらぬ裏町よりおこりて、猛火は見る／＼打廣ざりつ。はては我家も再びたちかたき境に落ち入たりしが、それこれの基となりて、ふと病みまじし、父がいたづきの、いく程もなく悲しき別れとなりつるは、

今より二とせ前、わが十七の春まだ寒き頃なりき。母といふはのち添の、母とよびてより僅かに三年をこえず。さはれ三年が程の情は情、家の爲我等が爲につくされし恩、今更惡しういふにはあらねど、いはねばすまじ父の死家の没落をあとに、いづこへか隠れゆきつ。誠の母君いままさんには、打續く不幸のうちにも、いかに心強かりけむを、否々誠の母君世にいまして、これらのわびしき數々を、見もし聞もし悲給は、いかばかり歎き悲しみ給はん。それを思へば家榮えぬたりし頃別れ申し、こそ、中々心安かりしか。あ、何事も忘れむ、忘れはてむと思ふ胸の片へより湧きたちくるは、訪ひ訪はれにし田端屋との昔の交はり、かなたは堅き呉服商の、あとにもさきにも唯これのみを、美しくしき玉と育てあげし、お絹とてわれよりは年一つ下の、

親しかりしは今思ふも唯夢のやうなり。我を養子に貫はむの時
には、七子は黒の五つ紋に、仙臺平の袴、必ず見ちがへむ事な
るべし。お絹が裾横様の袴もゆたかに、白き衿えり氣高うかけて、
座敷の床の前に、はづかしげに並ばんさまの、目に見ゆるや
うにてと、やゝもすればかなたの母の、繰返し語りいづるに、
さる事のおすが目にもあるやうの心地せられて、遊ぶるし二人
が幼な心にも、胸たゞならず騒ぎたちつ。かなたのにげゆけば
こなたもおくれじと走りいでて、行くさきいづこ濱づたひを
小石拾ひくゞ汐入川の川口、袖ぬらしゝも幾たびなりしぞ。諏
訪神社の祭の日、宿禰の花車の繩さきには、町内の子供等のい
づれもつくが習ひとて、われもかの人も、皆と同じ揃の浴衣着
て立まじりつゝ、いでぬ力も一生懸命、かぶりゐし牡丹の花笠、

いつの間にか破れたりしを、かの人の早くも見つけて、よしと
いふをとり替へくれし。よそ人ならば何とかいひのゝしるべき
幼子どちの、名にしおふ田端屋の秘藏娘、われもさすがに、父
が羽振の大方ならぬ頃なれば、唯わけもなく打笑ふのみ。月寒
し観音堂は十夜じふやの夜、念佛のあとといつものごと浪花節のある
といふに、つれだちてゆきたりしを、人一杯にてすはりもえな
らず。椽のもとにゐしを、折よくもいで逢し肴賣の彌太といふ
親切爺の、忽ちよき場所とゝのへくれつ。歸さには迎ひの來て
ありしを、あぶなしとて中々ゆるさず。門迄送りくれしに思ふ
やう話のできざりしと、又のあしたの不足かこともをかし。めづらし
き春のあわ雪、かの人のもしも知らずばと、かけゆきし店先に、
かなたも知らずばとかけいできて、同じ心のはたと落ち合ひつ。

其まゝわが家に伴なひつゝ、其頃は猶おまし、母君・都の勤めさきより、折しも商用おびて歸り合し、兄上など、一つ火桶のもとに話したりし。學校の歸さ、今宵は面白き事文にかきてあげむ、必ず返事をといふに、送るべき人前におきて、後のたよりのをかしからずや、書く事あらば今いひ給へ、歩みつゝ聞かんほどにといへど、かなたはきかず。口にていはいはれぬなればと、うつぶさし横顔。又も例のと思ひつゝ別れたりしも、其夜となればさすがに忘れがたく、もしも誠に書や來ると、いく度となく立出し帳場格子に、お嬢様よりとさし出す、使の役は女中の糸、偽りならぬもさすがに嬉しう、とる手遅しと開き見れば、罪もあらぬ摘草ゆきのあすの誘なひ、誰がつけ智恵か名宛のみは花髻様の、そもそれを始めとして、日毎顔あはすひまを

猶絶間なき互の心、いひ送りいひ來る玉章は、積りつもありて箱にぞみちぬる。其箱なりき、その箱なりき。恐ろしき火を後ろに逃げゆきし其折にも、忘れずとり出しは、誠に其箱と父が渡し、手提となりき。それよりのちの事、あゝそれより後の事、最早思ひいださじ。思ひ出れば恨みも多かるを。父はさる低きなりはひこそ營なみゐたれ、世にも珍らしき迄心直く、潔よき性なりしかば、田端屋の兼ての望、改めていひ來らねど、心にはそれと悟りおまし、を、家は倒れ我身も倒るゝ今はの際にだに、さる事唯の一言も、口にし給はざりき。我父ぞ誠に、世の中のなりゆくさま、世の人の移りゆく心のうちをも知りぬきぬ給ひて、女々しういたよりもせず、いひ残しもし給はざりしよ。うつくしみ掛けくれし、こなたも相應に榮えぬし程にて、

今や家もなく親もなく、もとより貯へもなき身の上に、行方知れざる兄上の、よくなりて歸りさまさんには云ふ事もなければ、萬に一つ淺ましき姿と變りなどして歸りさまさんか、かたみに相扶くべき唯一人なる兄、唯一人なる弟の身として、いかで打捨ておがるべき。さるのちくくの關係かづらひども思ひめぐらさんには、などて今更われを養子に迎へん、引とりて世話せんといひいづべき。頼みなき我身、力なき我身を、いかで昔のかたらひに立もどすべき。立もどさじとつとむるは、親々のいちはやき胸算用。かの人のみいさすがに猶娘心の、昔の馴染さながら捨てしとにもわらず、ほだすともわらぬあやしき境に、我も知らずくさまよひつゝ、人しれぬ救ひの泉の甘きにゑひて、故郷遠く去りもえやらず、程近き此村に、何ほこりに日をすごしむ

けむ。よしやこゝなる親方夫婦の、都より移り住みきて、我ありし昔の事ども、委しう知らぬといへ、建具屋の弟子と身をくだして、おめくくと今日までも、我顔さらしむし愚かさ、げにはづかしかりし我姿。我はかくて遂に捨てられしなりき。捨てらるゝ身の、かねてより思ひまうけるし今宵の事、何今更に胸さわがする。今は思はじ、何事も今は思ひいださじ。あゝ戀しきは父母をろひまし、頃よと、かきむしらるゝ心の苦しび、はらすによしなき巳之助は、闇より闇をやたどるなる。外との方にとり残されし金絲雀は、折しも又ひとしきり鳴きたちぬ。日足短かさ冬の空の、今年も既に十日とあらず。潮止橋の橋のたもととは、日に添へて賑は、しき夕べ夕べの、今宵ひとりわけ田端屋の婿様拜まんの女づれ少なからず。風寒き汐入川の川端

を、八幡の方より眞一文字に、威勢よく打つゝき來し數多の俣は、かの橋ふみとゝろかして過ぎゆくと共に、あとに追ひ續く無數の人影、夕日はまたく沈みはてぬ。さきの程より此橋のほとりを、うつぶき勝にさまよひぬし一人の若者は、今しも人波におはれ行きし俣の方を見守りて、やゝまばし立たりしが、何事をか心に定めけむ。渡りかけし橋たちまち背面そがひに、ゆくさきやいづこ暗き川づたひを、寂しき星にまもられつゝ。



菱花亭

補陀落や岸うつ波のこ、那古寺觀世音、仁王門を入れば左につゝく掛茶屋の、暖簾の文字は菱花亭の南椽。むかへば心の曇り晴れて、入日美しく照らす富士の裙、淡く低く續けるは伊豆の山々、南のはての一きは高さそれよ天城山、夕づつは知らぬまに空にさらめきて、鷹の嶋沖の嶋薄墨の色やうくさしそひ、漁船の幾むれ一つ動き二つくづれつ、見るが内に別れ別れてこなたへかなたへ、春淺き風乗せて歸る鏡の浦のゆふべ。かの方様のみ館も似たり富士見町の高殿に、始めてあの山ながめしひ、忘れもせぬお近さんに連れられての日ぐれ方、私の濱からも見えますわと、思はず云ふたをお聞きなされて、私の濱

とほどのやうな濱ぞと、一ひらお明けなされたガラス障子の内、机にもたれてのお聲に、喫驚びつくりして飛び退いたを、お笑ひなされしそれが始めてのお目見え、奥様のお顔をひきしめての、男らしい中におやさしい方と、お近さんが初手からの噂、夢のやうに戸をたて、その縮こゝの縮を、教はりしもよくは知らず。逃げるやうに下におりて、考へれば考へるほど、何が何やら猶夢の間の三日目の晩を、母様のお出。どこで御奉公するも其身の爲、勤めに何の樂があらうぞ、幸ひ伯父さんも御出入するお屋敷の事、萬づに都合はいふ迄もない、そなたによう聞いてからでなくば、歸つてからの呼び戻しは、船の往來ゆきの私わがのつらい、できる事なら辛抱せよ、約束の羽織、裏うらへそなたの好み通りを、伯母さんと一所に見たて、今日やつと仕上げましたと、風呂

敷ほどいてのあついお諭しも、有がたい親の慈悲。何の否やが御座りませう、一年が二年でも、屹と辛抱しますると、まづかり云ふたをそれではのお歸りがけ、何よりも體からだを大事に、當分あたひはもう、と今更に心弱い母様の、見れば眼の縁いつか赤いに、私もたまらず其ま、泣きふしたを、誰いふとなくお奥にきこえて、はては彼の方様のお耳にも入り、喜美はたいそう泣いたそうなど、當分は笑ひの種に、やうくお詞の數もますますにつけ、嬉しいやら耻かしいやら、唯うかくと寢覺戀しき故郷の空、いつよりとなく忘れゆくに、たつは早き暑さ寒さの丸三年、よく無事に勤めあげたと、お譽めなされるは父様母様、お喜美は斯うくで一つお屋敷通しました、是からは暫らく山での手助け、來年は年まはりもよし、よい聲持たせてやりますと、兄さんま

でが同じやうに、何のまわ三年が無事にすまうぞ。思うて思うて思ひぬいても、知らず知らずにお通しなされた、高い垣根の花ならば何の花か、低い賤しい葎のきが檐の、育ちのよしや缺けたりとも、心の眞實まことにたがひがあらうぞ。お情深いお心づけの、同じ事ならみんなの分の、私一人に集まつて、いはれぬ思のどうぞして、と恨んだも歎いたも、此身一人で遂に消えてゆく胸の炎。あゝそれも今は、それも今は、はかない、はかない、みんな夢。

むかひの阿彌陀堂の、扉いつか閉されて、うつとりと立ぬし耳もとに、入相の鐘響き渡れば、お喜美はあわて、店先に駆け出でつ。駄菓子蒸菓子いろ／＼の、ガラス箱に入れられし隣には、稻荷壽司の賣れ残り少し。かへしなば底やいためる急須いくつ

落花生の袋入、密柑串柿など形の如く並べる端より、それ／＼に取片づけつ。洗ひ流しの水、表にさつと、こぼせば静まる夕べの塵、お喜美は又も空あふぎ見て、え堪へず洩らすため息の、かうべを伏せば地に白し。どうせ寂しいつらい身の上なら、なせ其まゝに續かなんだか。來ては蝴蝶のちら／＼と、ゆうべも下総屋の奥座敷に、唄うてゐたは慥かに小米さん。明くれば去年よ暑さ盛の八月なかば、お屋敷さがりてより丁度四月ぶりを、思ひがけない學校のお休やす暇みに、かの方様のおいで。お宿はどこぞ棟一つ置きし山田屋の表二階。行くにやすく行くにつらく、父様と二人お尋ね申上た其晩の苦しさ。何をまわ苦しんでと、思ふても思ひきれぬ私の心の、いつかうも弱うなつたか。又の日は朝より山へのお越し

に、似あふたよい世話女房とお詞、耻かしさはいよく添はりゆくに、氷削りし手の、思へばようもすべらざりし。手繰船のお供は、これと兄とに致させます、今でこそお屋敷にをりましたからとて、此やうに都ぶりますもの、小さい時は随分と泳ぎも達者に致しました、明日は是非お目にかける事で御座いませう、といつにない母様がたはぶれ口、双眼鏡をまはしながら、それは知らざりし、是非にくのとのみ。あとからお着きのお友達も、一つ大學のそれはお睦しいお顔なじみ。汐見の松のお歸りは、墨下ぼくげの公園にお立よりなされませ、山本も梨は盛のよし、御案内は父がと申上れば、若い者に年寄は無用、そなたならばとのざれ言を、それと知つてもどこやら嬉しう、町にかゝりし夜芝居の、これには母様と私とをお連れなされしに、

目につき安いのこゝらの常、其夜をおかず、をかした事のやうにいひふらすを、勿體ない腹の立つ、そんな事そんな事をと、打消す心の底はあやしうも立ち騒ぎつ。お友達のお持ちになつた寫真器械、いやと申したを強ひて芭蕉碑のあの梅の木のもと、かの方様もそこにお並びなされての横むきは、軒ば並びのいつこもまだ出てぬ朝のひま。樂しかつたも僅か半月。耻かしかつたは其時も、昔も變らぬ我身一人の思ひ出草。此梅の咲く頃には必ず来る、待つてゐよと寫真お渡しなされての一言、朝な夕な聞きなれし汽笛の響も、いとしい君を乗せてゆく、頼み少ない船かと思れば恨めしう、放れ兼し波打際を、船は其日のみ早く、大武岬だいぶさきを曲るやうな心地せられて、泣き明し泣き暮したはまゝ幾日ぞ、お着狀の私へは別に下されたあのお文、あとに

もさきにも、唯それのみを今も大事に、人知れず取りいだすあの
 寫眞の、とく暮れよ此一とせ、明けなばいつよりも早く咲けよ
 此梅と、思ひつゞけ思ひつゞけ、待暮し待明す心の駒のゆるび
 なう、あけて嬉しく春風の、はや吹きそめた昨日今日を、盛はど
 うでもこゝ十日のうち、文して申上やうか。いや〜お目にか
 けるでもないまづい文字の、梅も咲き申候の一くだりを、何べ
 ん書き消す事であらう。其上あけて笑はれて、破られて塵籠の
 内、二度とはお手にもとられまいを。あゝどうしたらば私の心
 は通じやうぞ、あゝどうしやうぞ、もうもうもう、云ひだすま
 い思ふまい、はかない、はかない、みんな夢。
 こし方の浮び出る数々くりかへしつゝ、暮るゝもよそにお喜美
 は立ちまづみつ。目を閉れば又もあらはるゝ其人の影、拂へ

ば袖をかけぬけて、かなたに立つや、りゝしの俤。思はいよゝ湧
 き立つのみ。お喜美何してぞ、まだしまはぬかと、先の程北條
 に行かれし母の、いつの程にか暖簾の下。

暮れゆく小路小路の、そこにもこゝにも燈火の數やう〜まさ
 りて、海も空もひとしく暗し。あだなる爪弾は、山の下なる千
 代本あたりか。なつかし山田屋の二階、そこにも燈火の影は見
 ゆれど、いとしき君の影のとゞめず。恨めし此石段、石の數よ
 みます後ろに、従ひゆきし夕べもありつるをと、たどるもあは
 れ思の闇、戀の翼は北にぞかける。梢高き杉の村立、折からの
 風颯颯として。



月 な き 空

八幡^{やはた}に物せし歸さ、寂しき松原をやうやくはづれて、とある家の前にさしかゝれば、入口の障子明け放され、火影は我踏む道にと指しつ。何心なく内を見やるに、その妻を始め、四五人の娘たち圓居しつゝ、手に手にトランプを持ち、今や其遊び半なり。妻といふのも、銚子あたりの料理茶屋にありしとか。さてもかしこに集ふ少女たちの、行末遠き春の海を、あたらわやしき方に舵とらるゝもとゝよと、思ひつゝ通り過ぐるに、左の暗闇より不意に出でて、すれちがひ行きし女の、こも亦かしこにと入りたり。

時は猶早けれど、暮れては長き冬の夜とて、大方は板戸さしこめつ。酒屋の店にコップ三つ四つ並べる、誰をか待つらむ。家の者は風呂などに出行きしか、主人一人拂塵^{はたき}をつくりつゝあり。

そこを過ぎて半町餘り、左側の古道具屋の店、こゝも未だ玄めてあらず。春慶塗の膳の上に置かれしブリキの湯わかしは、ランプの光に反射して、其まはりなる我樂^{がらくた}多^たあらはに見ゆ。都の内ならむには、夜毎を荷車に乗せられ、さだめの大道に持てゆかれて、寒き風に吹きさらさるゝ頃なるべし。

月なき空の星ひとりさえ渡りて、今朝刈りこみし髪^{かみ}の、いみじうも衿寒^{えり}し。ふと音するを何ぞと心すれば、上なる電線のかゝりゐるなり。こなたよりかなたへか、彼方より此方へか。凶か吉か、善悪さだめ難き世の中を、今ゆく便りのやがて紙にうつ

され、名宛の家の門を入らむ一刹那、とにもかくにも人の胸打動かすは、此針金一筋の傳へぬる業なりけり。人の心の他人の眼に、他人の耳に、他人の手に、他人の口にあづからずして、此針金のごと、音にいづる其瞬間一直線に、かなたの胸に至りつかんものならばと、又も苦しき思の湧き立ちきつ。

かなたより来る人影の、近づくまゝに話のはたと絶えたり。男は船乗の常に着る萬祝をまとひぬしが、顔のわきがたく、女はうつむきて居たり。ゆき過ぎて又、いかなる話のつゞけらるゝにか。

豆腐屋の前を過ぐるに、浪花節のだみ聲高く流しぬつ。そを立どまりて聞きゐるは、小提燈さげし年寄なり。

古着屋の店も、薬屋の店も、僅かに一二寸を残して戸ざされつ

ゝ、ひつそりとしたるに引かへ、そこより五六間をゆきし右角の立場には、このあたりの若衆ら集まりゐて、笑ひ聲どよみ渡れり。かの浪花節の聲は、こなたへと来るやうなるが、こゝにては調子にのりて退引ならず、銀貨すつる男もありなむなぞ、見かへりつゝ通りすぎて、旅宿の門を入らんとするに、闇を破りて聞えくるは、館山灣に碇泊せる軍艦の時の鐘にや。



磯の藻屑

信

綱

暑さを避くとして大磯なる地獄谷のほとりに假の宿りをえ
めける時

あそばむに子らによろしく書よむに

われによろしき山かげのいは

近きわたりに清き泉あり

えばし語りて友の歸りし清水のもと

又一人にもなりにけるかな

海のほとりにて

わたゝけきまさごの上の一ねぶり

さむれば浪のわが足をあらふ

人はまだかよはぬ濱の眞砂路を

われあとつけてゆくあした哉

浪を

荒獅子の其子とられていきどほり

狂へる聲かあら波のこゑ

み越路の春のやよひの雪なだれ

それおもほゆるなみの色かな

白駒のえろきたて髪はるかせに

みだるゝなして浪寄せかへる

旅の女身をなげしてふゆふべより

かせなみさわぐ七日なゝ夜を

ある夜

夜あるきの大磯すがたまどけなし

これやみやこの名ある姫さみ

町にゆくひやかしづれのそゝり節

きこえずなりてふくろふの鳴

(明治三十二年)



雨夜のすさび

昌

綱

をやみなき雨にかこちるし夜なりき。わが旅宿に來合し、都なる蓄音器商某、そが器械を人々に示して、今宵の鬱を散すべく、帳場に通じたり。此の噂は早くも四邊に傳はりて、隔たりたるこゝかしこより、雨を厭はで集ひ來にければ、廣やかなる二階座敷も所せき迄にぎはひぬ。

我も案内につれて柱のもとに座しつ。列なりし聽手の中には、東京よりの客二人あり。一人は四日ほど前に來し官吏風の紋付にて、まかもわが隣室にあれど、今に言葉をかはさず。我性として、求めて他に接するを好まず。さりとして遠ざからんとは思はねど、傲然と構へたる其風姿の、我性にあはぬ故もあるべき

か。

一人は昨日着きたる新川の酒問屋の手代にて、こは取引の爲、月に一度は必ず来る男なれば、おのづから顔は相知れり。晩酌の名残は、今なほ心臓を愉快げに躍らせつゝあるめり。

今一人浦和なる銀行員あり。病を養ふべく、早一月の上を滞在せり。この人は絶ず病の話をしらずては、物足らぬといふやうなる氣風にて、神經に打まくる人なりき。相共に樂しむべきかゝる席にありても、猶思案投頸といふべきさまの人なりき。

我と斜にすはりしは、鴨川とて北條より六里をへだてし町の人なり。父と母と其娘とにて、明日の二番船に乗り、鎌倉なる半僧坊に赴くとか。父なるは五十を越たり。柔和なる容貌は、浮世の波をいかになだらかに渡りこしかを思ひ起さしめつ。此父

と内氣らしき母とに反して、娘のこせつかぬ挨拶ぶり、はた服装の田舎じみざるは、思ふに近き頃まで、都に出でて物學びせしなるべく、やがては天晴の妻君となるべきか。我はいさゝかあやぶむ。いかによき教養のもとに、いかにおほくの書を読み、禮儀作法を學び得たらんとも、そを入るべき家そのもの、夫其人のふさはすあらんには、あたらし螢雪の勞も空しかるべし。さるゝかゝる人の多くは、不遜の動作におちいり、夫婦間の愛もあたゝけきは多からじ。さらずばたゞ昔のまゝの内儀として、圍爐裏のもとに朽ち果つるが多く、兩者のなからをゆくべき事は、いとかたき業と覺ゆればなり。とにもかくにも娘もつ親心の、老いてますゝ安からずやあらむ。

其片へには、いつ見ても樂しげにはた得意げに自轉車を乗り廻

す北條町の某ありき。さはれ雨多き此頃は、彼が最も不得意の時代なるべし。

以上は皆座中の前側に座しつゝ、おもだちし聴手にて、銘仙の座布團を敷き、瀬戸焼の火鉢を控へつゝ、いづれも眞面目にとりなしをり。其後ろにつゞきては、隣の大工夫婦、筋向ふの古着屋の女隠居、はでなる前掛したる豆腐屋の娘、分別盛の床屋の親方、子にも甘かるべき菓子屋の主人、いつも糠だらけなる米屋の息子あかやねいろ、銅色したる老船頭、出入の車屋など、知る顔知らぬ顔にて障子のそと迄あふれつゝ、さては夕げの箸をも打捨て、かけこみし女中、煮出のにえつまるをも忘れし板前など、種々の服装雑多の模様は、畫師にも見せたまき好材料なりき。床の間には、今朝活けかへし菖蒲のいと盛に、其隅には碁盤と

みだれ箱との供へられつ。高く釣られし改良の大ランプは、時ならぬ珍客の聲に、いか計り驚きの色をふくめて、人々の上を照らすらむか。中央の机には早くも機械の運ばれつゝ、色付たる眼鏡をかけ、多からぬ口髯をまさぐれる運轉手の座したりき。

彼は人々の落付たる所を見て、簡短なる挨拶を述べつ。まづ第一として樂隊は生まれり。高低其よろしきを得たる奏樂は、うちしめりたる室内を一掃するもの、如く、後ろの方に聞きある人の多くは、いかにしてかゝる音の、かの喇叭より吹き出さるゝかをあきれまどひて、只管見つむるの外はなく、一方には幼なき子等の、足拍子かろくとりゐるも亦愛らし。

長唄の勸進帳につゞきて、清元の吉原雀といふがはじまりぬ。

き一節とは、ともに聽者をして感せしめつ。こゝまばらく目をふたげての静けさは、かつて都にありし頃、某がし従二位の古稀の賀宴に、餘興として催されし時の、それにも似たる心地せられぬ。

かくて越後獅子のにぎやかなるにて、終りを告げぬ。長生いさすればこそ、かく稀有けうなる物をも聞くなれと、打喜びて出ゆくおきな老女のあとに、我もつゝきて、我部屋にと歸りつ。まばし騒がしかりし階子段の響の、勝手なる皿の音とかはりゆく折柄、雨も晴れたる如きけはひに、窓の戸一ひらおしあければ、星の影三つ四つ見えて、見なれたる藪蔭の道を、打つゝきぬる提灯の影は、今歸りゆきし人々のなめり。

ま さ び 路

信 綱

一 昨年の夏は家こぞりて大磯の山陰に移りすみたりき。去年の夏はわれ一人駿河遠江の海に遊び、また安房上總の山をめぐりぬ。今年の暑さをいづこにか避けむと思ひめぐらすに、人げ遠き谷陰、波荒き荒磯邊は家人のわびらひ多く、はた幼児たちもかよければ、都近き海添をとて、再び大磯なる神明町に移りぬ。一 昨年の地獄谷とて、名おそろしき谷あひの家なりき。今年の家はた名は町なれど、桑畑芋畑の中にたてる家なりけり。二階にのぼれば、高麗山王城山は前にまみさびたち、波青き相模の海うしろにつゝきたり。我爲は山にむかへるが嬉

しく、子らの爲は山のこなたを流車のはせゆくと、海の見やらるゝとが、こよなき喜びなりけり。

海見ゆる窓の手すりによりそひて

幼なはらから白帆かぞふる

海邊にいでて、鏡の浦に病をつくるひをる弟を思ひつゝ、安房の山ふりさけ見つゝ思ふごと

相模の海をおもふらむ吾せ

清泉君訪ひ來られぬ。君は一昨年の夏を共にありき。今日しもかの家のわたりそゝるありきして、

ゆふべく書もて來つる橋のもと

今年は知らぬ人のすゝめる

百合の花を携へて、湘煙女史の奥つきにまうづ。床のべ

に物語らひし折の事ども、たゞ目の前にうかびいでて、小さなるをがめの花をながめつゝ、

やせしおもわにうちゑみし君

川田君鎌倉より音づれらる。共に小磯なる某氏の別墅を訪し歸さ。

賤がやのせとに遊べる庭鳥の

中にまじりて遊ぶ子らかな

久良岐君箱根なる畑の守源寺にあり。さいつ年の夏共に芦の湯に浴み、芦の湖を渡り、姥子、大地獄に物せし折の事ども思ひいでられ、今年もいかでと思ひつゝいひやりける。

君のすむ二子山のあたり見さくれば

雲こそおほへ二子山のあたり

長君、赤城の湖畔にあり。寂しき湖畔、人家は僅に三つ、
住む人は二十人に足らざる此湖の景色、一度は御目にか
け度なぞ彼わたりの様いとつばらに記しおこせられぬ。

山ふかみ神代おぼゆるみづうみの

きよきみぎはに歌おもふ君

折にふれて

山かげに昨日わがみしさゆり花

昨日の花の今日へなかりけり

たちとまりかへり見すれば君とわが

たゞ二すぢのまさご路の跡

(明治三十四年)

濱邊の朝

昌　　網

渚を離る、三十間の所に、流し据ゑたる筏の上には、早くも笑
ふ聲、波に響きてきこゆ。今日ぞわれ先駈ならむと、思ひつゝ、
出こしを、濱近き旅宿の人たちには、又も勝ちえず。

茶店の主人は、例の裙短かき筒袖をまとひ、熊手もて砂の上を
掃き清むるに、こなたには女二人、茶を入るゝに暇なう、主人
の妻は七厘のもとにありて、こゝの名代の燂ゆて小豆を煮るべく、
たえず團扇の風を送りぬつ。

椽台のそここゝには、早汐あみをへて茶のむ人、烟草ふかす人、
新聞見る人など、これかれ知れるどち語りあひぬ。

六年前の夏なりき。己れら此鏡が浦にあるともがら相はかりて、

一つの會をたてし事あり。さるは、大磯鎌倉の弊に流れず、房州の篤實質朴を、失なはざらしめんにありき。かくて其三とせが夏のはどは、會員らまたしく此北條に集まり、會のゑるしをつけ、あるは山に、あるは海に打めぐりつゝ、天然の風景を樂しみ、健全なる思想を養ひしかど、同人中、志ことに厚かりし某の、ゆくりなく世を去りしより、遂に中絶したりき。

今や房州の名は、年と共に世に知らるゝにあたり、又欠點の伴はれゆくこそわりなけれ。そはいふ迄もなく、都人が残しゆく悪しき所をのみまねびて、まめやかなる風俗うせ、人の心あらびゆきしことなり。此罪よ、誰にかとひ、誰をかたゝさむ。されど猶患ふるにたらじ、汽車てふ聲の入りこんまでは。

げにや都にありては、アルバカの上着よ、籠打の胴縮バンドよと、い

ひ騒ぐ襟高き紳士も、こゝに來りては、宿の浴衣に、兵子帶一つにて事は足るべく、矢筈くづしの明石縮に、紹繻珍の帶胸高にゆひなし、支那母衣の内ゆたかに、都の風を切りはらひたらむ貴女も、かしらに麥藁帽子、足には新橋か横濱かにてすむなるべく、昨日の櫛と今日の櫛とを、とりかふるなどの煩ひもなしや。

五棒縞の熨斗目形のしめ、七五三、破れ格子、市松、三升くづし、キの字認など、旅宿の浴衣をはじめ、あらゆる浴衣の標本は、此茶店に集まりつ。

以上の人々は、これより汐に入るべく、其支度とりくゝに、裏手の竹棹のもとにゆく。横縞襯衣しゃつの赤き青き、龜甲形襯衣の驕色紫色、あるは外國の婦人服めきたるま白き、黒きなど、様々

の海水着は、いとよく配合されつゝ、かの棹にかけられたるに、男も女もそれらの下をくゞりて、おのがじしおのがのを見出すに餘念なし。

渚は次第に賑はひたちぬ。探しえし水着を着るやがて、母の呼ぶをもまたで、波打ぎはにかけゆくは男の子なり。女の子はさすがに、姉の手、兄の手に引かれゆく。夜會の君、銀杏返しの君も、いつか美しくしき水着に着かへ、浮袋重げにひき行くなり。其あとよりは、こも亦我旅宿にやどれる某公爵の姫君たち、まづやかにおりたちゆく。

砂の上より、いきほひこみて飛び入りし學生の二三は、人々のかしらに高き汐烟をかぶらせ、見るが内に拔手して得意げにすゝみゆきぬ。かの筏へと渡されしふとき繩には、三間づつに五

升樽のゆひつけられ、その樽毎に、人の顔を集まれる。浮世の荒波には、たくみにきりまはすらむ人も、この波には、我身一つを辛うじてさゝふるが多かるべく、浮きゐる顔の數多のうちを、わが知れるのみ一わたりとりいでても、辨護士、理學士、質屋の主人、醫師、畫工、會社の取締役、某省の書記官、大學林の學生、仕立屋の主人、中學生など、さまざまなり。加ふるにこれらの妻子下婢を始め、吾我らぬ様々の人限りもあらず。我は思ひぬ、かくあらゆる裝飾を去り、あらゆる体裁をぬぐひとりて、たゞ見る四肢の活動にとゞまれる世界にありては、人間に貴賤貧富等、諸階級のあるべくもあらず。更に社會の何、國家の何をもうたふに足らざるよなど、一人心には、ゑまれ

かくて汐よりあがりこし人々は、いづれも茶屋の裏手なる井戸のもとにゆく。やがて衣ひきかけうちくつろぐや、ゆで小豆ゆで小豆と、そここより呼ぶ聲きこゆ。
立こめし朝霧のいつしか晴れわたりて、鷹の嶋沖の嶋をはじめ、鏡の浦の浦わ盡く見渡さるゝに、夜航の汽笛は、今や那古をはなれて、こなたへと聞えきつ。

曉早き法螺の音と共に、つどひたりし蜃人らは、見渡し一町ばかりかなたの砂原に、二列となりて、もそろくに地引網ひきあげそめぬ。げにや都人のいつもくゆかしがるは、此地引なりけり。君も來ますか、朝げをへて我もやがてなど、かたみに語りあひつゝ、こゝを出ゆく人影のやうく多くなるまゝに、われも共にとて、あしたの濱邊を辭し去りぬ。

磯めぐり

十五夜のあすとなりぬ。よべ旅宿の庭におりたちて、

涙おほき身なり戀なりまばしだに

あはれと照らせ秋の夜の月

月よく照り渡りぬ。今日しも兼て契りおきつる、七浦村平磯なる山口ぬしの許を訪はんとするに、あやにくにも空曇りはてたり。されど心には猶、今宵の頼みあるやうに覺えて、北條をいでたつ。

北條を去る半里、曲繩原まがなはあり。かの都に送る白土しらつちの會社は、此原中に建てられつ。山の麓よりこなた迄レール敷き渡したり。白土をのせて押しくるを車の

ひゞきも寒き秋の朝かな
この白の土堀り出さるゝ山を、大綱といひ、其山より左の方は、すべて山本村なり。千町田を越えてかなたに、白きぬりごめの見ゆるゝ、親しき小原氏の家居なり。

桐の葉の落ち散る窓に書よみて

静かにものを思ふらむ君

やがて國分村にかゝる。國分寺の内に、あはれなる三つの墓立ち並べり。そは房州萬石騒動の首領にして、かの屋代家の苛政を愁訴し、願意いまだ果さず、空しく毒刃の爲に、幾多の怨をのみて、萱野の露と消えし義民の墳墓なり。時は正徳元年の頃とぞ。

續日本後紀に見えし、伴直家主の孝子塚を、松原のかなたにか

へり見つゝ、石田村にかゝる。此處を過ぐるほど、順禮者の老若男女、いく群となく行きちがふにいであふ。こは安房三十四番觀世音の、今年開帳せられし故とぞ。脚絆草鞋ばきにて、赤き毛布青き毛布に塵をせおひたり。

孫の幸子のさちさては身の幸を

祈りめぐりて村に歸るらむ

稻村の城趾を右に見る。此處は里見義實の、新たに築きたてゝ、白濱城より移りし跡なり。

古しへの城のたか垣すゝきおひ

なでしこ咲けり城のたか垣

二子といふ所にて、追分を右に入る。左は和田に赴ぶく道なり。玉くしげ二子の村にふたりなき

村の花かも野菊折る少女
 安東、水岡をすぎて、牧田村にかゝる。所々に巡禮接待所のま
 うけ供はれり。村のうちより撰ばれし少女、襷がけにてまめや
 かに立はたらきぬつ。赤飯又は駄菓子などを、茶にそへてぞい
 だせる。

村人が厚きなさけいつかれたる

老の歩みをはこびやるらむ

千倉町にかゝれり。こゝより東海岸なり。平館、忽戸、川口を
 經て、晝近く山口ぬしの家に着く。
 ぬしは我竹柏園の社友、家の業繁さひまゝを、道の爲につと
 めて、志あつき人なり。ぬしの案内にてまづ磯わにおりたつ
 に、とび魚數多網にかゝりし所なり。

とびくゝて遂に飛び入りしとび魚の

宿世かこつか網の中にして

いたく曇りぬ。

頼みなき空とひなりぬ頼みなき

我世の果も知れといひげに

畑の小道を歸りくるに、片への小高き所に墓地あり。ひがん花
 咲きみちたり。

寺遠きおくつきどころおのづから

たむけられたり秋草のはな

打見わたせば、

黎の肥え粟のみのりて磯のべの

ちひさき村の畑のゆたけさ

歸りきて、暫し店先に休ひぬしほど、前を過ぎゆく少女の三人連あり。中なる一人は、北條のわか旅宿の娘にして、昨日より従姉妹どちうち連れ、巡禮に物したるが、今宵は千倉温泉に宿り、あすは北條に歸るよし語りて別れ行く。

ひなめかぬ深ばり小傘さしつれて

いで湯の宿に少女子いそぐ

日は暮れたり。空は晴れず。幾度となく外に出て見れど、空はいよ／＼くらうなりゆきて、遂に雨は降りいでたり。今はせむなしとて、かたみに題をさぐりて歌よみかはす。わが得しは、村、磯、述懐、相聞、橋、別、の六題。

七とせのながき月日を山かけの

村よりいでずわが世君が世

なつかしき磯の岩床なつかしき

人は世にあらずいその岩床

つらかりしうかりし昔思ひ出て

更に今日をば泣く夕べかな

賑はしき都に人はとつきゆきぬ

さびしき村にわれを残して

月や知れる其夜も月夜この橋の

橋のたもとに別れにし夜を

別るべき日は近づきぬとこしへに

君と別るべき日は近づきぬ

* * * * *

雨かあらぬかと、心づかひしつゝ、起き出て見れば、雨にのわら

ねど、空は昨日の空にかはらず。山口ぬしの家を別れて、今日の十五夜を賞すべくいひ送りおきし、白濱の社友古谷ぬしへとむかふ。山口ぬしはた、白濱まで我を送るべく、諸共にぞゆく。高塚山の麓につらなれる千田、大川、白間津の村々をこえ、薄打靡く真間の原を過れば乙濱、それよりやがて白濱なり。まづ白濱のはひりなる木村氏の門をとふ。こゝは去年の夏音づれて、二夜を宿りたる家なり。まかも主人のねもごろなる案内にて、野嶋が崎の燈臺、芋井戸、里見家の菩提所なる杖珠院の寶物など見めぐりたりき。

さてゆく事二十餘町、燈臺のはとりなる古谷ぬしに至りぬ。やがて三人打つれだちて、野嶋が崎をそゞろありきす。古谷、山口の二氏は、幼なき時よりの友、又道の上の友なり。人々歌あり

己れ。

軒低く窓かたぶきし蟹が屋の

屋根に咲きたり朝顔のはな

鯨とり太草てんぐさとりてちひさなる

磯わの村に老いむをとめ子

宿に待つ妹がつとは何よけむ

ま玉かよけむ真玉よせこ浪

此處のもど海中の一孤嶋なりしを、元祿の頃海嘯ありし爲、地勢かはりて、陸に續きたりとぞ。かの道興准后の、野嶋が崎の霧のむら／＼と詠みまし、は、此處のわたりなるべし。

かくて燈臺にのぼる。係の人案内して、いとつばらに説きしめす。

もゆる水またゝる音も世に遠し

十三丈の燈臺のうへ

古谷ぬしは、燈臺のもとにこそすまひつれ、のぼり見しは今日にて二度目なる由、隔たりたる我等の、かへりて去年も今年も見るものを、誠や燈臺もと暗しとひとて打笑ふ。

道をかへして、なにかし旗亭にいたる。雨のますく、加はり來れり。仲秋無月のまこととなりぬ。雨ふる上へとゞまらむもせむなしと、北條に歸るべく思ひ定めつ。

白濱の清きいそわに友をおきて

一人わかれ行く雨の夕ぐれ

かくて瀧口をすぎ、長尾川の流をさかのぼりて、神興、西長田、東長田の村々を經、北條に歸り着きしは、燈火こゝかしこに見

ゆる頃なりき。かへさの道にて。

長尾川ながるゝ水のきよき瀬に

家鴨あそべり雨の中にして

ひのき 檜山杉山にそひしやま畑の

もろこし畑に秋のあめ降る



鹿野山の一夜

過去の物語も興ありげなる老夫婦の一つ家に茶をすゝりて、いよ、山路にかゝりぬ。

一つ家の内外のけしき打とけて

語るいもせの昔をぞおもふ

別る、時老女の教へいふ。山に、舊道と新道とあり。新道は一里餘の廻りなれば舊道の方よからむ。さるゝつとめて狭き方狭き方にと行き給へと。さるを今や登りゆく道の、右も左も同じやうに、秋の小草乱れあひて、何れを何れと踏分けがたし。

秋草の花まどろなる麓原

いづれの方に道をとるべき

時は九月の始め、ふるき曆にては、今日しも三日月の眉つくる宵なりけり。されば西にまはりし夕日影の、残んの暑さ肌を射て、道へやう／＼險しくなりゆく。

嬉し。我より十歩のさきを、梯子背負ひ右手に鎌もちゆく翁あり。追いつきて、此道は舊道にやと問ふにまづあやまたず。我もそこまで芝苅りに登るなり。共に行かんと先だつ。かくて暫しが程は、翁との話たえずして、山路の苦しさもよそになりゆきつ。翁はさま／＼語りつゝけて、年々の暑さ盛には、山の上の旅宿に絶えず都の人を案内せしが、今年は土用なかばの雨のみ降りつゝきて、わが飲料ものみしろ少なかりきなぞいひつゝやく。

左の方に、いと廣き道あり。こは木更津街道よりのぼりくる道なり。四十雀の聲きこゆ。

なく鳥の聲のみひとり涼しくて

西日くるしき秋の山みち

かなたの新道を、村の醫師の馬にており來る見ゆ。

峠より下り三里の村がへり

村のくすしの馬にたくみなる

險しき坂を下り、更に險しき坂を登りゆくに、早かの杉山こそ
それなれと、翁いふ。

いたゞきにはど遠からぬ杉林

木立をぐらく物音もなし

辛うじて旅宿に至り着きぬ。

百にたらぬ山の上の家こゝにだに

罪もなみだも住む世なりけり

泊り合す藥商人烟草賣

話おもしろき山の上のやど

つとめて起出でて門を出づるに、霧いと深し。

明星の光やいづこわけ渡る

五百重の山の山のむら霧

ふと見やれば、一人の男、息もせはしげに、肴籠になひつゝ、
鯉々と呼びありく。かゝる山の上にかゝる聲を聞く、あやしき
心地す。

夜をこめて登りや來けむ奥山の

曉の門を鯉うるころ

二町あまりなる家並をすぎて、左に入れば藥師堂なり。境内の
ほびかにして、み堂の莊嚴なる、思ひしにもまさりたり。

そゝりたつ神の鉾杉ほこすぎの

中にいつきまつる薬師御はとけ

大寺のあけの高欄きりのうちに

隠れて見えて朝日さしのぼる

霧ふかき薬師み堂の朝まうで

宿のかり衣霧きりにぬれにけり

山門の前なる坂を下り、下町を過ぎや、登りゆきて、左手なる

白鳥神社に詣づ。試に石の数をよみつゝ登るに、二百十三段の高さなりけり。

み社の石のきざはし苔むして

こがら鳴くなり神杉の上に

こゝをおりて、向ひなる九十九谷を見おろす。

九十九なす谷また谷の谷あひを

出ては消ゆる秋のあさ雲

雲をのみてかゝなく鷺の聲もなし

あしたまづけき百重大谷

朝げをもなさぬ間に、かく遠きあたりまで見をへたる、我足のすこやかさよ。我いたづきのやうくおこたりゆくゑるしと、そゝるに喜ばしう、もとし道にとかへすに、大きな鋸を背にしたる木挽、山の方にとゆく。

世の聲は聞えぬ山に木を挽きて

日を送るらむ木挽老人

山の一日も楽しかるべけれど、歸さも同じ船路の旅の、空の變りゆかんもあやぶまれて、遂に此山を立いづ。

鹿野山朝たちくれば千尋なす

鉾杉のうれに百舌なきしきる



硯の物語

書き終へし歌の草稿を、讀むともなく暫し見つむる程、文机の上の大小幾冊かの書籍、幾本かの筆、水入、筆立、文鎮のいづれもは、いつしか闇の中に包まれゆきて、果は我身さへ浮世の外の境にもてゆかれし心地しつ。此奇異なる一天地は、或は海と化し、或は山と變じ、花咲く園生、鬼住む城の様々なる形を寫しいでたりしが、何者かの聲は罵しる如く聞えきて、身は再び住みなれし旅宿の一室、もとの机の前にとおかれたりき。清水の湧き出るが如き音、とみに我胸に響く。いふかし、何にかあらむと見れば、年頃秘めもたる硯なりき。彼は恰かも熟睡うまいより覺めたるさまにて、あるじの君よと、聲高にわれを呼ぶ。

我は茫然としていふ所を知らざりしに、彼のやがて言葉をつゞけつ。其聲音の時どき、なき父君のによく似てきこえつ。君よわびしき雨の目を、病ある御身のいかに頭重うおはさん、いかでわが暫しの物語を聞き給へ。硯のかくいひて形をたゞしつ、さておもひろに語りつぎぬ。我は君に仕ふるこゝに年あり。否君のみにあらず。君が父翁の代より用ひられしなり。數ふれば早五十年の昔、世の中さわがしかりし頃、長門國赤間關のほとりにぞ我は生れ出たる。さて星移り時變りゆくまゝに、浮世の辛酸をも堪へ忍びつゝ、流れくゝて東の京にと出でしは、今より廿年の前なりき。さるを不幸は小さな我身にまつはりて、古道具屋の手におちし後は、某の市、某の店にと引き廻され、果は夜毎をけがれたる塵の上に、さすらひの身となりつ。か

くていついかなる人の手にあがなはれゆくにかと、人しれず思ひわびしを、一夜我店の前に杖をとめて、我をしもあがなひゆき給ひしは、則亡き翁なりき。我のこよなき幸をえたり。身さすらへて數年間、望みに望みし學者の手に拾ひ上られたる其夜の嬉しさ、又何にかは譬へん。翁は朝に夕べにわれをいつくしみ、われに馴れ給ふまゝに、吾もまめやかに吾つとめをつくしつ。されば翁が晩年の著書の我が記憶に存せる、又多かりき。かくて翁失せ給ひし後、翁が遺愛の文墨の具は、をしへ子の君たちに、形見にとてわかたれし中に、我は年若き君にと仕へたりき。あゝ戀しき昔、戀しき翁よ。翁は今やいづこの空にか、詩界のかはりゆくさまをながめますらむよ。さて君も亦よく吾を愛し給へど、君が平常勉め給はざる、我を

用ふるに半日とつゝきたる事なし。我身にとりては勞少なけれど、さりとして亡き翁の、何とかおぼし給はんにはと、心苦しかりき。君は何とかおぼす、我は寂しきなり。今日のごと雨降すさぶ日は、殊に寂しきなり。君が一昨年の春此處に渡り來まし、時、我も亦君が行李の中に入れられきて、すでに三とせの長き月日を重ねつ。かくて今日の我は、君が鏡の浦にあさります朝夕の歌文、又戀しき都へのたよりなど、くさくさの物かきます時に、君が胸の思に相應じてつとむるなりき。とはいへ君が此頃は、あまりに世を捨てたるなり。つらくくみづから求め給ふなり。よしや病ありとも、よしや心のなやみありとも、今すこし身を養ひ、今少し心をかたくし給へ。あなしみじいひすぎたり、免し給へ、筆も心地よげにふしをれるを、あしう

も我のみ一人おきいでて、安く眠りまし、君を驚ろかし申し、哉、わびしき雨の日よ、其まゝにやすませ給へ。

あやしき夢よりさめてあたり見まはせば、いつのまに日は暮れけむ、燈火枕べにあかく、窓をうつ雨の音しきり也。



新らしき年の光は、窓近き文机の上を斜にさし入りて、瓶の白梅匂たゞならず。床の間の鏡もちひ、柱にかゝれる輪飾、さては今つきし都よりのことほぎ文、初摺の是彼などすべてに珍らしきは、今朝の心のうちなりけり。我身此鏡の浦に移り住みて既にいくとせ、既にいくたびかの正月を、此旅宿の此窓の内に迎へたりき。

はかなき運命の神が、いつの世よりか定めおき給ひけむ人生五十年のその半は、すでに昨日しも蹈みをへにけり。さてしも残れる半の、坂あり谷あり嶺あるらむ險しき境を、蹈み行くべき今日ぞ其始めの日と思へば、年頃か弱く生たちし身の、今日

より蹈みゆく道にして、いつの時いづこの坂にてか歩みをそこね、はた如何なる森の下蔭にして、燈火の光を見失ひかすべき。はてしなき世の海の木の葉舟、もまれにもまれんこれよりの春秋、今日よりの我は、そをしも凌ぎゆくべき身とも心ともなり得べしや、いなや覺束なき身のおぼろげに浮ぶ昔のわれ、罪もなく憂もなく病もなく、はた物思もあらざりき。

小學校に初等中等高等などの置かれし頃なり。幼な心の新らしき袴、新らしき帽子に餘念もなく、大きうなりしよといはる、父母のみ聲を後に歩きふりも得意に、元日の朝とく學校にとゆきつ。さて生徒に分たれし密柑いくつかを、いみじき寶もの得たらむやうに、ふところに入れて歸りくるに、恐ろしげなる犬に追ひかけられて、辛くも片へのパン屋に駈けこみつ。そこへ

晝けの料をもとむる店なりしかば、彼犬をかなたに追ひくれし上、猶暫し遊びゐて歸り來し事ありき。今は其店なりし角に交番のいできて、パン屋はいつよりか糸屋とかはりたりしが、其糸屋又五六年前時計屋となりぬ。されど其時計屋の、今又何にか變りけむ。

兄君のいまだ大學に通ひぬまし、頃なり。己れの始めて洋服を着けむの騒ぎに、母君兄君を煩らはしつゝ、父君の名刺をポケットに入れ、辛うじて編靴はきをへ、門を出むとせしに、其日しも寒かりし曉の空は、つひに雪をふらしきつ。あまりのくやしさに、我は一人寒き玄關際に立竦みて、ぐづりぬけるに、折柄車走らせこし某の君が、こは御年玉よと、美しくしき書手本もてき給ひしに、泣顔へとみに晴れつゝ、紙よ筆よとさわぎし

事、あはれかゝる春もありたりき。

福引にて當りたる對紙の帳面を、これに何かき侍らむと母君のもとに持て行きしに、善き物當りしよ、さらば今日よりの御身が一日のうちには、せし事、見し事、きゝし事、嬉しと思ひし事などかきつけよ、それよ父君も賞でさせ給はむと、手づから表紙に、日記と書き記されたり。されど文字らしきは稀にして、大方は似もつかぬ犬猫の顔のみぞ多かりつる。とにもかくにも是ぞわが日記つけし始めなりし。

父君猶榮えまし、年の春。教へ子の心あひたる十二三人集ひて、朝よりの歌がるたに、門に遠き奥二階の父君が書齋は、人々の爲に横領せられつ。下座敷の柱によりかゝりまして、暫し例の讀書にふけりぬ給ひしが、折しも誰人かの讀たりし札の、濁る

まじき歌の文字を、濁りてよみしに、今のは誰そといひく階子のぼりきましつ。人々は何の爲に歌よみ學ぶぞ、かるたは徒らに勝負をのみ競ふ具にあらず、とまめだちていひ諭しますを、何をかのたまふ、今日一日此お城借り申し、からは、師といへどたやすくは來ます席むしろにあらぬを、いでゆかせ給へ、いづこへか今日のゆかせ給へと、年かさの君うち笑ひつゝいふに、いよ／＼我をのけ物にするよと、ゑみまけておりゆきましゝがやがて帽をもとめ給ふ聲聞えぬるに、人々は始めて心安うこそなりたりしか。

父君のおはさずなりぬ。母君はたかくれさせ給ひぬ。今の姉君、いまだ家に來まさりし前、兄君と我と唯二人の新年のありたりき。もとより人少なき家の、兄君は家の事にかゝつらひ給は

ず。われいさゝやかなる事をも、すてゝいへあらぬ性質さかなれば、おのづから主婦のやうに、屠蘇よ雜煮よと獨心づかひして、同じ膳にさし向へば、さすがに兄君のはめ給へるなぞ嬉しくて、永く忘れぬ一つ也けり。

兄君の教へ子にて、年頃ことに親しかりつる友の、年の暮某女學校の寄宿舎より、川崎なる我家に歸り行きしが、病とみに起りて永き眠のまのあたりにせまりたり。兄君見舞にゆきまして、何かほしき物はと訪ひましゝに、林檎のうるはしきと、乳にいろべきコゝアとをといひしときゝて、そを携へて正月三日、新橋停車場にとむかひつ。さて友の枕上に寄り添ひ見るに、紅ふかりし頬の色は、昨日のあとをといめず、瘡せはてし面わは、僅かに十日前に別れし其人とのおぼえず。かの林檎をとうでて

見するに、やがて口に入るべく乞ひぬ。姉なる人小さくむきて、まづ其一つをさし入るゝに、うまし〜といひ、更に一つ二つをたうべて、思はず打笑みし眼のはとり、これや再び得難き最終いはてのゑまひにして、其ゑまひのやがて又苦しびとかはりゆきつ。今は何一つ友が咽に、たやすくは入れ置かれざりしなり。かくて別れ歸りし又の朝といふに、美しくしき神のみ手に導かれゆきたりき。さいつ日いかで梅の花見まほしと姉君にこひしかば、咲初し紅梅の小枝を、枕がみにおきしに、今は枕もたげて見るべくもあらず。氷囊つるすべく天井よりさげし紐に結ひつけてめではやしたりといふ。あはれ其花の馨よ。友が亡き靈をいづこまでか守りゆきけむ。今思ふも悲しきその時の我心のうち、此友との永き別なりき。

年の始め大磯の君を訪ひまつりし事まば〜ありき。そは父君の伊勢にありし頃より、教を乞はれし君にして、我竹柏會員の一面に名のある君なり。背の君いまし、頃は、荒き波に楫とりつゝ、騒がしき世ともいたく戦ひましゝを、かくれさせ給ひし後は、今のなりどころに其儘住みて、今は唯靜かに月日を送りますなりき。四とせ程前の正月なりけむ、かの千疊敷に諸共にゆきぬ。蔓草はひまとふ山の細道の、やゝもすればすべり勝なるを、辛うじて登りつきたりしに、咽喉は涸れにかれ、身のうちひひたすら汗ばみて、風さゆる睦月の空ともおぼえず、供なる人の毛氈しき、破子よりとうでしは何の果物なりけむ。瓶の茶は忽ちにして空しくなりたりき。歸さは更に木立うるはしき高麗山の麓をめぐり、花水橋を渡り、昔の驛路づたひに、平塚の

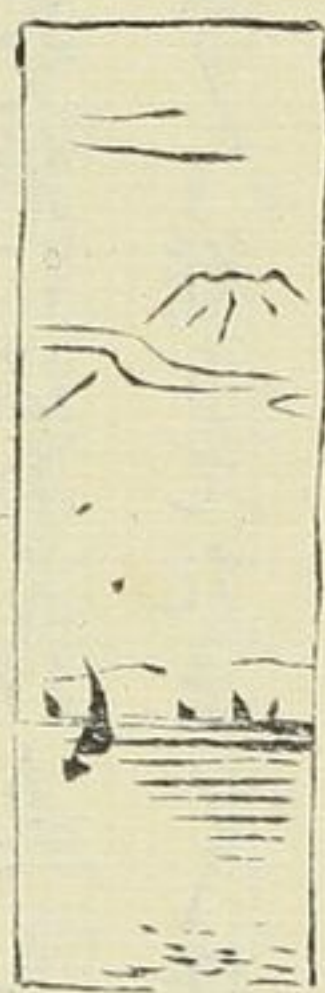
里にもものしたりき。今やかの軒端の梅は咲き出て、廣き池の鏡に影さしそめむ頃、長閑なる年の光を、和田の原遠くうちあふぎつゝ、如何なる思にか筆とり給ふらむ。なつかしきは相摸の山、かの白帆見ゆるあなた。

静浦に冬ごもりせる友の許を訪ひし事ありき。鷺津山の麓なる松原に、馬引く賤の影をなつかしみ、千代の波打よする雀嶋を、保養館の窓より眺めつゝ、埋火さしそへて友と語りし事。又一人のはした女の、もとは沼津藩士の娘なりしがはふれたるなりとて、様々の物語をきゝ、そがよみしといふ歌など直しやりつゝ、夜の更けゆくをも知らざりし事。まかも歸さは雪の中を送られきつ。寂しかりし汽車の窓も、歌思ふ身には中々幸深かりし事。これかれともになつかしさの今も忘れえず。

幼なき甥いできぬ。其年始めての正月は、更に新たなる感をわが上に與へたりき。我伯は父とよばれぬる身となれり。誠にはかなくはづかしき父伯にはありけり。そが上我へとかく都にある事少なう、たまゝ登りてたまゝ逢ひ見るのみなれば、幼なき人の目にもいつも残れるひまなく、はつかに覚えられし頃は、又も別れきぬる、我には限なうわびしうて。

七草過ては用もなき名刺の多くを請ひうけて、ハンケチの空箱に入れ、大事そうに残しゝ、それも昔なりしよ。今は我ならぬ幼なき人たちの、大事そうに入れおくべき名刺のうちに、われのも數へ入れらるべき身となりゆきつゝ、樂しかりし時代は夢と過ぎて、年と共に年の樂しからぬ、年と共に我心のうちの、はかなくなりゆくやうにのみ覺ゆるは如何にぞや。苦痛といふ

念は、そもいつ何によりてか胸にゑりつけられけむ、悲哀といふ感は、何が爲にわが脳髓に堅く刻みつけられけむ。あゝ苦しきかな世、わびしきかな人、如何にしてか今ひと度、罪なき昔に立かへり得べき、あらずいかにしてか、苦といふ聲をのぞき去る事を得べき。



病院の一時間

大きな火鉢のもとに、父の膝を枕として横たはれるは、九つ計の女の子なり。頸より頭へと新らしき繻帯をかけ、目には涙の痕もゑるし。今しも己れ病院の門を入りし時、外科室にて泣く聲のはげしう聞えたりしが、さては此少女にてありけむ。こは我が買ひなじみの古本店の主人と、其娘となり。いかにせしにかと問ふに、娘は問はるゝだけ、更に痛みの増さるやうに涙のみこみつ。否五六日前より、耳の下に腫物いできしが、漸くうみたりしかば、今しも療治を願ひしなるが、誠にいくぢなしにてと、父は娘の肩を撫でやりつゝ答へぬ。かゝるほどに薬局の窓は内よりあきて、二日分の水薬と袋とひいだされたり。そ

を小風呂敷に包みつゝ、娘の手ひきつれて歸りゆく。これとすれちがひに入り來れるは、郡役所に勤むる某の妻君なり。やゝ澄し過ぎたる面わの、一座を見まはして、高き頭ひさげられたり。こゝには猶多くの患者待ちゐて、おのがじし口と手とを働かしむつ。いづこかの道普請を、大聲おげて語れるは、敷臺に腰うちかけし、草鞋ばきの老たる藥取と、これと斜に槓棒据ゑし、同じ年頃の車夫となり。柱を後ろによりかゝりて、黄なる前掛をいぢれるは、南町の茶屋の女中。巻烟草の吸口をほゞきて、館屋がすなるやうに、指の先もて二寸ほどの長さに細く巻き直してふかせるあり。羽織の紐をときては結び、結びては又ときつゝ、時々外の方の往來みやるもあり。天井を仰ぎし目の、額にうつり、さては郡部醫會の掲示にうつれるもあり。

備へられし新聞の、畫のみ見もてゆく人、銘仙の綿入羽織の、^{そり}衿まだ折りなれぬを、絶すくせをつけつゝ、あるおかみさん風の人など、かゝる人々打集ひて、こゝ玄關の八疊へみたされたり。

診察所に入るに、院長の君は折しも聴診器をはづし、患者は膚を押し入るゝ所にて、手織ものらしき綿入に、白メリンスの大幅を大巻にまきつけし、廿才ほどの色黒く肥え太りたる男なり。かゝる人にも猶病のあるにかと、思ひつゝよく見やれば、頭に發泡を張りゐたり。處法かきをへし代診の君の、そを藥局にまはすと共に、彼は此處を出でゆく。

患者録の數冊、くさぶくの瓶、打診器、受水器、スポイトなど置かれしテーブルの上に、一鉢の白菊盛と咲きいでつ。時雨め

く風の、折々ガラス窓をうちて、中庭の芭蕉葉ゆらぎあへるもおもしろきに、こゝより廊下つゞきなる住居の方には、琴の音のゆかしうも聞え來ぬる、うべ今日は日曜なれば、愛子たちのならしむ給ふなめり。

おのれも診察をこひ、さて片への室に入り、体量かけなどしてそこをいでくれば、さきの妻君は早くも長椅子に腰かけぬ、又寢臺の上には彼巻烟草の、足ふみのばして電氣治療にかゝりし所なり。

奥にて語りゆき給へ、此處はやがて終るべければと、院長の君例のねもごろにいひます。されどつゞくに入りくる人の、今日ひとりわき多かれは、又とて暇告げ再び玄關に立戻れるに、片隅の壁にそひて、いたく勞れたるげにうつぶさし男こそ、新

らしく我目にの入りぬれ。顔の色極めて青く、肉も落ち目もとに一種のうれひをふくみたる。金縁の眼鏡の光と、齒の白きとが、それらを一しほ目にたゝしめつ。糸織の二枚重ねに、同じ物に黒八の衿せりのかゝれるを羽織り、指にはルビーらしき二つまではめたり。此人わが外出の折に、屢々出あへる人にて、いつもかゝる服装をなし、今も片へにおける、まやれたる杖にすがり、五歩十歩立休らひては、更におそき歩を運ばせむつ。されどこゝにては今日迄一度も出あはざりしを、さての常に通ひをれるにか、病も重げなるをと、つくづくと見れば見るほど枯野の小草、あしたの霜にもえたふまじき風情の、辛うじて診察所にと赴きつ。けにも今にして又思ひ浮ぶは、此人の上なり。そは今年の夏、海水浴にとて、この北條に來し都なる親しき友の、

同じ日同じ船に乗り合せたる、誠に此人なりき。其日旅宿につくや、友は話上手に語りたりき。靈岸嶋の汽船會社にて、賃錢の事より車夫といひ争ひし事、つゝいて來りし中年増の、殊更らしき丸鬚のあと、つれなる五十ほどの女との話しぶり、身のこなし、いはずして唯者ならずと見し事。さては彼と是と一つになりて乗船せし事。甲板にての有様、室内にての男女が仕打空氣枕とり出し横たはれるに至る迄、こまかに心をくばりつゝ、かくして船中既に、男は銀座通の某時計店に關係をもてる人なる事。打つれし女の、柳橋は何の家のあだものなる事までたしかめられしなりき。かゝる有様にてこの里に來りし二人の、始のほどは某旅館に宿りゐて、海水浴の頃も絶えず見かけたりしが、秋の初めにやありけむ、男はさる下宿屋に移り住み、女は町な

るそのの二階を借りて、そこに若き二人をさへ都より呼び迎へ、新たに御神燈のさげられたり。せばき土地の、かゝる男ありとの誰もやがて知れる物から、東くだりとしてにや、所謂田舎灰殻の間にもてはやされたりとか。かくて猶二人は、たえずそここゝに車列ねて遊び廻れる、常に人の見る所なりき。今日までに至れりし二人の中らひは、互に助け助くべき生涯をも契り置きつゝ、とこしへに絶たざらむとするにか。花を誘ふ夕べの雨唯徒らなる夢の境より、いでえざるのたぐひにか。はかなき人の世に、一度結びしえにしの糸の、ときがたきや實に心のまことなるべく、涙にいでて涙にをはる、それや淀みに光る有情の露一滴、すくひがたくはた得がたかるべきを、これのあだなるうき草の、さる弱さやさしき、眞實ある心もてる女なるにか、

あらず、我のさる事穿索すべき要もあるまじきを、あやなくも思ひの馳せゆきしかなと、一人打はゝゑまれつ。やをら石だたみおりたちて門に出んとすれば、横手よりきかゝりし三人の少女子、むつまじげにいづこへか行かんとするところ、問ひみんか、さきなる琴のぬしを



潮止橋

日暮れ程なき橋際の床屋の鏡、暫し人の影とだえて、下職を相手に親方の將棋させる、置洋燈あかるくして、若き妻の火鉢のもとに針箱いだせる、まろきテーブルの上に、かたばかりの消毒器、ブラシ、雲脂取^{ふけとり}、香水器の据ゑられたる、低き天井の額、棚なる萬年青の一鉢、ガラス戸越しに見ゆ。

其隣の奥ゆき浅き汁粉屋の店には、腰かけし白足袋紺足袋の二人、白金巾の暖簾の下にありて、今や箸とりあげんとす。

それにむかへる八百屋の店先には、小さき釣ランプさがりゐて、賣れ残りの葱胡蘿蔔さびしげに照らされたり、敷居のもとには、柿の皮の見苦しう打ちちらばれる、道ゆく人の此處にて庖丁借

りし名残か。

高く並べる材木小屋の、日暮れては出入もあるまじく、このみ際だちてまめやかなり。月は今小屋の後ろなるぬりごめの、白壁をてらしむつ。

水を越えてかなたの橋際に、燈火の殊に赤う廣されるは、館山郵便局なり。明日の一番船に積込むべき數多の郵便の、今やかの光のもとに寄せられ、いかなる人の手に取扱はるゝならむ。あすの夕べや、思ひの人の熱き目によまるべき涙多き文も、打見つゝほゝゑまるべき文も、かくて一夜は寒き時計の音を枕上にして、かしこの窓のつめたき箱の内にいぬるなりき。善き事知らするたより、悪しき事さかするたより、それよ千種萬別、そをしも一つく見もてゆかんには、浮世の苦しき、險しき、

はた樂しき嬉しき、さていつらき恨めしき。ねたましき數々の悟をや聞くべからむ。あやしともあやしき燈火のもとよと、思ひつゝ眺めやるに、局の後ろの鰻屋の丸窓あらたに火影さし入りつ。續いて若き女のまかも調子輕き笑聲さこゆ。流うるはしきこの川水も、やがて俗の俗なる物の音にやけがされぬらむ。局の前の派出所には、青き火の徒らにきはだつのみ。橋を渡りくる空車の音とゝろくとときこゆ。

風呂歸りの小僧二人づれ、面白げに語りゆくあとに、按摩の笛寒うつゝさゆく。

月影もや、落かたの、思へばけふ舊曆十月七日なりき。南につゝく山々の、近きぞ眞倉山ならむ。橋の上の往來やうく稀にかなたへ一人こなたへ二人、くる人のあとにつゞくや旅の子の

ちからなき我、一陣の夜風はだへに寒し潮止橋のほとり。



船のうち

まめやかなる春雨のうちに、夜いつしか明け渡りて、汽笛と共に大川を出でゆくは、東海丸の一號なり。

特別室の片隅に、マルトンの半外套をまとひ、焦茶色の中折をかぶりて、一人黙しをれるは、今しも解はしけのもと迄、一少女に送られし若者なりき。

わが汽船會社に至れりし折は、時いまだ早かりしを、かの少女は既にありき。我より少し後れて若者は來りぬ。始めより送るべく、はた送らるべく契り置しなるべし。いと親しげに待合所の腰掛に、時久しう何事か語りつゞけるたりき。

女は廿歳程と覚えぬ。銘仙中縞の小袖に、紫繻子の帯、藤色縮

緬の半襟色どり善く、華美ならぬ扮装の、さのみ目にした、ねど、そが着附の上手なると、いてふ返しの意氣に結ひなされしとは、思ふに葭町近く住居する、商人などの娘なるべくや。やうく入りくる人数に、待合所も犇めき渡りて、二人の話も果へとだえたりしが、やがて鳴り響く鈴べるの音につれて、無言の間に別を惜みたりしけはひひ、人の上なれど何となうあはれに覺えて、雨の中を棧橋のほとりに立ちしかの少女の顔の、今も面影にぞ立ちぬる。

百人餘りの乗客の中に唯一人、まかも故ありげなる少女に送られし若者は、今や此室の中なる人々の胸に、さまざまの想像を引きおこさしめつゝありぬべし。

常には人の多かる甲板の上も、雨ふるまゝにいと静かにて、室

の内も乗組のかずの十人を越えず。

疑問の中に圍まれたる男は、廿四五の色白にて、かのコートの紐釦たんをはづして時計を探るまゝに、龜甲形の大島小袖と、鐵御てつお納戸博多の羽織とは見えぬ。持てこし前の荷物は、合札あひふだとせしなるべく、此所には手頃の鞆一つのみ。

それに隣れる三十近き男は、二三の新聞を前におきて、やゝ暑げなる襟巻を更にまさ直しつゝあり。赤銅の近眼鏡をかけ、いさゝか髯をのばしたるが、頬の際だちてこけしは、轉地療養などに赴くにや。

それと斜に座して、折鞆の中より書類らしきを取り出せるは、北條なる汽船取扱所の某なり。館山に歸るといふ三十五六の丸番とは、知れる中と見えて折々言葉を交しつ。

黒の山高をかぶり、二重廻を着し五十ばかりなる、早くも辨當わりごとうでてたうべ始めたるは、遠くより車急がし、人なるべし。室の真中に毛布敷きし三人づれあり。一人は背廣の肥えふとりたる、一人はや、瘦せぎすの頭すこし禿げて、古風の道行を着たるが、裙を端折たるまゝ、すはりをり。こは銘うちてもよき商人。今一人は十八九の自轉車出たち、白無地フランネルの折襟襯衣に、淺黄色の襟飾を結びたる、これやささに見し車の持主なるべし。

我と並びて腰掛けたるは、安房なる郡書記某なり。千葉に物したる歸さとぞ。

是等を今日の役者として、此狭き一室の中に人皆打寛ろぎつゝ、誰よりもなく話の湧きたつ程に、芝浦もいつしか過ぎ、速力

もやう／＼早まりゆく。

那古に行くといふ彼の三人づれは、まづ何事か打合せたりき。役場に赴く事、調印の事、時間のあるまじき事など我耳に入りつ。思ふに年若き男は父の代理となり、他の二人は助手とも云ふべき位置に立ちて、彼地にむかふなるべし。さては隣の君の職掌柄とて、心よするげなるも我にへるくて。

話頭は人々の方にと轉じぬ。かの二重廻も折靴も相應じて盛に語り出しつ。金融のつまりたる事、某は幾箱の穴を明けたりし事、某銀行内に偽造手形の近くありし事、何株は何圓方引下りたる事、羽田稻荷に人々詣づる事、五錢白銅に贗にせの多く生じたる事、某は上野にて金時計をすられたりしが、探偵の方よりかの社會の棟梁へ即刻交渉そこはくのなりて、若干の手數料にて手に戻

りたりし事、さては狂犬の話、汐干狩の事など、打しめりたる外の方に引きかへ、室のうちのいよ／＼賑はしうなりこし頃、ボーイは茶と菓子とを持って來ぬ。茶をすゝり菓子をたうべて、猶語りつづけんとする背廣、巻煙草とり出て燐寸つくる高帽、もてこし菓物に洋刀かくる近眼鏡、人々の様を見るともなく見ぬともなきかの中折など、八人は八人どち、かたみにかはれる趣をあらはすなりけり。

金天狗ヒーロー、さてこのぼりもやらぬ雲井などの、低き天井のうちをわれは顔にゆき通ひぬる、煙草嗜たしなまぬ身にいいと堪へがたう、小さき窓あけぬれど、やがて出づべくもあらねば、折柄の雨やみを、我は一人甲板にと立いでぬ。

遠方の雨をもれて薄墨色に見渡さるゝは、鶴見神奈川あたりの

松並木なるべし。歌など考へつゝ二たび内に入れば、室の中の人皆樂しげなるに、唯一人思ひ煩らふが如く、物思はしげなるは、かの若き人なりき。

郡書記は例の笑ひまじりの物語に、さのみをかしからぬ事柄も榮はえあるやうなり。語れるは房州の地勢より其産物に及び、はては風俗舊跡など、船の安房近うなりゆくまゝに、手馴れたる説明はいよ／＼佳境に入れるやうなり。

とかくして船は金谷に着きぬ。此處にておるゝ人多し。今日のごと静かなる日にも、猶ゑひたるにや、艇にうつるやがて、額押へぬる女あり。花見歸りらしき赤毛布の五六人もあり。背おひたる油紙の包には孫への土産の入れるなるべし。

鋸山に石切るらむ男らよ。いづこの岩陰にか、我此船を見つゝ、

あるらむ。波打よする浮島の老松、去年登りにし富山の頂、三とせ前遊びし高崎の温泉、さていさゝれ貝拾ひし豊岡の瀆もやうく過ぎて、大房岬にかゝりぬ。
 ポーイ入り來りて、人々より切符うけとるに、我も渡しつ。いづも解のおそきは船形なり。那古寺は目の前となりぬ。かの三人も此處に別を告げて出でゆくわとより、我心もちひたりし主人公も立出でぬ。彼はこの六時間の長さを唯一人一言をもまじへずして、今ぞ出でゆくなる。
 雨は又降出ぬ。見るが中に小さく成ぬる解よ。を暗き空を暗き波を眺つ、彼は今何をか思ふ。知らず彼少女の上かあらぬか。

清澄山上の朝

鳥の聲なく人の聲なく天地の間一物の聲なくして、閑靜しづかに壯嚴おごそかにはた晴朗ほからかに、夏淺き山上の夜は明むとす。彼一天四海を轟かし、妙法蓮華經五字の聲を始めて唱へましけむ地、天を衝く老杉の陰に寄て靜みに觀靜みに念おもへば、我心澄み我胸塵の思おもだも浮ばず。われ凡夫殊に嬰弱なまじの性、愁なまじひに一二の文字を知り得て更に身の惱みを加へ、屢筆を折り紙を焼んとせしかど、病餘杖を引て此山に登り此山に宿りし事數回。毎回散亂の思攝とらまり不退轉の勇猛心起りぬ。殊に近時鏡の浦近き磯寺に高德の僧あり。數しばしば其坊を叩き其教を聽き、漾雲をさまり迷霧晴んとして、身の病又薄らぎゆく心地す。今ぞ東そらまさやかの天分明に紅の色みちくと、遠く見下さる、海の上の朝日の光煌き初たり。折しもさと吹き來る首夏の山風我胸にしみ通りて、我身座るに我を忘れぬ。

おぼろ夜

障子ごしの燈火光うすき町はづれを手を引きゆく。寄りそひし肩は同じほどの、四つ五つ年上なるは丸髻にて、ひつかけしの唐棧の半天、八つ口の色ぞ花やかなる。若きは銀杏返しに、くづひきの根掛、眼もとの大人びぬ愛らしさ、八丈の前掛もあえかなり。引く手引かるゝ手、共にうつぶさがちの、道たどくし朧夜を二人がうしろ影。

姉様も知つてか、あそこのお文さんおやこ母子、か細いながらあの店をついての小商なひ、其上げなげなひお文さんのはたらき。店奉公の二年をすませて、今では看板なしに呉服屋が廻す仕事、物もよく數も多く、地道にかせいで、來年は除隊の萬さ

んを待つ身の、私の事をどこからか聞き込んで、常の口ほどにもないきたない心と、呼び込まれてどういふ譯ときかれては、答へは曇る身の恥親の耻、表向にならぬ迄も、ひいては新さんの顔にもかゝはる事、數へるほどの友達にさへ、逃げ隠れして知らせぬやう、暇乞もせず、いつ歸るといふあてもない旅に行くといふも、先の世の約束ごと、自分では立派にあきらめて居るものゝ、あきらめられぬは新さんの事、あのかたくな、荒い父様の氣が、いつかゝもとのやうにお直りなされて、私が上をも哀れと身にしまして下さる折が來やうならば。

彼一步是一歩、たどりゆく、ゆく、ゆく、麦畑菜畑の中、晝は蝴蝶のいでて舞ふらむ、小鳥も枝に歌や誦すらむ鶴が谷を北町へつゝく一筋道、こゝ暫し人家とだえたり。月は知らぬまに不動院の杉

の木立を高くのぼりて。

私には一人なる弟の新二、ふた親に残されて心細さは互の上、此方こちらが思ふ丈うちらでも、良人うちと私とを姉弟なり親なりと頼をにかけてくれ、ば、何事も隔てぬ中の、とりわけてこれは始よりかうくと打だしたお里さんの身の上。千里二千里の北の果まで乗り出して、年に一度かたまくと二度の湊入に、随分とこわい事やら恐ろしい事も少くない仕事の、乗り始めてからもう四年でし。それもこれももの辛抱も、かうといふ樂しびの的あればこそ、世にまはりもの、たやすくいまはつてこぬが黄金の徳を、顔みせる度毎に、少しづつでも積んでゆくしほらしさ。秋の歸りにいどうでももうやめさせて、此處で質儀かたぎな店でもだして貰ひ、新世帯のまゝ事を、手傳はねばならぬ私の役、一日も早

うと待つに甲斐もない今度の手おち。あゝでもないかうでもない一人もがきがかうとて、變らすは皆酒の上。はてはお里さんの身の上をもこれくと聞きつけて、捨て、おけずと及ばすながら相談にも蹈みでたなれど、死んだ母親との中にとういふ約束のあつたか知らず、わしの口から差上んともいはねば、又お貰ひ申すとの立派な挨拶も今迄につひぞ聞かず、もとくと我と我種植ゑて、今日までにしたお里、譬へば煮て喰うたとして子細もなく、あれについてとやかくの御親切は御斷り申すと、常にない憎體口おこに、つまりは良人うちをも怒らして仕舞うやうな譯わけ、無理なつとめの今が今どうともならぬは、いは私ら姉弟だいが力の足らぬ故、もう何もかも忘れて下され、云ひたい事も捨て、下され、あゝ新が顔見る時の、と聲の張も愈ゆるびぬ。

さびしかりし松原も、楨の垣高き家の角に盡きて、こゝのいつか北町のとりつき。小料理屋の敷居口を、呼ばれてはいる小按摩の、羽織なき影うす寒く、空車ひきゆくかんばんの力なきわとに、力なき下駄の音の、別れて一つ續きゆけば、残されしは暫し立ちまもりつ。誰が門口にか折からの新内節、そこにも哀れはこもれるとや。

北條より葉山に移りゆかれし都筑馨六ぬしの許に
君と見し鏡が浦の夏の月

葉山の磯に今か照るらむ

皇孫殿下の供奉に静浦に赴かれし小原頼之ぬしに

日の皇子の遊びますらむ浦づたひ

富士の嶺仰ぎ歌や思ひます

花ぞめごころも

信

綱

法隆寺の塔を霞のひまに眺め、高田にて乗りかふ。西にそばだてる金剛葛城は、力士の立並びたらむ如く、東に横をれる三輪山は、あて人の几帳に寄り添ひたらむさましたり。

葛につきしは夕つ方なり。車坂をのぼり、下淵、檜垣本をすぎ、吉野川を右に見つゝゆく。柳の渡を渡るに、水清く流静かにして、底のさゝれも數へつべし。渡りはつれば六田の里なり。

山かごにのりておりくる少女子が
手にとりもたる花の一枝

長峰をのぼる。

長峰の長さ坂路の苦しさも

忘れてぞ仰ぐいたゞきの花

並木の花蔭にいたるに花は今を盛なり。まづいと嬉しう暫した
いずむ程、やうくくうなりゆきて、花の色も見えずなりぬ。
くらき坂道をたどるく、吉野の里につきて、宿を求めしに、
隣の室に、外國人あまた宿れり。缺舌に語りあふのかしましけ
れど、敷島の和心にさき出るこの花を見むとて、山路こえ來
つる心を思へば、罪も免さるべし。湯あみをへて後、宿の提燈
をかりて、今こし道を下りゆく。山風身にしみ渡りて、そゞろ
さむき夜のさまなり。

九折のぼりくだりてくらき夜の

花の木かげを一人たどりゆく

花のもとを時久しうさまよひて、宿に歸りぬ。ふす程もなく目

さめたり。宿の女、唯一人今しも起いでて、竈の下たきつけむ
とするに、門の戸あけてよといへば、ねむげなる眼まろくなし
て、あやしめるおもゝちなり。やうくわけさせて、まづ下の
千本にいたる。あたりは未だをぐらけれど、千ととの梢、白う
見え初るさま、何にかつたとへいはむ。月は入方の空なり。

まらみゆく有明の月を見つる哉

よしの、山の花かげにして

さきつゝく花の木間の朝月夜

わが世の春の思ひいでにせむ

吉野山千本の花の下かげを

獨まめたる朝ぼらけかな

わが園の一木二木をいく春か

見つゝ、まのびしみよしの、山

かくてのぼりゆくに、坂路麓路わかるゝ所あり。

二かたに道わかれたりとふ蝶の

あとをおひてや花をたづねむ

折曲りたる道をのぼるに、小笹まじりの莖蓮華、朝露を帯びて
さき亂れたり。のぼりはつれば此里の墓地にして、今こし道は、
わはれなる家びとの、袂そぼちつゝまうづる道なりけり。新ら
しき卒都婆も見ゆ。かたへの梢今を盛に匂へり。花を訪はむと
て、かゝる境にいたりぬるも、他生の縁ならずやはと、一首を
たむく。

後の世の夢いばかり安からむ

花の木蔭の奥つきどころ

もとの道を歸りて、竹林院にもす。いにし明治十二年の春、
なき父の伊勢松阪にありしほど、をしへ子長坂綱矩藤村景嘉を
ともなひて、こゝに宿りましゝ事ありき。さるを長坂ぬしまづ
世を去り、父君も藤村ぬしも、おくれ先だち皆なき人になりぬ。
をしみけむ花の命はながくして

をしみし人のなきが悲しさ

庭なる老木の糸櫻は、枝ゆたかにたれて、見る人の心をもつな
ぎとむる梢なり。築山の上には例の山櫻にはあらで、赤みを帯
びたるばたん櫻あり。未だ見し事あらぬ花びらの大ききなり。
かの老木は、世を夢と思ひさとりし世捨人の、靜に大空をあふ
ぎたらむ如く、この若櫻のいさみはやれる丈夫の、朝日をおひ
て軍のにはに出たつが如し。こゝをいでて、喜藏院にいたる。

院主いたく喜ばひつゝ、奥まりたる室に案内す。窓のもとに花さきみち、鶯まばく鳴て、我身塵の世の外にあるらむ如し。松浦弘ぬしの、名ある人々にあたらへ物せし書畫帖をもてきて示す。中に、足代翁の、楠公を詠じませるあり。菊池容齋の、吉野にてと端書せるもあり。我父のもあり。この院は、大峯に詣づる修行者の坊にて、院主は、熊野の奥がけ、三十六先達のうへなどいとはらに語る。心とまるふし少なからず。又こゝかしこをさし示して語らく、維新の前までは、此方の田のくろにも、彼方の山添にも、花いと多かりき。さるを年々に切りて、杉檜をのみむねとし侍るは、口惜き極みに侍らずやといふ。げにも貝原翁のかゝれしものに、既に昔より劣れりといひ、菅笠日記にそをひきて、又劣れりといひ、今は天然すくなうなりゆ

きては、いま百歳の後には、いかにあらむ。

吉野山老木の花の下かげに

杉苗うゝる世にこそありけれ

藏王権現は、殊に此花をしもめでさせ給ふとか。いかにうれたみ見給ふらむ。

心あらむ人うゑつぎて更にまた

吉野を春の山となさなむ

蕨芹など所につけたるあるじまうけいとねもごろなり。何くれと語らひて立出むとするに、院主いはく、ふりはへ訪ひませるを、かゝる山中とて參らせん物もあらず。唯此二くさをと、取出せるを見れば、いと大なるほら貝なり。こはあまた年の山ぶみにとりならして、かう紐もきれぐに、口もそこなはれ侍りつ

れど、今日の紀念に參らせむといふ。今一くさは、庭の花の咲
そめしを、小瓶にさせるなりけり。都には大小の天狗多し。こ
のいとよきたまものなり。小がめなるの、

みよし野の山さくら花折かざし

まつらむ人の家づとにせむ

風なさをひそといひつゝ、河西市松をやとひて出たつ。市松は、
松浦ぬしをも識りて、みやびの道に志あるに似たり。殊にわが
かねて物せむと志させる、大臺が原の案内をいとよくえれば、
道すがらの物語興ふかし。並木の櫻咲亂れ、老木の杉しみさびた
てる下道をのぼりくゞて、行幸の芝のあとに古へをまのび、雲
居の櫻の蔭なる茶店にいこふ。山の片そばにたてる家なれば、
遙に金剛葛城の高嶺をのぞみ、近く高取の城跡、吉野川の流を

見渡し、吉野の町はた、目の下にあり。やまと、いへる國の名
もえなく、あるは連なりあるは打開けたる群山のさまを見むと、
双眼鏡取出て打見やるに、茶店の老女いはく、昔こゝに遠めが
ねを置いて、まれ人の慰めにし侍りしを、高取の城より、かくて
は城のさま一目に見えていかゞなり、といとかしこういまして
給ひき。その城今のかたゝに残り侍らず。さても變り侍る世
など、昔がたりくづしいづ。櫻は竹林院の庭なりしに似て、い
ま少し枝ひろがりたり。花のめでたき物から、かの、こゝにて
も雲井の櫻さきにけりと、ながめさせ給ひしにあらで、具原
翁の芳野圖に、瀧櫻とあるやこゝならむとおぼゆ。水分神社に
詣づ。白木づくりにて神さびたる御社なれど、花見の人こゝ
までは來で、老人一人さびしげに守りをるのみ。鈴屋の翁は、

此御社の申し子とて、數多たび詣でられしかば、翁のかき給へる物などありやと問へば、さるもの知り侍らずと答ふ。御社の傍に、杉の葉、芝などさゝげたる小さき社あり。名をとへば芝神といふ。杉の葉は三輪のたぐひにや。はるか谷を左に見て、坂路をのぼるに、金峰神社あり。お前の櫻、今しも山風にさそはれむとす。

大峰や南無なむたうらい當來の大導師

いまこの花を守らせたまへ

愛善の茶屋にいこふに、夏み川みゆ。故郷なる伊勢の高見山もみゆ。右に折れて四五丁ばかり下れば、かの苔清水なり。岩が根よりわき出るをむすびあぐるに、清くつめたく、心の底にまみとほる心地す。西行菴は山の半腹にありて、山のたゞすまひ

菴のさま、げにも圓位の君のすみ給ふべきところなり。近き頃植ゑたりとおぼしき櫻さきみちて、鶯の谷わたりする聲まばくきこゆ。

まづかなる君の心にかよひけむ

むなしき谷のうぐひすの聲

山びこのよべばこたふる聲ならで

こたふる聲もなきいはり哉

こゝに、上人の像ありしを、今は金勝明神の社務所にをさめありときけば、茶店のあるとにまひて請ひて、人すまぬ社務所の戸ざしたるをわけさせぬ。像は左の膝をたて、右手に數珠をもちませり。裏に、奉納、天明五乙巳春、願主江戸南鍛冶屋町大井八右衛門定恒。細工人同中橋益田慶運とあり。定恒とい

かなるすき人なりけむ。ゆかしうおぼゆ。

足もとまらぬ坂路を下りくして上の千本にいたる。いまだ早けれど、雲をふみてとい、まことにこの様なるべし。山そひをめぐりて、延元の陵に詣づ。小高き所に石の玉垣をめぐらし、白砂子を敷きたる前に、ひれふしをろがみまつる。

松かげの大みさゝぎを仰ぎみれば

泪ぞおつる旅のころもに

み吉野の山の雫のまげければ

あやのみけしや乾かざりけむ

古への大御おもひや晴れざらむ

雲こそかゝれみよし野の山

南ふき北ふきかはる山おろしに

大御こゝろもさわぎましけむ

みよし野のおく山櫻のどかにも

みそなはず日や少なかりけむ

石磴のもとなる寶殿は、むげに新らしき殿づくりにて、丹ぬりのきざはしなど、ふさはしからずおぼゆ。如意輪堂にまうづ。

歸らじとまゐるし、文字は消ぬとも

消る世あらめや君がまごころ

ゆくての谷あひの花、枝をたれて、さながら雪の中をわくるに似たり。こは中の千本なり。吉水院にいたる。後醍醐帝の、まばし宮ゐせさせ給ひし跡とぞ。

いにしへの吉野の宮の跡とへば

松風寒く花ちりみだる

こゝにて市松にわかれむとするに、まばしまたせ給へとて、近
わたりより短冊もとめきて、歌乞ふ。

何をかもまどしといはむ春秋の

花に紅葉にとめる身にして

みよし野を奥山ざと、人いへど

こゝこそ花の都なりけれ

藏王堂にまうで、かの大塔の宮の、今はとてうたげせさせ給ひ
し折を忍びつゝ、吉野の町つゞきを離れ、下の千本にいたる。
かたへなるさずきにのぼりて打見やるに、山際に落むとする夕
日、花やかにかゝやき渡りて、千本の梢に匂ひあひたる、げに
天の下の樂しび、何ものかこれにまかむ。

花の上のこる夕日をかへりみて

たちわかれゆくみ吉野の山

九折を下りて、花の下かげたちもとほるほど、

ひやゝかに山風ふきてよしの山

花のまたまち日にくれむとす

やうくくらくなりゆくに、ちりはじむるも少なからず。

よしの山歸らむそらもなけれども

ちる歎にいたへじとぞ思ふ

(明治三十一年)



妹いも

へのふみ

昌

綱

中一とせをおきての上京に、御かはりなきは伯父様伯母様、どこどなくおとなびなされ候御身のけはひなど、それ思ひ浮べて、樂しかりし廿日の程を、一人繰り返し候歸さの汽船に、孝一は始めて逢ひし姨様の顔を、覺えるが早いかやがてのお別幼心にも慕ひ候てや、まはらぬ舌にをばをばと云ひ續け候に、我知らずほゝゑまれつゝ、海の上も極めて穩やかに、私も清も少しも酔ひ申さず、まづは恙がなく北條浦に歸り着き候。誠や久々にての御目もとに、いろ／＼との御心くばり、改めて御禮申上候。戀しき忍が岡の入相の鐘は、まめれるがうちにも、猶笑ましきふしの籠るがやう存せられ候ひしに、此處なる宿近

き磯寺のは、唯々寂しきふしにのみ、聞きなされ候昨日今日、御察し下され度候。

生れこそ御身と同じ水道の何とやら、以前は随分と誇りも致し候へど、今いかゝる濱邊に身をおきて、早くも五年の星を數へし我身にて候へば、御暇申せしわにては、お元さんを寝かせながら、伯母様と二人して、立派な田舎者になりすませしなど、わる口いうてお出なさるべく、急に氣がひけて參り申候。

伯父様の御話にも、いづれは今年のうちか來春迄には、わが眼にてまかと擇びし上、一身をかためさすとの事、父母いまさぬ後の御身は、親にもまして、厚き御慈愛いづくしみ受けたる御二方様の事なれば、賢き御身の、そこに如才もあるまじく候べけれど、何事も内輪に、この上ともあやまちなどのなきやう、祈り候。

鷹様をば、兄上とも思ひ、萬に心をつけ、今の内にいろいろ教へて御貫ひあるべく、こは姉よりもよく御願して参り候。唯々心にかゝり候は、御身の氣性の、餘りに勝過ぎる候と、今一つは、妙に僻むやうな所が、折々見え申すに候。此のやうな事書き候は、又かと御腹立ちかは知らねど、此世に唯一人の血をわけし姉が、唯一人の妹を思ふ真心よりの事、決してく悪しう御とりなさるまじく、何事も内端に女らしく、かつつまらぬ考など起さず、成べく氣を大きうもち、さりとて萬づおろそかにならぬやう、打返し姉より頼み上候。かくて幸ひに、此姉も姉らしき位置に立ゆき、孝一も大きうなり、御身のもいできて、共に睦じく語らはんの春を、ひたすら祈り待ちる候事に御座候。

小言めきし事は、此度限に御座候。此つぎの便りには、此地の何か面白きお話にても見いでて、ゑるし申すべく、御身よりも折々の様子御きかせ願はしく候。筆は手にするほど、進みゆくもの、由申候へば、悪口にても何にても、思ふまゝ、御書き御遣し待ちあげ候。二人にて寫し候かの寫眞は、指をりて相待申る候。又此夏も、伯父様の御出は申す迄もなく候へど、伯母様にも一度、この海水浴に来て見たきよし、御話のあり候ひしなれば、御身よりもよく御すゝめ相成度、船と申候ても、僅か半日足らずの事に候へば、其頃ともならば、主人御迎にあがると申をり候。

此地を出たち候時は、猶蓄なりし庭櫻の、それいづこと見守るばかり、青葉の影茂りに茂り候て、片への藤棚や、けしきば

み申候。御庭の躑躅も遠かるまじく、さては伯父様の、御晩酌の色と競ひ候はんかと、ほゝゑまれ申し候。別封伯母様に御あげあり度、猶くれぐゝも御禮のほど、宜敷頼入候。例の乱れ書、よしなに御判じよみ願上候、めで度かしこ。姉より。登志子様御もと。



喫烟室

百合の香、マニラの香、かをり、けぶり、電燈の光あかき室に満ちたり。

島田と兒まげの二人が船の出るを惜む汽船會社廣告の繪額、扇形したる京都某ホテルの寫真額。夏のはじめ、火たかぬストオブの上には、百合いけたる花瓶。室のすみぐゝには、小棕櫚、紅おもと、マキノオレ、みどり葉、紅の色、美しくしき鉢どおかれたる。

八時の晚餐終りて、こゝに卓をかこめる英人の老夫婦、夫は室内帽をかぶり、白きレエスのかざりある黒き衣に、眞珠のブロオチせる妻は、手に絹團扇をもちたり。髯そりたる年若き赤き

チキタイの佛人。商人らしき五十あまりの米人、桃色の衣さら／＼しき妻、そが妹らしき白き衣の、黄金色の髪にはえてうるはしく、語る毎に愛敬こぼるゝやうなる。さては北歐の軍人とおぼしきが一人、ことなれる卓の肘掛椅子に。卓をかこめるも、椅子によれるも、いづれも手毎にとれるは、箱根日光などの大形寫眞。沈黙なる英人、快活なる赤きチキタイ、白き衣の少女、おのがじしそを贖ふべく、えりわくる傍にたてる日本人二人。前だれ掛せる若き愛敬者は英語なめらかに。四十あまりの目の光するときは、佛語ふつゝかに。都をどり、富士屋ホテル、浴衣着たる、舞扇かざせる寫眞などを指さしつゝ語る。赤きチキタイは、若きを片へに呼びて、低き聲に何事をかいふ。若きは笑ひつゝ答ふるやうなり。

老たるは風呂敷包をほどきて、鬱金のきれ、小箱の中よりとりいづる品々、卓上には、象牙ぼりの根附、伊萬里焼の皿、観音勢至不動の立像、陶器の小さき面、朱塗の盃、古き新しき錦畫。いづれも、あやしきといふ形容詞より離るべからざるもの。其説明こそおもしろけれ。鑄たるやがて土中に半年を埋めて時代つけし観音像を、勿体らしく手にとりつゝ、こは奈良、かの神鹿のすまへる深林より掘出でし二千年前のもの、こは八百年前、こは北齋、こは歌麿……

耳傾けをるあり。高く笑へるあり。

軍人らしきは、袋より取いでし、新らしき古刀數口をとりて、柄、縁頭、鏢など眺めをり。室内帽の翁も其かたへに。

桃色の衣は、陶器の面の二つを手よりはなたで、夫にさゝやきを

り。ドアはあきぬ。めさむるばかりの藤色の衣、同じ色のヴ井イ
ズ、胸を飾れる光の石幾十、もちたる手提にゑるし、名の、それ
も皆光る石にて鏤ばめたる、其光にもまして美はしき花の面わ。
つゞきて入る男は若く丈高き。隅なるソファに二人居並びて寄
りそひぬ。男は三組の盃を指さして、かれは。老たる日本商人
は、松竹梅の模様あるを示しつゝ、三々九度のよしを物語る。
あつらへしかの振袖は明日や來るべき。あまえたる聲音にいへ
ば、げに、さらば彼の衣着て寫眞うつさん折、御身は小ささを
とれ、われは大きなもちて、その三々九度とやらんをせむ。
少女の面わはさと匂ひて、いひしらぬ笑の波たゝへたり。
百合の香、マニラの香、かをり高き室の内、時辰器は、十時を
つげぬ。

(此一篇のみは東京にいでし時の作)

友への書

御袂を分ち參らせてより、いまだ暫しの程に候ものから、數多
の月日積りたらむやう覺え候も、所がらにやよるべく候。君を
新橋に送りまゐらせし朝は、今日の夕べ、かゝる境より文さし
上んとは夢にも思ひ候はざりしを、弟がいととみの望みにより、
番町の叔父を頼み候て、かの朝より五日目の晝近く此鏡が浦に
まゐり、まかも了子の君の宿りませる家に行李をはこび入れ申
候。

名さへやさしき静浦のさゝれ波は、君が御心の友として、いか
さまなるひゞきをか御胸に懐かせ給ふ。かの打つゞく松原を越
え、里を越え、野を越え水を越え、はた壘^たなはる群山を越えて、

白雲の上に聳えたる富士の大嶽は、無限の神秘をさぐり給ふにたよりよろしかるべく、こゝよりは唯波の末遠くながめやり候のみ。惜み給はずば御便のふし、せめては詩の御題のみにても洩らし給はずや。こゝは七年前の夏、一度父に伴はれし所とて物皆なつかしからざるはなく、参り候てより、日毎を地理の復習に、追はれをり候。中にも幼な心に捨てがたく覚えしは鷹の嶋とて、松多き小島に候。そこなる岩床に、昨日船をよせ候に、辨天堂の片へなる草のまげみに、姫百合の花四つ五つ咲き乱れをり。これやそのかみ見たりし花の、一つ精をうけつぎて、七年の今日しも猶すくよかに咲き出しなるにか。さらば昔の我をや知れる、なつかしの花よと立よりてそと手を觸れ候ひしに、花のもろくも地に落ち候。はかなき最後をかくまのわた

り見候ひしもの哉。おのづから散るべき時の來りむつらんをと、かつの思ひなし候ものから、深き罪つくりしやうにて、たゞならずあはれにおぼえ候まゝ、紙につゝみ持ち歸り候。色はよしあせなむとも、なつかしき島の形見として、一ひらをまづ御わたりにさし上んと巻きこめ候よ。

花ひとり有情なるにか、風ひとり無情なるにか。いづれは運命のなせるわざとおぼえながら、こゝにいとあはれなる花一つを更に見いで候こと、いとも堪へがたく悲しき限とおぼえ候。さるは花の中なる花、友の中なる友と慕ひをり候了子の君が上に、思もよらぬ風は吹きあて候。友は數あり候中にも、我等三人のみは、世の常の友のごと、はかなき終のつげじ、友の友たる道を全うせむ、世にいでん後々まで、樂しびをも苦しびをもわか

ち候はむと誓ひをり候ひしに、昨日の夜しも此君のわはれなる御物語をき、さて其御いたはしさを慰めまつる術を知らず、君まさんにはの心、いよくとゞめ難う候。

去年の夏君と二人こよろぎの磯なる了子の君がなりどころをとぶらひ候ひし折、かの月清きに、隣の庭より庭下駄の音かろらかにいできて、我等とも志たしく言葉まじへし人ありき。そは今思へば正しく一種の悪魔にて候ひき。わはれわれ等は來む年の春を一つ心に待ちわたりしものに候。春風吹きそめて池の鏡も長閑ならん頃、了子の君が楽しき家づくり給はん日の、とく來れとくこよと、ひたすら待渡りぬ候ひき。さるをはしなくも事は破れ申候。わはれ人のかくまで唯見る美しくしき偽の假面に、おのが曇りをおほひぬ候ものか、人の世の樂しかるべき春の裏面

には、かばかり恐ろしき針をふくみ持ち候ものか、曇りもなく塵もなき愛の眞玉を、一たび其手にとりながら、なげ捨て、再び見かへらざるとは。了子の君のみ心のうち、思ひやるだに胸くるしく存せられ候。されど又思ひかへし候へば、了子の君を猶運強き君とよび度候。見給へ、來ん年の春を過ぎての後、事破れたらんには、其不幸はいとゞ筆にもうつしがたかるべく候はんを、かゝる事ども文の上に申上候はいかゞと思ひたゆたひ候ひしかど、きゝ知りては都までつゝみ歸らんの力もなく、思はず筆のすゝみゆき候。

父も母も遠からず茅が崎にうつり申すべく、我等も歸さへやがてそこにと心ぐみをり候まゝ、いかで皆様にて御立より待上候。夕べ早く濱よりかへり候て、やがて虫のいでぬ涼しさひまにと

かきつけ候此文、夕けのため一たび筆ををられ、いつか燈火は窓毎に入り、庭には虫よせの枯木たきそめ候。叔父はよそにて碁を圍みをり、弟は今日スケッチ帖におぼつかなき田家の夏ををさめ入れてもち歸り、さきの程より更に頭ひねりをり候が、いづこへと問さし候て、宜敷と書き添ふべく申出候。かしこ。鏡の浦にて浪子。靜浦にて春子様。



折々草

弓矢鐵砲

今こそ老たれ、まやれてくまやれのめしたる此白濱の吉五郎が若い時、今の御身たちに見せたかりし。酔ていふにあらす、眞實の物語なり。浦賀の波ひと度打荒びて、世の中とみに騒がしう、何ならぬ小船のゆききにさへ、心おかるゝ頃、わが押送り船が江戸よりの歸さ、ある江戸商人より、館山への大きなる積荷を頼まれて、艦聲勇ましよう浦賀の番所に漕ぎつけゝる。勤番の侍たち、例のごと乗組一同の服装より、船の中くまなく查べゆく。まづ目にとまるゝかの積荷の箱。そも何者の委托にて、内には何の入れあるかと、いかめしき問。われは殊更眉をひそ

めて、こは某よりひそかに頼まれし箱、うちには鎗、薙刀、鐵砲、弓矢の武器より、笛、太鼓のたぐひまで入り申せりと答へける。かなたの驚き大方ならず、要こそあらめ、とくく取り出し見すべしと、今更のやうに形を改たむ。かの箱の繩ときをへて、うちより一つく取りいだしたる弓矢鐵砲。されどそは玩具商人より頼まれし玩具の品々。今も目に見ゆるやうなり、馬鹿めと叱りながら笑を含みし侍の顔。

躰量器

月にひと度は、必ず躰量を計りて、日記に記しおきぬ。いさゝかづつにても、其度毎に増し行くは、わが病のうすらぎゆく故と、いと嬉し。そのまたく海邊に給へばなりと、旅宿のあるじの、誇りかに云ふもにくからず。

物賣る聲

青物賣るも、魚うるも、大方は女にて、竹籠に入れ、背に負ひつゝ、町々を賣りあるく。鱒はヨウゴザンスカーイ。蕪はヨウゴザンスカーイの賣聲、朝夕門に聞えぬ時なし。

紅葉の一葉

ふと取り出したる山家集の中に、もみぢの一葉、はさまれるつ。いつの秋の形見にかとわはれに。

城山

春雨止めやかなる夕暮の窓を押しあぐれば、前栽の牡丹五株、若葉ふくよかなれど蕾いまだかたく、綻びそめし海棠の花は、枝もたわゝに露にをれて、うらゝけき朝日の影をや待つめる。井の端の紅き白き桃は、今を盛に、しどみ檀子の花又ひく、咲きたり

宿の主人が近く植ゑかへし猿滑は、沈思黙考、日と共に榮えゆくわが友の春を眺めをるが如し。我は此様々の畫面に心うばはれつゝ、暫し見守れる折柄、庭松をへだてしかなたの一室に、それ達人は大觀すと城山の一曲、病を養ふ海軍士官が、薩摩琵琶の撥音。さとふりまされる雨の音にまじりて、わが胸の底にまみとほるやうなり。

なりごころ

なりどころのうちも極めて物靜かなる月の朧夜、蛙の聲若やかに通ひくる窓のうちに、唐机の大きな据ゑ、美しくしき玉ランプの火かきたてゝ、家刀自へよべの書のあとを讀みつゞけつ。幼子は晝の勞れにとくふしどに入りて、今や愛らしき夢を、春の野の蝴蝶の羽風にや乗せゆくなる。姪なる人のさだめの習字

昔の夏

なしをへつ、茶入れかへもてきて、同じ机にとよる。折しもせとのかたに聲するは、ささのほど迎へに行きしはしためと共に、小さき畑一つへだてし隣のおばの、孫あまたつれて、風呂に入るべく來りしなりき。

見るがうちに美しくしきキャップとなり、見るがうちに靴下の踵をあらはし來る毛糸細工の傍らに、我はかたへの書をとりにて、そを讀みつづけんとすれど、書の上には心とゞまらで、大方は糸のはこびにのみ思の動かされにし。それよ數ふれば十年あまりの昔の夏。紙の上に何くれとかきちらし、思へば幼心の罪もなかりし程かな。その人既に三人の母となりぬ。今も折ふし音づれて、浮世話にまみも交じふれど、昔の夏をば語りいださず、

われも人も。

つゞきもの

赤き青き毒々しき表紙畫の、まだ手垢つかぬ講談本をひらき、第一席より讀み出し、五十あまりの旅商人らしき男、よみ馴れし調子の緩急宜しきを得て、連なる三人は更なり、同じ甲板の乗組二十餘人までも引き入れられて、こゝ横須賀行の田浦丸は、いつか塲末の高座めきて、船のゑひ忘るゝに餘りありしが、その秋の八幡の祭に、九星方位獨案内、算術三千題、宮本武勇傳など並べたる座店の上に、同じ男の陣どれるに出わひぬ。

夜寒

夜寒をわふる時雨の窓に、今宵も聞えくる辻占賣の聲、あぶり出し辻占と呼びゆくが、身にしみて哀なれば、いさゝかあがな

ひつ。一人よりそふ火鉢の上に、暖むればやがて何事とも知らず、待つておいでの六文字。

磯松かけ

磯松かけに身を寄せつゝ、例の空想にふけりをれば、近づきくる女の聲、松のまげみに隠れて姿はみえず。低くやさしげなれど、思ひ入りたるらしき聲音にて、見給へ、何の思ひもなげにかしこに綱すく蟹人らを。

花たば

小川のはとりに一人董摘みぬけるが、學校の歸さなる村の子二人、そこを通りかゝりつ。まばし片へにたてりしが、それを何にまますと一人がとふ。束にしてみむと思ふといふに、年かさなるが、畫の先生よ、畫の先生よといひくゞすぎゆく。空は緑

に晴れて、雲雀の歌此處に彼處に。

夕ぐれ

二とせをついて來し人の、今年の夏は來らず。いづこにか行きし。あるは家のうちにさはる事のいできたるにかなど、ふと思ひうかべたる夕暮を、隣の室には、あす、島遊に物する用意まうけとりづくに、語りあふ聲いと賑はし。

夏の設備まうけ

濱邊にへすでに、海水浴の休み茶屋もとゝのひぬ。氣のながきをもて名高きわが旅宿の主人も、さすがに障子はりかへ、夏ふとん買入などす。かくては都の友の來らんもほどなかるべしと、一年のさびしさ堪へぬしわが心は、とみにいさみ立ちぬ。

秋くれがた

湯に入れよ湯に入れよと呼ぶ宿の妻の聲は、糸車のとゞまると共に聞ゆ。うたゝねをやさまされたる、いつになく静かなりし女中部屋のうち、とみに賑ひたつ。昨日今日の旅宿の寂しさ。今宵は僅かに二人の泊客にすぎず。例のうるさしと覺ゆる飲客のみきやくさへ絶えてなし。静かなるは、書よむ身にこよなけれど、物も斯く極みに至りては、なかゞ騒がしさの望まれて、目へさえにさえつ。外の方は車の響もなく、人の足音もせず、唯秋暮がたの蟲の聲、いや細りに細りたるが遠く近きこゆる、心細さ限りなし。幼子は何におびえけん、高く泣き出しが、それもやがて静まりて、こたびは此二階廊下を歩みくる音のする、家主人の提灯もちて戸締を見廻れるなりき。折しも帳場の時計はいとたゆげに、十一時をつけ渡りぬ。

松露ごり

都へ送るべき文を出し、かへさ、宿の子らの濱の方へ走り行くに逢ひぬ。此處かして尋ねしを、こゝにゐ給ひしか。今より公園の松林に、松露とりに行くを、共に來ませと誘ふ。打連れ行くに、昨夜碇おろし、橋立艦の帆柱、ゆく手の松の上にかゝれり。松露とり終へなば、八幡神社へ詣でんと一人が言ふ。否それよりは船おろして、軍艦の方にこぎゆかんといふは、未來の水兵と人々が呼びなせる童なり。

畑の中道

獵なきをかこちつゝ、友と共に畑の中道を歸らんとするに、うしろより呼ぶ聲す。誰にかと見れば、常に行きて遊ぶ家の子なり。今薩摩芋を掘りかけし所なれば、一つ二つ持ちゆき給はず

やといふ。さらば貰ひ歸らんと、はらひもやらぬ土を其まゝ、網袋に入れぬ。獲物には逢ひで、思はぬ獵をなしてけりと、友は笑ひてやまず。

槇の木かけ

三つ四つかさねし屠蘇に、やう／＼頭おもうなりぬ。家主人は既に、年頭にいでゆきてあらず。日影うら／＼かなる南の庭におりたてば、立並びたる老木の梅、ところ／＼咲さいでつゝ、洗ひ清めし飛石の上には、福壽草一鉢、枝ぶりよき松二鉢あり。垣をへだてしかなたは、遠き村々につゞきたる田野にて、そ横ぎれる一筋の道は、東浦に行くべき道。麥のそれと見渡さるゝ迄、鈴菜は景色ばかり萌えたるに、雲雀の聲はまづこそ待たれぬれ。母屋を右に表の方へと出でゆけば、ゆほびかなる門内

の槇の木のもとに、此家の幼なき愛子三人、早美くしう着よそひて、羽根つきかはしつゝあり。我をも入れ給へといふに、お屠蘇に酔ひてよと、末なる子は笑ふ。大きな人は仲間にできずと、中なるは答ふ。上なるは羽子板の手をとめて、二人の妹に何事かさゝやくとみえしが、やがてわが方に寄りきて、お仲間に入れ申すべけれど、其かはりに御願ありといふ。何事にかと問へば、かしこにとまりし羽根をとりてよと、かの槇の梢高さを指さす。この木は、男二人の手にも、まはしかぬるほどの大木なり。誰がさる所にやりしと聞くに、今少し前、伯父君の家なる三郎君が、御年始にと來まし、時、よくまはる羽根よと、三人してつきむたるを取りて、かしこにあげて、歸り行きしなり、取りてもらはんも、人皆留守にてと、まめだちて語

る。羽根はまだ多くあれど、あのやうにつきよきいなかりしと、二人の妹は今更のやうに見あぐ。やくなき事をいひいでてと思へど、其詞のあまりに優しければ、彼方より梯子と竹棹とをもてきて、袴の股立高くとり、辛うじてかの羽根をゆり落しつゝ、梯子をおりんとする折しも、車の音とゞまりて、來合しゝは、フロックコートフロックコートの扮装に、やゝ櫻色おびたる家あるじの君なりき。

鷹の嶋

釣りえし魚をいくつと數へて、いまだ足らず顔さなに篤もてる友。拾ひ集めし貝を分ちをる幼子。島を一めぐりして、勞れたりとかこの人。辨天堂にて、大きな蛇を見たりと、猶色あしき某の妻君などを尋ね集へて、松蔭より船に乗る。俊寛すんかんのなきや、

人数よみ給へと人々いふ。今日は旅居のつれづれに、我らのおこし、鏡友會々員の鳥遊せしなりき。入方の日影富士の嶺の方におちんとする頃、嶋をはなる、一艘の大船は、四十餘人の一むれを乗せて、三人の船子舵を取りぬ。風は南より吹き來りて、舳にたてたる鏡友會のえるしの旗を送り顔なり。

誰がすさび

北條より汐見の臥龍松に赴く道、柏崎も過ぎて宮城笠名のあたりなりしか、とある松蔭の掛茶屋の障子に、酒肴一寸ひと口、と書いてありし、文字もみにくからず、誰のすさびならむと目にとまりて。

暖簾の名

千倉を経て七浦村に至りし時、芝口屋、金杉屋との暖簾、まが

も軒を並べたる、いとをかしう。

海士のさへづり

商家の符牒に、アキナイシヤワセ吉といふがあり。此濱邊の肴賣が用ふるをきくに、ソク、ブリ、キリ、ダリ、ガレン、ロン、サイナン、バンドウ、キワ、なりとか。

くちぐせ

酒のまはると共に、蓋しくと、何事にも此副詞を用ひし知人ありき。此人今は官途に仕へて他郷に住へり。蓋し、今も此口ぐせいえざるべし。

正宗

ペエバアは正宗なれど、田舎にてはとかくに詰替の多かりとて、こゝなる別荘に物する毎、必ず飲料を携へくる人あり。ある時

解船はしけのもとまで迎へに出し茶店の女に、それを渡し、が、女あやまちて舟べりに打あて、いくつかの瓶むなしくなりつ。これに大方ならず懲りたりけむ、それより後は、別荘の門に入る迄我手より放たず。

ゐなか

うす寒きあしたなり。葱小蕪など籠に入れ背負ひこし六十路餘りの女、旅宿の勝手口に入り來て、昨日買ひもらひし大根の代、家に歸りてよくみしに、一錢多かりしと穴錢押並べて歸りゆきぬ。田舎なればこそ。

引しほ時

東海丸の着く頃を、濱邊におりたちみる。今日は大潮とて、殊に引汐時の、はしけ船の渚をへだたる事いと遠し。今までは大

様にかまへし男も、そこよりは船子の背に助けられくる。女はよし。男も和服着たるのさのみならず。洋服の八字髻眼鏡かけたるなどが負はれくる。殊にいとはしくをかしかりしは、サーベル姿いかめしき查公の、さやさやと音たて、こなたにおはれつきたるなりき。

梨畑

安房産物の一つなる山本の梨畑は、北條より遠からず。小高き岡のこゝかしこに、數軒の畑主、かたみに番小屋をまつらひつ。梨の種類はいと多く、いかに好む人健やかなる人も、そを一つづつ味ひゆかん事は、なしがたしとぞ。わが聞きえたるは。太白、幸藏、白玉、淡雪、平子、大關、巾着たゝき、新淡雪、小雪、早赤、金龍、赤龍、少女、中屋、江戸屋、金平、早稻松、

長十郎。猶ありしかどさのみへとて。

駒づくし

近く旅宿に來し下婢の名を、駒とよべり。其家は那古觀音の山下なり。きけば、はらからの名、將棋の駒づくしにて、兄に金一、銀次郎、姉にお角、お桂、弟に香吉。あまりに眞面目ならぬ名づけさま、落語めきたれど、まことの事なれば。

旅宿の主人

かの盛親僧都に、いとよく似かよひたりと覺ゆるは、わが宿れる旅宿木村屋の主人なりけり。芋頭をこそたうべね、よろづ自由に、たやすく人に従ふ事なく、なりはひの上にもみだりにむさぼらず、己が朝いして、客人にまで食事のおくるゝを、何とも思ひたらず。そが爲に汽船の時をたがへて、空しく乗りおく

るゝ人あれど、自らなせる過ちと思はぬなど、知らぬ方より見んには、いと愚かし。かゝる事にて家の榮ゆべきやと思はるれど、一度其まめ心を知りたる人々は、年毎に訪來るなり。これはた徳のいたれるにや。

白濱に遊びて歸りこしに、机上に、久保猪之吉ぬしの名刺あり。裏に、『さゝら浪よする渚に君として貝拾ひつゝ、歌思はゞや』とあり。家にあらざりし事のいとも残り惜うて、直ちに豊岡の里なるぬしのもとに、

豊岡の濱への道のさゞれ貝

一つくゝに歌となるらむ

日曜の朝

ねいさんまだなの。

小春日和の朝日が、うららかに照らす椽側を駈け来て、障子の内をのぞきながら聲をかけたのは、九つになる妹の文子。

お待遠でした、もうすぐなの。

品の善い島田に結うて、どことなく氣高い姉は、返事をしながら、帯をきゆつと音のするまで、力を入れてしめると、御氣入の召使ほうしろに廻つて、お太鼓に結んでゐる。

文さんは紫のリボンを掛け、友禪の小袖に、海老茶袴を短かめにつけ、これは少しおよすけて見える黒い長い靴下をはき、口をきく度に見える上齒の一枚の少しかけたのが、言ふに言はれぬ

愛らしさを加へて、憎げのない眼にゑみをふくみつゝ、姉の仕度を見てゐる。

まわ大層立派に出来ましたね。

姉は自分のおつくりにかまけて忘れたのか、おくればせに譽めたてた。

みんな母様がして下さつたの。母様は今御辨當をこしらへていらつしやるの。

突然、隣の間唐机に置いてある時計が八時を報じた。

あ……どうしてお遅いのでせう。

文さんは、いきなり大きな庭下駄を穿いて、庭におりたつた。其歩きかたのいかにも苦しそうなを見て、姉は笑つてゐる。庭のまん中の猿滑の大木、葉もそろそろ散りかゝつて、寂しげ

に見える。飛石の上には、菊の鉢植が目さむるばかり咲きそろつてゐると、引かへて垣のもと芭蕉葉は、やつれはてた病人の様、さも力なさそうに破れかけてゐる。

文さんいつか木陰をぬけて、まつさきの小松の植ゑ並べてゐる所にて、人通りのする田圃の中道をぢつと見つめこんだ。

空には一點のさはるものもなく、眼も遙々と打續いた田圃の此處彼處には、もう早くから村の人が来て、せつ／＼と働いてゐる。年寄も見える、折角の日曜を手傳はされた子供もゐる。赤い襷に淺黄の手甲した娘たちもまじつてゐる。

稲の残りを蒔る人、蒔り上たのを束にする人、それをはこんで居る人、車に積む人、様々である。又こちらの近い藁葺の家の前では、稲扱にかけてゐる女房も見える。軒さきには晝にある

やうに、柿の實が赤くみのつてゐる。

田川をへだてた畑に、綿の實の白く丸々と下つてゐるのや、畑境に蒔いた豌豆の、緑に萌え初たのや、それから少し右手の蕎麥の花やら、里芋やら、空豆やら、いろ／＼の畑つ物は、春にもおとらぬ日光を、心持よさそうに受けてゐる。其畑の小べりには、野菊も咲いてゐる。よく似た嫩菜もある。牛の通つてゆく堰の傍の一本公孫樹の木陰に、村の子が四五人遊んでゐる。

鎮守様の杉の森、一月前の祭には、森の下一杯にいろ／＼の店が並んで、神樂も供へられたし、村相撲もあつた。其杉の森も今は稲村の陳列場である。

鶯も鳴いてゐる、鶯の聲も遠く近くきこえる、名も知らぬ小鳥は、自分々々の倶楽部をたて、美しい音楽を奏しあつてゐる。

一やすみしてゐた乳屋の鶏までが、だまつては居られまいと、再びうたひ出した。藪の蔭の煙草を刻む水車の音も、競ふやうに聞えてくる。

自然界の美、宇宙の福音、あゝ秋の神様は、今此あたりに遊んでゐらるゝであらう。

文さんは、是等の景色には更に心をうつさず、一心に田圃の中道を見つめてゐたが、待つて居た影の見たので、にこゝと椽側に戻つて來た。

姉様は、此時既に用意ができ上つて、來る人を待つばかりである。

二人が寵愛の眼白の籠は、いつの間にか椽におろされて、朝食につきつゝあつた。

秋の雨夜

此秋新たにきゝ覺えにし鐘たゝき蟲の、今宵のさびしき雨をさへ添へて、窓のうちいよゝまめやかなり。廣き旅の數ある室も、客人あらざれば、ともし火の影あらず。我室のみをよき友どち顔に、力よわりたる火取虫の、これいさゝかのゑらべをも持たで、うるさくも立ちまふ哉。げにも寂しき秋の夜の、まして賑はゝしかりし夏の盛は、夢と過にし旅の窓に、又も一人とり残されし身よ。心なくも降りまざる雨の音、まめくゝと窓をうつ響よ。あはれ母君の御いたづきとみにおもりて、つらく悲しき永久の御別せしもかゝる夜、かゝる雨の夜ふけにて有たりき。思ひいづるにも、更に悲しさ堪がたく、手にとりぬし筆を打お

きて燈火打守れば、油壺の油半消えゆきつ。わが爲徒らに消え
 ゆくらむ油よ。わが爲日々命ちまらむ筆の命毛よ。辛うじ
 てさへへられつゝあるわが玉の緒はた、かくてやうく絶たれ
 ゆくにのあらざるか。我身もし此處に病あつしうなりて、再び
 なつかしき都に歸りえず、人々を迎ふるやうの事いできたらむ
 にいかに。その迎さへまちえず、其まゝ一人こゝにねぶりた
 らむにいかに。最後の水は、誰が手にか結び入れらるべき。
 もし然あらむ時、折柄はげしき雨風吹きつゝきなどして、船の
 ゆきゝは絶え、爲に四十餘里の陸路を、夜ををかして、迎の人
 の至りつくべきほど、はかなき我身のむくろは、更にはかなく
 つめたき床の上にありて、真心より通夜すべき人もなく、ほの
 ぐらき燈火のもと、かたばかりなる一片の香の烟のもとにやあ

るべき。さての餘りに幸なく餘りにはかなきわが最後にあらず
 や。幼くより薬をはなたざりし身は、病むべきが爲に此世に生
 れいでし心地す。此海そひに病を養ふ事、すでにいく年。いく
 度か根をたゝんとしては、更に萌えいづる此まうねき病の根を
 いかにせむ。あゝ、我身いかなればかばかりか弱き。此年頃を
 何一つまいでし業、まとげし事なく、徒らに年をのみ積みて、
 かくて老いゆかんとするにか。否、老ゆく迄の命ありやなしや。
 さまざま思ひつゞくる程、暫しとだえたりし雨の音、又もすさ
 まじうきこゆ。かの虫の音はた、はかなき身を黄泉路にと誘ひ
 ゆくらむやうなり。

秋雨のふる夜寂しき旅の窓に隣のちこのしはぶきの聲

我世の友

ゆくりなく耳に入りたる友の上

世の誣言しひことにあれよとぞ思ふ

水車めぐるわらやの軒さきに

つられて寒き烏瓜かな

病人やみひとが髪くしけづる日あたりの

南の軒に桃のはな咲く

夜船いづる濱の闇夜のひと騒ぎ

ふけ静りて雨は降り來ぬ

古年の村の相撲のかけ額に

残るもはかな亡き友の名の

よべつきしおうな 姫が聲よ朝念佛ねぶつ

朝雨さびし旅籠やの窓

ところせき里の二月こゝも亦

二人をうたふ憂世なりけり

鍬の音は聞えずなりて明日をまつ

おくつき寒し冬の夜の月

新乳にみちをうつはにわくる明方の

垣根うつくしおしろいの花

見し夢を繰り返すまに半より

消えて果敢なき明方の床

新らしく寺に來ませる老僧の

話さかむと村人つどふ

せめてわが今はのきはに逢ひ見んの

願ひとつは君もいなまじ

縫物を片へによせて伯母君を

迎ふる窓にかなりやのなく

朝鏡鬢ときつくるうたひ女の

かたへにゑめる朝がほの花

花賣に出で行くをちを呼びとめて

友への文を頼むあさかな

炭焼のをちが一つ屋おとづれて

わけて貰ひし福壽草の鉢

つくくくと徒然わふる旅の窓に

君がたまひし白菊の花

船つくる川べの老翁をぢを朝とへば

鑿のみの音せず一人子のやむ

若くして別れし友の若き文字

残るもかなしやめる吾手に

烟草さざむ田中のいほの夜仕事の

ともし火細し冬の夜の月

都への文を出すと立いでし

月夜じふや十夜のかね冴えわたる

いさゝかの庇境の争に

親ものいはす子等相思ふ

此冬を如何にと聞し友の上

我身につけて思ひやらるゝ

うつし世の我世の限泣かんとも

今は二度あひがたき君

そのかみの夢は思はじ思ふとも

とりかへし得む我身ならねば

佐保姫の神のわらはや遊びけむ

有明のにはに花の散りたる

はかなしや斯くて消えむの枕がみ

わがため歎く人よ幾人いくたり

舘山を那古へと通ふ赤馬車の

喇叭さびしき夕時雨かな

時雨ふる旅ゐの窓の燈火に

又ひらき見る晝の玉章

櫳の花水にこぼれて池殿の

軒端まづけき春雨の音

夜に入りて宿につきたる旅人の

道いかなりし冬の夜の雨

明らかに罪をあかしてゆるされて

君がかひなに消えなましかば

心や、安きにかへる夕べかな

心がかりの文をいだして

往かひもいつといなしに絶はて、

菊は咲たり菊は枯れにけり

人の手をたすけておる、萱山の

かや穂さや、秋の風吹く

とやかくの人の噂の誠もし

誠なりせば吾いかにせむ

中々にすぎ行く雲のすぎ行きて

跡うるはしき秋の夜の月

酒みせの門によせたる荷車の

こもの上白く雪ふりつもる

熱さめて思へば更に胸痛し

怪しまるべき事やいひしと

彼の折に云ひおくれたる一言や

疑はれ行く初めなりけむ

長からぬ我世の友と摘みためし

言の葉草よせめて枯れずあれ

文 反 古

其 一

一萬二千哩の海路、六十日の船の上、恙なく御着の由、船中の作數十首御送り下され、繰返し拜見致候。殊に終なる、『語るべき功もなくて果てむ身は言の葉だにも残れとぞ思ふ』の一首は、身につみて感深く覺え候。此數年を此浦わに埋もれつゝ、いつ又世に出んの望さへなくて、此まゝに朽ちはてん身は、短き言の葉をだにと思ふのみに御座候。さはれ君の身は我とは違ひて、前途希望の光いと明らなる身なり。君が竹柏園集に寄せられし艦中雜詠は、よしや今の世にみん人あらずとも、數十年もしくは數百年の後、かの日清戦役の折、軍艦中に服務せし一兵曹の

作として、永く世に傳はるべし。職務は高からずとも、高き思は必ず世に残り候はむ。海をもて垣とし、海をもてめぐらされし海の國ながら、古へより眞の海の歌なく、海の詩人なし。海の歌の多くは、皆浦磯の海邊の作のみ。海上にありて海を歌ひし作は、紀記萬葉廿一代集中いくばくもあらず。忠實なる一水兵として、理想高き海の詩人としての君がこたびの渡英は、君の詩囊に一層の重さを加ふべしと信じ候。猶滯英中の御作、便ごとに御洩し被下度、御歸朝の後、新らしき軍艦この館山灣に入り候時もあらば、拜顔珍らしき物語承度樂しみ居候。早々。ニウカツスルにて吉田又七君。昌綱。

其二

一昨日の朝も其前の朝も、鏡の浦わにいで候て、海をじに見ゆ

る富士の高嶺振さけ見つゝ、今もかも登りますらむと思ひ居候しに、二葉の御葉書只今相届き、障なく登山ををへ給ひしとの事、限なき喜びに候。山中やまなかの湖畔の畫端書は、篠崎君の御すさびの由、山の姿水のたゞすまひ、岸べに草はむ馬のゑがかれたるなど、見るが如思はれ候。富士頂上の印ふりはへ押させ給ひし葉書めづらしう存候。劍が峯の頂にて、三人ともに、かの萬葉の長歌うたひあげ給ひしとか。御仲間入りもかなはず、唯々羨しくのみ存上候。これより山麓の八湖めぐり御思ひ立の由、歌袋につみ入れ給はむ言の葉草、少しも多からんことを遙に祈り居候。小生のせめて空のどかなる折、鹿野山あたりになにのぼりみたく、幸ひ同宿の友人と語らひ居候。上小澤篠崎二君にもよろしく御傳へ給はり度候。早々。甲斐吉田にて兄君御もと。

其 三

あさつては誕生日で、どんな御祝がありますか。伯父さんも行つて見たく思ひます。幼稚園にも行くやうになり、大層大人しくゑらくなつたと、お母さんからの御手紙で知つて居ます。兄さんと二人で、よく勉強せねばいけません。綱子も弘子も中よく遊んで居ますか。皆に御ほうびに、伯父さんが此間から書いておいた繪を送つてあげます。軍艦は兄さんに、汽車と桃太郎は文ちゃんに、綱子と弘子には、あねさまをわけてやつて下さい。小さい箱にはいつた美しい貝は、この濱で拾つたもの。山本の梨の籠と一所に、明後日のお祝にあげます。文綱どのへ。房州の伯父より。

安房の國

なつかしき安房の國よ。わが身この國にうつり住みて、山に遊び海にあさる事すでに數年。かよわき身の、幸に今日までの命たもち得しも、この國に移り住みしによりてなれば、この國はわが第二の故郷にして、まかもわが身の恩人なり。

なつかしき安房の國よ。神の工の誤ちて人の世に落しやしけむとおぼゆる鋸山あり。高き聖の深き悟ひらきし清澄山あり。著作堂の主人のいみじき筆づかひに、其名高くなりし富山あり。行末千里の海をも越えむ幾百の若駒常に打むる、嶺岡の牧場あり。妙の浦の奇觀、日本寺の偉觀あり。鏡の浦は、大武岬洲崎たいぶさきすのさき二つの岬の中に包まれて、其形其名にそむかず。波おだやかな

る事はた鏡の如く、まかも那古船形の觀音、八幡の松原は岸に有て景色をそへ、鷹の嶋沖の島二つの島は沖にありていひしらぬ趣をそへたり。東海岸ひがしを小湊にゆく道には、野嶋が崎の燈臺あり。古への名馬の蹄のあと猶のこれる大夫崎あり。石橋山の戰に敗れし頼朝のまばし遁れ住みし波太島なふとじまあり。前原天津あまつの景勝あり。靜に千歳の夢を結べる臥龍松あり。

なつかしき安房の國よ。此國の勝れたる自然は、高僧日蓮上人を生みたり。名匠菱川師宣を生みたり。景行紀には、帝、浮島に行幸まして白蛤を得まし、事をのせ、萬葉集には、丸子連大藏、丈部與麿の歌を掲げ、續後紀には伴直家主、孝の心深くて旌賞を蒙りし事をゑるせり。下りては北條里見氏の争、歴史を飾りし事又少なからず。

なつかしき安房の國よ。かあめのとみのみことの天富命、阿波の齋部を分ち率ゐきまして、麻穀を植まし、にいとよくおひたりとのたまひけむ上つ代より、此國の地味ゆたかにして、五つのたなつ物よくみのり、海の利はた多し。國富み、人の心すなほにのびらかにして、風俗はたあしからず。南の方都門を去る事幾ばくの地ならずして、都門の風塵にそまらず。あはれ我大君一度行幸せさせ給ひて、かの驪山の宮の朱樓紫殿三四重ならずとも、民の烟海の幸さいちみそなはさむ離宮とつみやどころ設けさせ給はゞと思ふ境少なからず。

なつかしき安房の國よ。天平寶字の昔、巨勢廣足、此國の守に任せられし此かた、義家の曾孫義俊はじめて守護職となりし此かた、國守は幾度かかはり、守護職は幾度か改まりぬ。安西、神餘、丸、東條の四氏、各わが城を構へてこの國に割據し、里

見氏興りてそを合し、かど、それはた幾ばくもなくして亡びぬ。人の世の榮枯盛衰いとも短くいとものはかなくして、歴史は常に、人の名、城の名を改めゆけど、自然のとこしへに變る事なく、たゞ海添のこゝかして、海神わたつみのあらびに崩れかはりし處聊かあるのみ。日蓮上人の東の海遠くほがらくのぼる朝日ながめさせ給ひけむ折も、道興准后の此國を廻りて、こゝかして吟詠せられけむ時も、里見氏の戦ありけむ日も、うるはしき此國の自然は、昔ながらのうるはしさなりしなるべし。

あはれなつかしき安房の國よ。わが生れしは伊勢の國、わかおひたちしは東の京なれど、わが墳墓の地は此國と定めむ。かよわき身の此國の自然に馴れむつびしこと既に數年。いまいく年月をか、うるはしくたのしき此國の自然につゝまれつゝ過しう

べき。あはれなつかしき哉わが安房の國。

*

*

*

*

*

*

幼くよりかわかりし身を、父君のいさほしがり給ひて、書よまんよりも先づ其身をいたはれこのたまひしかば、御教うけし事も多からぬ間に、父君失せさせ給ひ、殊に我身をあはれ給ひし母君も、三年をこゝぬ程に世を去り給ひぬ。わが身はた病を得て、好めるまゝに學びそめし繪のわざをも半にして打すて、この鏡の浦に移り住みしより、折々に物せし歌文の草稿を、兄君の許に送り置きしに、こたび世に出してむと、ふりはへ校正を送られたりき。よみ見るに、われながらいと拙くみにくきを、まして人の見んにかどあらむ。もし幸に我身いま幾年かの齡をたもたんには、父君の御名汚さざらんほどのもの出さまほしうと思ふも、あいなきかれごさなるべくや。

昌綱識

昌綱の文、わが歌、猶數多ありしかど、食膳方丈も美味佳肴ならむにはよかるべけれど、蔬菜野羹は少きこそめて、後半百三十余頁の原稿を省きとりつ。そは第二の磯馴松を物せん折に掲ぐべくなむ。

竹柏生識

竹柏園編纂書目

日本歌學全書	十二卷
續日本歌學全書	十二卷
增補歌の葉	一卷
おもひぐさ	一卷
竹柏園歌話	一卷
竹柏園集第一編	一卷
竹柏園集第二編	一卷

磯 馴 松 終

美文

附 奧 松 馴 磯

明治三十六年二月十日印刷
明治三十六年二月十三日發行

定價金貳拾八錢

不許 複製

著 者 佐々木信綱

著 者 印 東 昌 網

發行者 大橋新太郎

印刷者 水谷景長

印刷所 博進社工場

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

佐々木信綱先生編

第一編 第二編 竹柏園集

每編正價金卅五錢・郵稅六錢 洋裝袖珍金文字入美本

心の強き人、弱き人、美しくしき人、清き人、さまざまの人相あつまりて、竹柏會は組たてられぬ。會員の中には、専ら詩神に生涯を捧ぐるあり。詩家には縁遠き病理學を専門とせるあり。畫工あり。ピアノ弾く人あり。看護婦あり。夫人令嬢あり。僧侶あり。林檎畑の主人あり。山水の景勝をめでて旅に暮せるあり。印幡沼のほとりに且耕へし且歌ふ農夫ありて、月毎の研究會、春毎の大會に、相つゞひ相語り、歌文を研究する事すでに數年。其會員の短歌、新体詩、日記、紀行文、スケッチ類をあつめ、茲に第二編迄上梓す素より會員相互に研究せむとする爲の一小冊子なり。雖も、あるは心なやめる人の友となり、あるはさびしき旅窓の好同伴たるべきなり。

發兌元 東京本町 博文館

岸上質軒君編

明治二百五十家絕句

正價六十錢 郵稅八錢
明治の二百五十家、詩たる總て二千五百首、花の艶、月の清、山の高、水の永、雪の潔、雨の濃、風の輕、雲の澹、賦せられざるなく備はらざる所なし誠に是れ文壇の偉觀、一代の盛事なりとす、

中判美本

文藝小品

内田不知庵君著 袖珍美本
賣價二十五錢 郵稅十錢
作者獨得の犀利なる筆鋒を以て機警なる批評精到なる叙事文其他の雜著積んで堆を成すに至る本書は其精英を抜きたるものなり、清瑩明麗、一讀寢食を忘るゝの快味あるべし。

發兌元 博文館

全庫文雅風 著君升金井長

第壹編 都々逸の栞

天文地理鳥獸虫魚等各部に別ち古今の秀吟を添へ季題と雅題とを親切に説き巻頭には初心の爲めに作法を掲載し巻末には雅題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして管に雅俳家のみの重寶にはあらざるべし

●正價金貳拾錢
●郵税金四錢

第貳編 冠句の栞

本書は冠句中別に東京調の名ある一派を初め全國作家の秀吟を網羅し、巻頭には冠附の作例を擧げて初心の爲めに東西を示し冠付題林中には冠句の題數百を蒐集し、附録には上句附下句附の佳作を掲げたれば俳諧の參考ともなるべし

●正價金貳拾錢
●郵税金四錢

第參編 狂歌の栞

天明の昔にありては狂歌の流行は今日の新体詩の如く甚だ盛なりし明治の今日又追々熱心家顯れて昔の俤を見るに至るされど初學者の好伴侶となるもの世に稀なるを歎じ鶯亭主人茲に此栞を編せり最初其詠方名家の説を掲げ作例を春夏秋冬に分ちて詳に斯道の奥窟を指導せられたり

●正價金貳拾錢
●郵税金四錢

第四編 狂句の栞

川柳點の惡口と一口に云へど狂句はあらを探す計りでなく、人情を穿ち教訓の意を含み、雅となく俗となく世に廣まりしは柳樽なり、然れど中には巧みに穿ち過ぎて一寸意味の分らぬ句多し、本書は柳樽中の名句を一々丁寧に評して何人と雖も一見してあゝ成程と感心する程に委しく意味を説明せり

●正價金貳拾錢
●郵税金四錢

本美珍袖裝洋 成完册六部

館文博

目丁三町本

(五)

(四)

元兌發

區橋本日京東

風雅文庫全部完成

第五編 狂俳句の葉

●正價金貳拾錢
●郵金四錢
狂俳の可笑しきは狂句を離れて別に一の調あり本
書は狂俳の名附親なる金升君が狂俳始つて以來今
日迄の狂吟を四季に分けて集めたるものなれば俳
人は古池に蛙の飛たとをいふたものだと呆れ雑俳
家は乙なものだと嬉しがり一讀腹を抱へる珍書に
て旅行の苦中にはなくて叶はぬ妙書なり

第六編 雜俳の葉

●正價金貳拾錢
●郵税金四錢
雜俳は江戸時代の名物にして明治の世となりては
更に調を改めて目下流行に向ひつゝあり本書は所
謂雜俳中の面白き折句冠五字上下短句の類を網羅
し例の通り巻頭に作り方を委しく説き尙狂俳の粹を
題一句集は六百餘の俳題を並べ冠句は古版の粹を
抜き集められたらば空前の絶後の雜俳に興味深かるべし
全部を備へたらんには月に花に興味深かるべし

文學士土井晚翠君著

天地有情

全壹冊洋裝袖珍
正價金二十五錢
●郵稅四錢
峨々の山洋々の水以て晚翠君の詩を評すべし此篇君が
今日迄の吟峨を録したるものにして新体詩中別に一旗
幟を樹立するもの詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たる
に背かず請ふ愛讀を玉へ

文學士大町桂月君著

(全一冊袖珍上製)

大絃小絃

●正價金二十錢
●郵稅八錢

大絃急雨の如く小絃私語の如しとは、琵琶の聲のみ
ならんや。桂月先生の此書、才氣潑刺筆力縦横、以
て普通文の模範とすべく以て作文の指南とすべし

(七)

發兌元 東京本町 博文館

(六)

發兌元 博文館

文學士 大町桂月君著 〇第拾貳版。

美文 黃菊 白菊

全壹册洋裝上製
紙數百十餘頁
正價廿五錢
郵稅六錢

桂月先生の文は、戀狎を動かすこと己に久し、悲愴の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く、哀痛の音を吐きては、孤猿の幽淵に叫ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗にして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし、感情を純潔ならしむ。實に美文韻文を學ぶ者の好摸範たり。讀書家の燈下、この絶好可憐の册子なかるべからず。

鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月の三文學士合作

美文 花 紅葉

全一册袖珍美本
紙數四百廿余頁
正價金三十錢
郵稅六錢

天に春花秋葉の文あり、人間亦美文辭なかるべけんや、鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月、三文學士の文名、夙に江湖に傳ふ、今其錦心繡腸吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十篇、集つて此册子にあり、才華爛發、紙上珠を聯れ、地に擲たば金石の聲を發せんこと、すに花と紅葉を一時に看るの心地すべし、明治文壇の奇觀たること、言を待たず、天下文を好むの士、願くは一本を備へて、讀誦に資せられよ。

文學士 大町桂月君著

學生訓

全一册袖珍
正價貳拾錢
郵稅四錢

桂月先生曩に道德實踐法の著ありて道德の大綱を説かれ今又此著ありて青年學生の學問と躬行とに資せらる説く所奇警にして着實而も趣味ありて乾燥なる小言の比にあらず文章は精勁にして流麗普通文の好摸範なり學生諸君一本を備へて座右の銘とせざるべからず教育家又参考の好資料なり

發兌元博文館

青年學生諸君の友となりて學藝上實行上、教導し忠告し、訓戒するもの、學生訓是也。續學生訓出で、更に一の益友増したり、言ふ所氣が利きて穩當、文趣味あけて雄健、一讀たゞ卷の終ふるを忘る、苟も志あるもの、机上此書を缺くべからず

文學士 大町桂月君著

續學生訓

全一册袖珍美本
正價金貳拾五錢
郵稅四錢

發兌元 東京本町 博文館

故文學博士 高山林次郎君著

時代管見

全一冊 正價金卅錢 郵稅六錢

故文學博士 高山林次郎君著 文藝評論

全一冊袖珍洋裝頗美本
 文學美術の評論品臨するに於て、著者が特種的眼光を有せるは、湖の既知悉する所なり、本書は著者の多年の鑽攻究の餘に成れる論文の集り、寸鐵を殺す底の小品あり、詩を説き、或は淡蕩を以て、春風の温るが如く、秋霜の嚴なるに似たり、而して之を行く、霜の通暢の筆を以て、舞ひ足るを知らざるものあらん、手舞ひ足の踏む

正價金卅錢 郵稅六錢

是れ高山博士が當代の時勢を觀察し、評論七、十餘篇を收め、學、美術等、凡て國民的、人文、對する著者の意見、敢て江、湖の思想、混亂の今日、附録、著者一流の美文なり、今、博士逝つて歸らず、其文を誦す、噫々、其人に接する能はず

發兌元博文館

